徳蔵地区遺跡

— 古川高速道路関連河川改修に伴う発掘調査報告書 —

２００６年３月

財団法人 和歌山県文化財センター

調査地　遠景（南西から）

2区　竪穴住居26（東から）

7・8区　旧河道203号全景（西から）

4区　土器出土状況

序　文

みなべ町は和歌山県のほぼ中央にあり、「南高梅」の一大生産地として知られるところであります。春ともなれば丘陵一面に梅の花が咲き誇り、千里ヶ浜などゆたかな海岸線とともに多くの観光客を惹きつける風向明媚な土地としても有名です。

近年、このみなべ町に近畿自動車道が延伸され、インターチェンジが設けられました。これに伴い高速道路への取り付道路の整備、国道・県道などの拡幅、周辺河川の改修、また農業用地の大規模な区画整理など多くの工事が行われました。

本書はこのうち、古川の改修工事に伴って発掘調査を実施しました徳蔵地区遺跡の調査成果をまとめたものであります。

この調査成果が活かされ、自然・文化ゆたかなみなべ町の歴史遺産として受け継がれるとともに、さらなる飛躍の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地調査ならびに出土遺物の整理、さらに本書の作成にあたっては、和歌山県日高振興局を始めとする多くの方々のご指導・ご協力を賜りました。

ここに本書を上梓するにあたってあらためて厚く御礼申し上げます。

平成18年３月

財団法人　和歌山県文化財センター

理事長　木村　良樹

例　言

1．本書は、和歌山県日高郡みなべ町大字東吉田に所在する徳蔵地区遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、古川高速道路関連河川改修に伴うもので、平成13・16年度の２年次にわたって発掘調査を実施し、平成17年度に遺物整理を実施した。

3．発掘調査及び遺物整理業務は、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

4．事務及び調査組織は下記のとおりである。

専務理事　岩橋　暁（平成16年度まで事務局長兼務）
事務局長　熊崎調自（平成17年度）
事務局次長　畑中照雄（平成13年度）
松田正昭（平成13～16年度）
埋蔵文化財課長　松下　彰（平成13年度）　渋谷高秀（平成14～17年度）
主　任　村田　弘（平成13・16年度調査担当）　佐伯和也（平成13年度調査担当）
調査補佐員　山野晃司（平成13年度）

5．遺物整理に際し、立岡和人（紀の川市教育委員会）・中村貞史（元和歌山県立紀伊風土記の丘館長）の両氏には助言・協力を得た。感謝の意を表したい。

6．本文は村田・佐伯が執筆した。執筆分担は本文目次に記した。

7．遺構写真・遺物写真は村田が撮影した。

8．遺物は原則1/4で掲載したが、縄文土器の一部については1/2で掲載した。写真については任意の大きさである。

9．調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

凡　例

1．発掘調査で使用した調査コードは下記のとおりである。
平成13年度調査（古川高速道路関連河川改修に伴う１次調査）……01－33・41・42・45
平成16年度調査（古川高速道路関連河川改修に伴う２次調査）……04－33・58

2．調査の基準線は平面直角座標系（第Ⅵ系・日本測地系）を、標高は東京湾標準潮位（T.P.値）を用いた。

3．土層の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2001年度版）を使用した。

本文目次

巻頭図版

序文・例言・凡例

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1（村田）

第２章　　位置と環境 …… 2（村田）

　第１節　地理的環境 …… 2

　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　　徳蔵地区遺跡の調査成果 …… 6（村田）

　第１節　遺跡の概要 …… 6

　第２節　発掘調査および整理の方法 …… 7

　第３節　基本層位 …… 9

　第４節　発掘調査 …… 12

　　１．１・２区の調査 …… 12

　　２．３区の調査 …… 30

　　３．４・４’区の調査 …… 38

　　４．５・６区の調査 …… 53

　　５．７区の調査 …… 58

　　６．８区の調査 …… 63（佐伯）

　　７．９区の調査 …… 67

第４章　　ま　と　め …… 75（村田）

挿 図 目 次

図１　南部平野の地形分類図 …… 2
図２　みなべ町出土の銅鐸 …… 3
図３　調査対象遺跡と周辺の遺跡 …… 4
図４　調査区及び既往調査地位置図 …… 6
図５　調査区地区割図 …… 8
図６　調査区土層柱状図 ……10
図７　１・２区遺構平面・南壁土層図 ……13・14
図８　２区竪穴住居01・15実測図 ……15
図９　２区竪穴住居03実測図 ……16
図10　２区竪穴住居26実測図 ……17
図11　１区竪穴住居28・溝29実測図 ……18
図12　２区溝04実測図 ……19
図13　２区溝05実測図 ……20
図14　２区竪穴住居01・03出土遺物 ……21
図15　１・２区竪穴住居26・28出土遺物 ……23
図16　１区溝04出土遺物（１） ……25
図17　１区溝04出土遺物（２） ……27
図18　１区溝04出土遺物（３） ……28
図19　１区溝29出土遺物 ……29
図20　３・４・４’区遺構平面図 ……31・32
　　３・４区土層図 ……31・32
図21　３区土坑実測図（１） ……33
図22　３区土坑実測図（２） ……34
図23　３区土坑実測図（３） ……35
図24　３区出土遺物 ……37
図25　４区遺構変遷図 ……39
図26　４区落ち込み断面土層図 ……40
図27　４’区南東壁土層図 ……41
図28　４’区遺構平面図 ……42
図29　４区４層出土遺物 ……43
図30　４区青灰色土Ⅱ出土遺物（１） ……44
図31　４区青灰色土Ⅱ出土遺物（２） ……45
図32　４区青灰色土Ⅱ出土遺物（３） ……46
図33　４区青灰色土Ⅱ出土遺物（４） ……47
図34　４区暗灰色土Ⅱ出土遺物（１） ……49
図35　４区暗灰色土Ⅱ出土遺物（２） ……50
図36　４区溝102出土遺物 ……51
図37　４’区近世古川出土遺物 ……52
図38　６区土坑206・207実測図 ……53
図39　５・６区遺構平面図 ……54
図40　５～８区遺構平面・北壁土層図 ……55・56
図41　５・６区出土遺物 ……57
図42　旧河道203堆積模式図 ……58
図43　７区３・４・５層出土遺物 ……59
図44　７区旧河道203出土遺物（１） ……60
図45　７区旧河道203出土遺物（２） ……61
図46　８区遺構平面図 ……63
図47　８区土坑210～212・216～219実測図 ……64
図48　８区谷状地形肩部堆積模式図 ……65
図49　８区包含層出土遺物 ……66
図50　９区基本層序柱状模式図 ……67
図51　９区竪穴住居40実測図 ……68
図52　９区土坑13・14・16実測図 ……68
図53　９区遺構平面図 ……69・70
図54　９区溝102断面図 ……71
図55　９区土坑100・103実測図 ……72
図56　９区竪穴住居40出土遺物 ……72
図57　９区土坑13・14出土遺物 ……73
図58　９区土坑16・42～45・溝101・102出土遺物 …73
図59　９区土坑100・103出土遺物 ……74
図60　調査地周辺旧地形復元図 ……75
図61　谷状地形変遷模式図 ……77

表 目 次

表１　調査及び整理期間 …… 1

写　真　目　次

写真１　発掘調査風景 …… 7
写真２　炉断割状況 ……17
写真３　中世古川護岸 ……38

図　版　目　次

図版１　１・２区調査前全景（東から）
１・２区全景（東から）
図版２　１・２区西半部全景（東から）
２区東半部全景（西から）
図版３　２区竪穴住居01全景（東から）
２区竪穴住居15全景（東から）
図版４　２区竪穴住居01・15全景（東から）
２区竪穴住居01・15南北セクション西壁土層（北半部）（南西から）
２区竪穴住居01・15南北セクション西壁土層（南半部）（西から）
図版５　２区竪穴住居03全景（南から）
２区竪穴住居03セクションベルト西壁（西から）
２区竪穴住居03炉跡部分（南西から）
図版６　２区竪穴住居26全景（東から）
２区竪穴住居26全景（南から）
図版７　２区竪穴住居26土器出土状況（南から）
２区竪穴住居26セクションベルト（南東から）
図版８　１区溝04（北から）
１区溝04完掘状況（北から）
図版９　１区溝04土器出土状況（西から）
１区溝04セクション１（東から）
１区溝04セクション３（南東から）
図版10　３区全景（南から）
３区全景（北東から）
図版11　３区土坑68（西から）
３区土坑72セクション（西から）
図版12　３区土坑87セクション（西から）
３区南壁土層（北西から）
図版13　４区第１遺構面全景（東から）
４区中世古川護岸（北から）
図版14　４区第２遺構面全景（北から）
４区第２遺構面全景（南東から）
図版15　４区溝102（南東から）
４区溝103（北から）
図版16　４区最終遺構面全景（南東から）
４区最終遺構面全景（東から）
図版17　４区南北セクション（南東から）
４区南北セクション溝102部分（南東から）
４区南北セクション中世古川部分（南東から）
図版18　４区南壁土層（北西から）
４区青灰色Ⅱ層遺物出土状況（北東から）
図版19　４’区近世古川護岸杭列（北東から）
４’区近世古川護岸杭列（西から）
図版20　４’区東壁土層（近世古川肩ライン）（北西から）
４’区最終遺構面全景（西から）
図版21　５・６区３層鋤溝群（東から）
５・６区４層上面柱穴群（北から）
図版22　５・６区５層上面全景（西から）
６区土坑207東西セクション（南から）
６区土坑206南北セクション（東から）
図版23　５～８区全景（西から）
図版24　６区８層上面土坑220（北から）
６区８層上面土坑221（北から）

図版25　7・8区旧河道203全景（西から）
7・8区旧河道203全景（北西から）
図版26　7区旧河道203内橋脚（？）杭列（西から）
7区旧河道203内橋脚（？）杭列（南から）
図版27　7・8区セクション①（西から）
7区旧河道203堆積土層（北西から）
図版28　8区溝208全景（北東から）
8区縄文遺構群（北西から）
図版29　8区土坑211・212（北東から）
8区土坑211セクション（北から）
8区土坑212セクション（北から）
図版30　8区土坑218・同セクション（東から）
8区土坑216セクション（西から）
8区縄文土器出土状況（南から）
図版31　8区土坑217セクション（北から）
8区土坑210セクション（西から）
8区土坑219（南から）
図版32　9区調査前全景（東から）
9区全景（東から）
図版33　9区西半部全景（西から）
9区中央部全景（西から）
図版34　9区竪穴住居40検出状況（西から）
9区竪穴住居40（東から）
図版35　9区竪穴住居40カマド部分（西から）
9区竪穴住居40南北セクション南半部（西から）
9区土坑104・105（西から）
図版36　9区土坑16（北西から）
9区土坑34（西から）
9区土坑100（北東から）
図版37　9区東端落ち込み部溝101（北から）
9区東端落ち込み部溝102（北から）
図版38　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版39　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版40　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版41　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版42　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版43　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版44　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版45　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版46　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版47　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版48　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版49　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版50　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版51　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版52　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版53　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版54　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版55　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版56　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版57　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版58　徳蔵地区遺跡出土遺物
図版59　徳蔵地区遺跡出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

遺跡の所在するみなべ町は南北に長い和歌山県のほぼ中央に位置しており、近年御坊から南進する高速自動車道及びそのインターチェンジが建設された。これに伴い、町内ではインターチェンジへのアクセス道路の拡幅工事や圃場整備、付近を流れる河川の改修など関連工事が数多く実施された。本調査もこれらの工事の一環であり、二級河川古川の改修工事に伴うものである。

古川は南部平野の北東部にあたる晩稲地区一帯の湧水・溜池群を水源として、八丁田圃と称される中世の条里型水田の景観を保持している水田地区の東境部をほぼまっすぐに流れ、高田土居城跡の南に沿って緩やかに湾曲したのち古川支線・古川排水路を併せて、南部湾付近で南部川と合流している。

発掘調査の対象地となった箇所は、周知されている徳蔵地区遺跡内であるが、工事に先立ち平成12年に県教育委員会が８箇所のトレンチを設け試掘調査を行った。その結果、県道上富田南部線に架かる梅田橋の南西側約110ｍの区間においては溝・土坑状遺構などを検出し、遺物としては古墳時代初めの土師器が多く確認された。また梅田橋の北東側約150ｍの区間においても土坑状遺構・落ち込みが確認されるとともに縄文土器（後期）・奈良時代の須恵器などが出土した。このためこの区間においては改修工事に先立ち本格的な発掘調査の必要があるとの行政判断に達した。これを受け、工事担当課である県日高振興局河川課と県教育委員会文化遺産課との協議・調整がなされ当文化財センターが発掘調査を委託されることとなった。

発掘調査は、平成13年度12月から３月にかけてと16年度10月から12月にかけての２次にわたって実施した。これら一連の調査においては古墳時代の竪穴住居、縄文時代晩期から奈良時代にかけての大規模な河道の跡のほか数多くの土坑・溝などの遺構を検出した。またこれに伴って出土した遺物もコンテナ換算で66箱におよび、多大な成果を得ることができた。

このためこれらの資料を整理し報告書を作成することとなった。整理作業は、平成17年９月から着手し、図面・写真類の整理、遺物洗浄・注記・接合・実測など基礎的作業を進めた後、トレース作業、図版作成などを進めるとともに本文の執筆を行い、平成18年３月に本書を刊行するに至った。

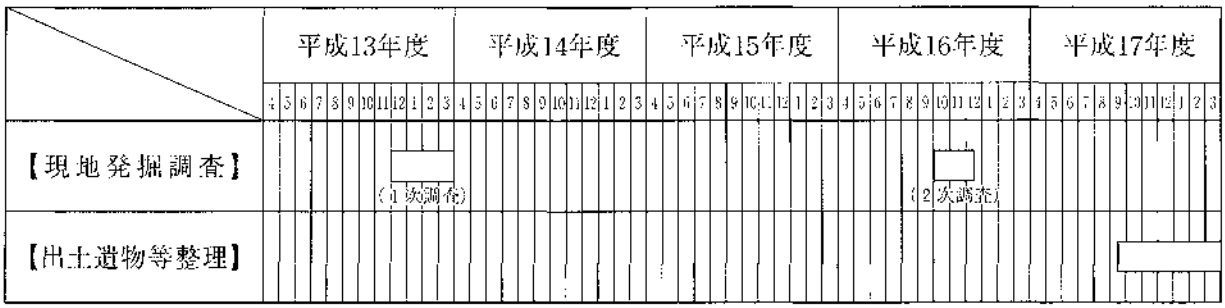


表１　調査及び整理期間

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

遺跡の所在するみなべ町は和歌山県のほぼ中央部、日高郡の南西部に位置している。旧南部町、旧南部川村であり、両町村は平成16年10月に合併によりみなべ町となった。面積は約120.26km²で、人口は平成18年１月現在約14,950人を数える。南東及び北東で田辺市に、北西では印南町に行政境を接している。行政圏は御坊日高管内であるが、商業・経済は隣接する田辺市に依存するところが大きい。町の中心部は南部湾の海岸線に沿って形成された砂堆上に位置し、住宅や商店が集中している。また、南部平野の奥まりに位置する西本庄付近にも住宅が集中する。南部川は山間部を縫った後、この西本庄付近から平野部に出て、緩やかに南西に流れ南部湾へと注いでいる。この南部川の南東部に沖積地が広がっており、豊かな穀倉地帯となっている。とりわけ八丁田圃と称される水田地帯は、かつて条里型地割の109m四方の方形区画水田が整然と並んでいた。近年この八丁田圃内にインターチェンジがつくられ、さらに圃場整備が進められ、往時の景観を大きく変容させる結果となったが、それでもなおこの水田地帯は中世荘園の景観の一端を今に伝えている。

南部平野周辺の丘陵・山裾一帯は「南高梅」を主品種とする梅の一大生産地であり、全国にその名を知られている。観光資源としては、岩代・千里梅林をはじめ、海岸線は田辺南部県立自然公園の一部をしめており、南部湾に浮かぶ鹿島やアカウミガメの産卵地で有名な千里海岸などの景勝地がある。交通は海岸線に沿ってＪＲ紀勢線が走り、町内には岩代・南部の二つの駅がある。国道42号線はＪＲとほぼ平行して走り、市街地から分岐して南部川に沿うように国道424号線が龍神方面に向かう。また、長く待たれていた高速道路の南進が進み、平成15年には近畿自動車道が大阪から南部まで開通した。これによって町民の利便はもとより観光客の誘致が大きく進められた。

なお、今回の調査対象遺跡である徳蔵地区遺跡は前述の八丁田圃南端の沖積地上に位置している。

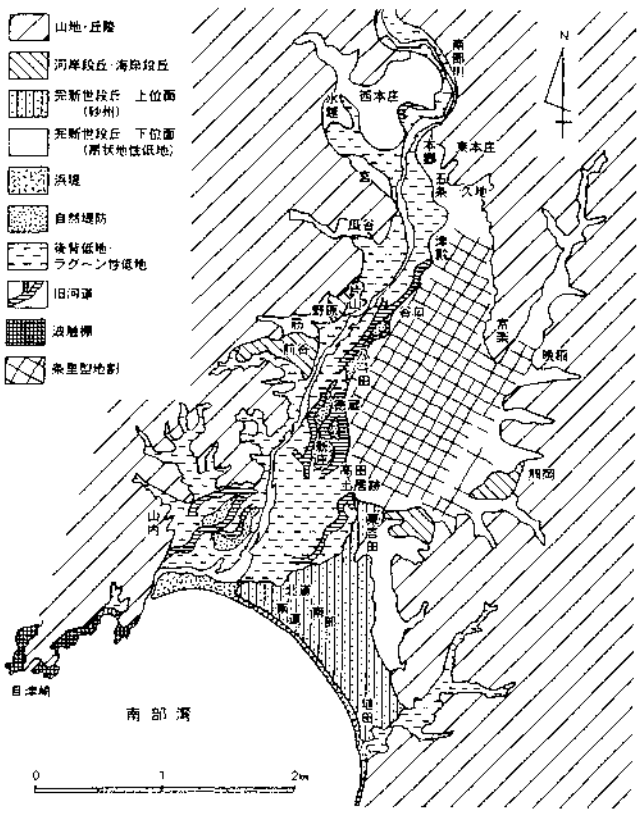


図１　南部平野の地形分類図（額田雅裕1999）

第2節　歴史的環境

平地が少ない紀南地方にあって、南部川下流域には比較的まとまった平野が開けている。この平野を基盤に原始・古代から数多くの遺跡が残されている。

平野部周辺で最も時代が遡る遺跡は徳蔵地区遺跡である。近年近畿自動車道のインターチェンジ建設に伴って大規模な発掘調査がなされた結果、西日本で初めての縄文時代中期前半の集落が検出され、また西日本では最古の埋甕も発見されている。徳蔵地区遺跡では続く後期の住居跡も検出されている。出土遺物も多く、中部山岳・南関東・東海をはじめ西日本一帯の各地の土器が確認されており、当時から海に面した地の利を活かし各地との活発な交流がなされていたことが窺われる。

そのほか縄文時代の遺跡としては、丘陵上に位置する中期の岡の段遺跡や大塚遺跡でも後期の土器が出土している。これらのことから縄文時代中・後期の集落が南部川河口近くの微高地や海岸段丘上に集中して展開していたことが窺えよう。

弥生時代の集落は前期段階では徳蔵地区遺跡周辺に展開すると考えられる。また、同時期のものとしては、大月津泊１遺跡や砂丘上に立地する墓地の片山遺跡がある。中期になると集落は拡がりを見せ、南部川の自然堤防上に位置する津殿遺跡のほか、丘陵上や丘陵裾部などでも当時期と考えられる石器類が多く出土している。これらには青蓮谷遺跡の大型石庖丁・柱状片刃石斧、田文字Ｉ遺跡の大型石庖丁、上ノ尾遺跡の環状石斧などがある。また、片山遺跡や高見遺跡などの墓地は、砂丘上に広く展開するようになる。

弥生時代の中期の終わり頃から後期前半にかけて県下的に見られる傾向として、平地の集落は山の上に移る。高地性集落と呼ばれるこれらの遺跡は平野周辺の山上・丘陵上に多く残されており、この地域で10箇所以上を数える。その中で月向遺跡は中期末から後期前半まで継続しており、畿内的な高地性集落の消長と連動する。ただ、その他多くの高地性集落は、後期になってから集落の活動をはじめており、後期後半期まで営まれている集落も存在するなど紀北地方の様相とは異なった傾向が窺われると言えよう[註1]。また、この時期の大きな特徴として挙げられるのは、農耕祭祀に使われたとされる銅鐸の出土である。南部平野を取り囲むように６箇所６個の銅鐸が丘陵上・山上から出土している。このうち扁平紐式銅鐸の下ノ尾銅鐸以外は突線紐式銅鐸で、新式の大型銅鐸が多い特徴がある。

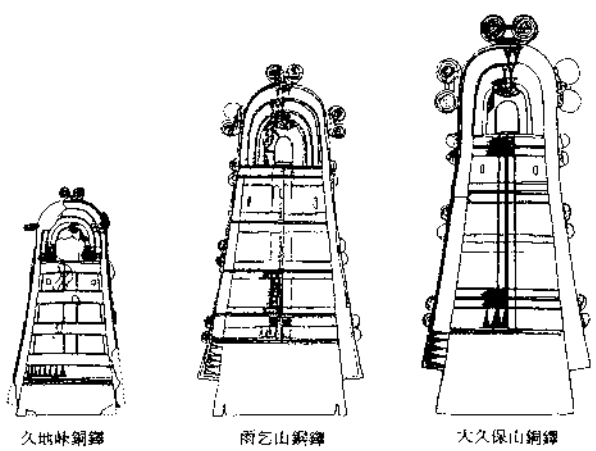
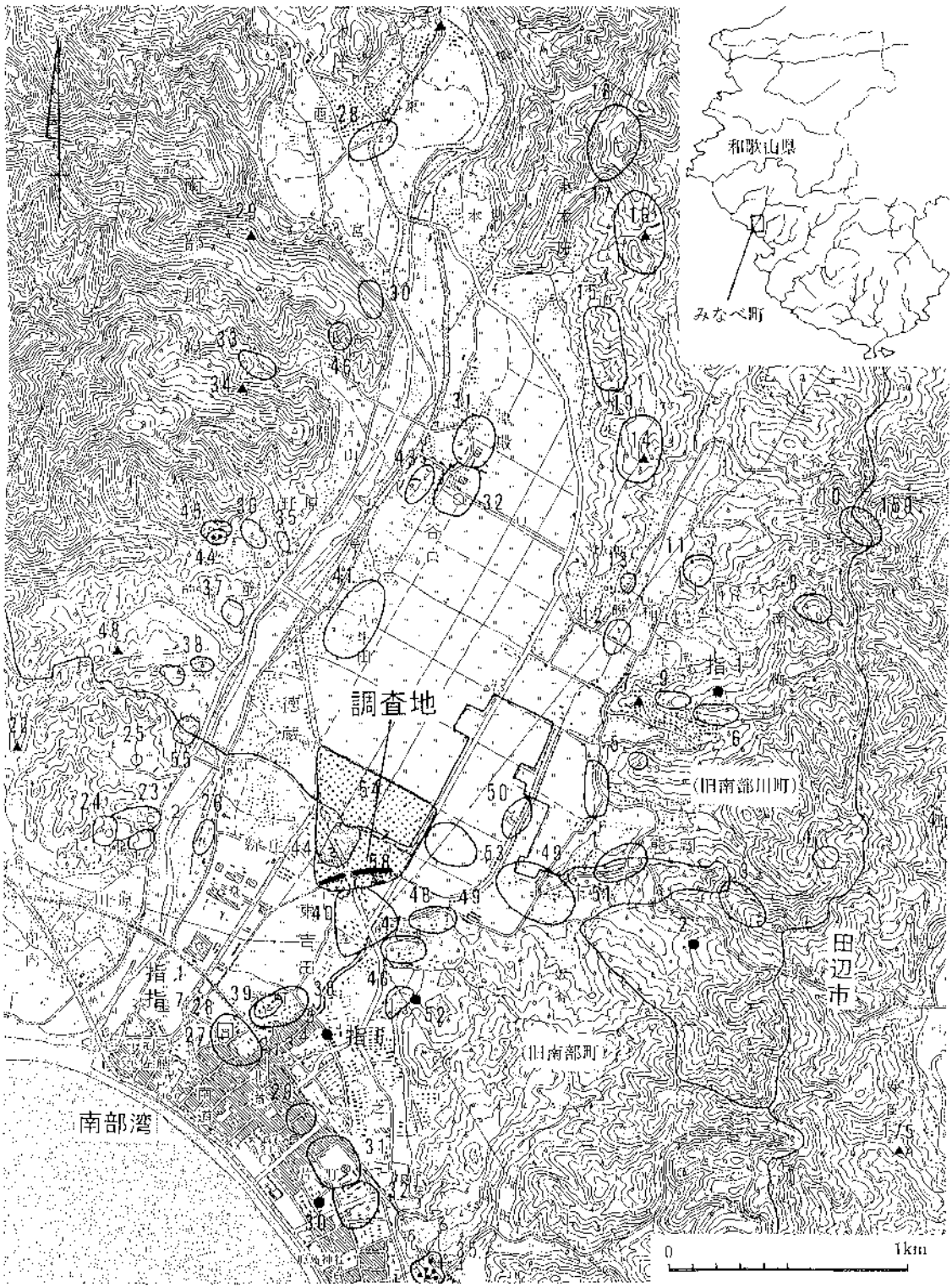


図２　みなべ町出土の銅鐸

後期末頃になると集落は再び平地に移り、津殿遺跡や徳蔵地区遺跡の周辺に展開し、古墳時代へと継続するものと考えられる。



調査地　　54. 徳蔵地区遺跡

23. 城山古墳群　　24. 起請ヶ谷窯跡　　25. 閉谷窯跡　　26. 新庄遺跡
27. 三鍋王子跡　　28. 高見遺跡　　29. 雨乞山銅鐸出土地　　31. 津殿遺跡
32. 片山遺跡　　35. 埴田古墳群　　36. 田文字Ⅰ遺跡　　39. 芝古墳群
41. 八斗田遺跡　　47. 圖の段遺跡　　50. 土坪遺跡　　53. 東吉田Ⅰ遺跡
55. プゼン寺跡

図３　調査対象遺跡と周辺の遺跡

南部川流域の古墳はすべて海岸近くに立地する。これらのうち前期に遡る古墳は明らかではないが、鏡や直刀が出土した城山２号墳が遺物の内容などから前期古墳の可能性がある。中期古墳には箱式石棺を主体部として鏡や刀、銅鏃などを副葬した城山１号墳がある。また、古墳時代初頭から城山古墳群が造営された時期頃に、片山遺跡では弥生時代の墓制である方形周溝墓が造られている。古墳時代後期になると、芝古墳群・植田古墳群などの群集墳が造営されるが、これらは10基に満たない小規模なものである。

文献での明確な「みなべ」の初現は万葉集で、大宝元年(701)の持統天皇の「三名部の浦……」の歌に見える。律令制下でのみなべは日高郡に属し、「和名類聚抄」などにみえる南部郷は、南部川流域一帯に比定されている。奈良市平城京跡の長屋王邸跡や西隆寺東門跡から出土した木簡から、奈良時代に「調」として南部郷より塩を納めていたことが明らかになっている。この時期の製塩土器が、大日津泊りⅠ遺跡で出土している。奈良時代の須恵器を生産した窯としては、南部川右岸の山裾に起請ヶ谷窯跡や閑谷窯跡がある。このほか田文字火葬墳墓では奈良時代の蔵骨器が発見されている。

平安時代中頃には、京都八坂神社より勧請して須賀神社が造営される。平安時代の後期になると中央貴族を中心として熊野三山への参詣が行われるようになり、参詣道沿いには千里王子社や南部王子社などが造られる。平安時代末の日記「吉記」では、南部王子社の近くに海福寺という寺があったとされ、安養寺の前身とする説もある。最近の安養寺跡の発掘調査では、少なくとも鎌倉時代までは遡ることが判明している。

鎌倉時代の初め頃南部川流域は高野山領の南部荘となり、以後室町時代中頃まで存続する。荘園に関わる文書は高野山に数多く残され、規則正しく区割りされた条里は中世荘園の景観を今に残すものである。前述したようにインターチェンジの建設に伴ってこの条里地割の中で大規模な発掘調査が実施されたが、その結果、この条里が鎌倉時代まで遡ることが明らかにされている。

在地領主が築いた山城や館跡には、平野部を扼する位置の半須山に築かれた半須賀城跡や高田土居城跡などがある。半須賀城は県下屈指の規模をもつ山城で、発掘調査によって中国製陶磁器など多量の遺物が出土している。また、高田土居城は先に述べた条里型地割の残る八丁田圃の南端に造られた城で、従来方形単郭の構造をもつ城と考えられてきたが、近年の発掘調査の結果、内堀に囲繞された長方形の内郭部に外堀で囲まれた外郭部を備えたもので、北の外郭部は最終段階で北側と西側に二重、東側に三重の堀を巡らしていることが判明した。また、この調査結果や現在残る地割りなどから城全体の規模は南北約225m、東西約150mであると推定されている。

注記

注１）集落が弥生時代後期後半代以降まで丘陵上に残る現象は、日高川以南に多く、御坊市中村地区遺跡では古墳時代前期まで継続している。また、古墳時代前期のみ集落が丘陵上に存在する例もあり、南部川流域でも同様のことが言える可能性がある。

第３章　徳蔵地区遺跡の調査成果

第１節　遺跡の概要

今回の調査対象地は、徳蔵地区遺跡であるが、第１次調査が実施された平成13年度時点では、この遺跡名はなく、古川遺跡・梅田遺跡・高田遺跡の３遺跡として周知されていた。したがって事業名とすれば古川遺跡・梅田遺跡・高田遺跡の発掘調査となる。遺跡名の変更は、これらの遺跡に近接する北側でインターチェンジ建設に伴って実施された大規模な徳蔵地区遺跡の発掘調査の結果などから、同様な沖積地に営まれた縄文時代から中近世に至る集落の複合遺跡であることから一つの遺跡として集約されたものである。なお、徳蔵地区遺跡に取り囲まれる形で所在している高田土居城跡は館跡という明確に遺跡の性格を異にすることから単独の名称となっている。

調査地は新たに設定周知された徳蔵地区遺跡の南辺部にあたり、八丁田圃と称されている中世の条里型地割の残る水田域からは南へ100mほど離れている。この付近の水田化は、文献によれば鎌倉時代前期にさかのぼり、それ以後連綿として水田として利用されてきたようである。調査時の現況は水田と、一部養魚場となっていた。

なお条里の坪名でいえば１～４区が梅田、５～９区が砂取に相当している。

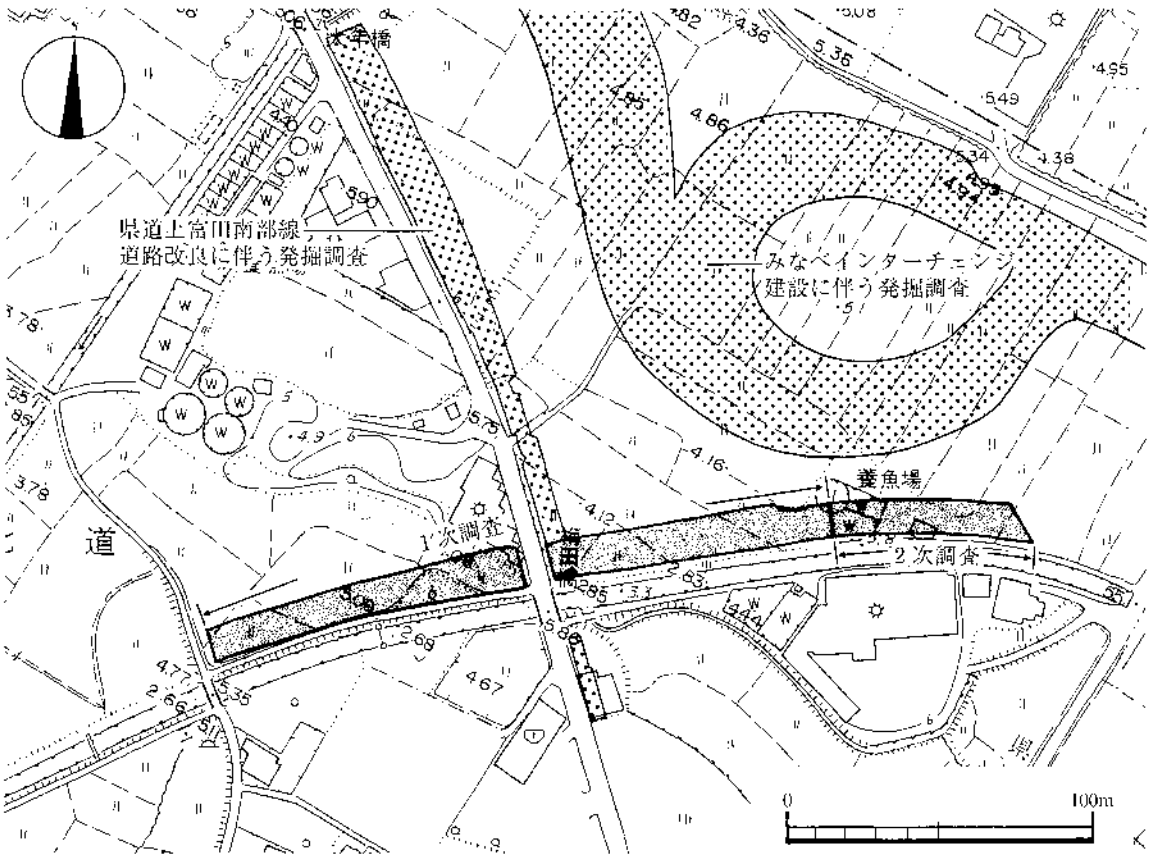


図４　調査区及び既往調査地位置図

第２節　発掘調査および整理の方法

発掘調査は１次・２次調査とも機械・人力掘削等の土木工事を工事請負方式で業者に委託し、当センター調査員が現場での指揮に当たった。基本的には盛り土・近代以降の耕作土については機械掘削により除去した後、人力による掘り下げを行った。実測作業は１次調査においては個別遺構図・土層図及び遺物出土状況などは適宜１／５・１／10・１　20などでそれぞれ手書きによる実測を行ったが、遺構平面図については業者に委託し航空写真測量により１／20図化を行い、合わせて１／100の平面図を作成した。２次調査においては、航空写真測量を実施せず、すべて手書きにより作成している。

現地での写真は調査担当者が、大判カメラ（４×５判　白黒）・中判カメラ（６×７判　白黒）小判カメラ（35㎜判　ネガカラー・スライド）により適時撮影した。

写真１　発掘調査風景

調査区名

今回の調査コードは第１次調査が01－33・41・42・45である。01は2001年度、33は合併前の南部町、41・42・45は遺跡名を表す。遺跡名は改正前のもので、41は古川遺跡・42は梅田遺跡・45は高田遺跡を指す。第２次調査は04－33・54で、54が改正後の徳蔵地区遺跡である。

調査区名は河川改修工事の進展に伴って、下流部（西側）から上流に向かって順次１～９区と仮称し、個々の調査区は現況の畦畔などを利用して設定したものであるが、本報告書においてもこれを踏襲している。このうち第１次調査に相当するのが１～８区で、１～４区は県道上富田南部線を挟んで西側（下流部）、５～８区は東側（上流部）にあたる。９区はさらにその上流部に相当するもので第２次調査として実施した。これらを合算した調査面積は約3,500㎡である。

地区割（図５）

調査地の地区割は日本測地系（旧測地系）を用い、国土座標第Ⅵ系のＸ－246.100㎞、Ｙ＝－61.500㎞の交点を基点とし、まず南と西に100ｍピッチで分割して100ｍ×100ｍの大区画を設定した。大区画には北から南に１・２・３・・・と算用数字を、西から東にはＡ・Ｂ・Ｃ・・と大文字のアルファベットを順次当て、１Ａ・２Ｂと算用数字とアルファベットと組み合わせた名称を与えた。次いでこの大区画内を４ｍメッシュの方眼に分割し、４ｍ×４ｍの625の小区画を設定し、西から順に１・２・３・・・25と算用数字を、北から南にはａ・ｂ・ｃ・・ｙと小文字アルファベットを順に割り当て、各小区画名は大区画名とともに併用して１Ａ１ａ・２Ｂ25ｂなどと

呼称することにした。遺物の取り上げは、基本的にこの小区画に基づいておこなっている。

なお、この地区割は平成10年度から始まったインターチェンジ建設に伴う徳蔵地区遺跡の調査に準拠するものであり、本調査を含めて当センターの周辺の調査はすべてこれに拠っている。本調査区は図５に明示したように中区画で言えば、７Ｆ区・７Ｇ区・７Ｈ区・７Ｉ区の４区画にまたがっている。

整理作業

整理事業は当センター担当者が、整理補助員・整理作業員を直接雇用して業務にあたった。出土遺物の洗浄については、金属片を除くすべてについて実施をしたが、注記については必要最低限をめどとしたため全体量の80%の実施したにとどまっている。

接合作業については、口縁部及び底部を核として取上げ単位内で実施した後、隣接する遺構・包含層など接合の可能性の高いものまで広げていった。復元作業については、報告書への掲載遺物を対象として実施している。これらの基礎的諸作業を経た後、遺物実測・トレース・組版等の作業を実施した。

また遺物実測図555枚についてはファイル二冊にまとめている。現地での遺構実測図をはじめ整理作業で作成したこれらの資料については和歌山県文化財センターで保管しているが、出土遺物については、和歌山県教育委員会に移管した。

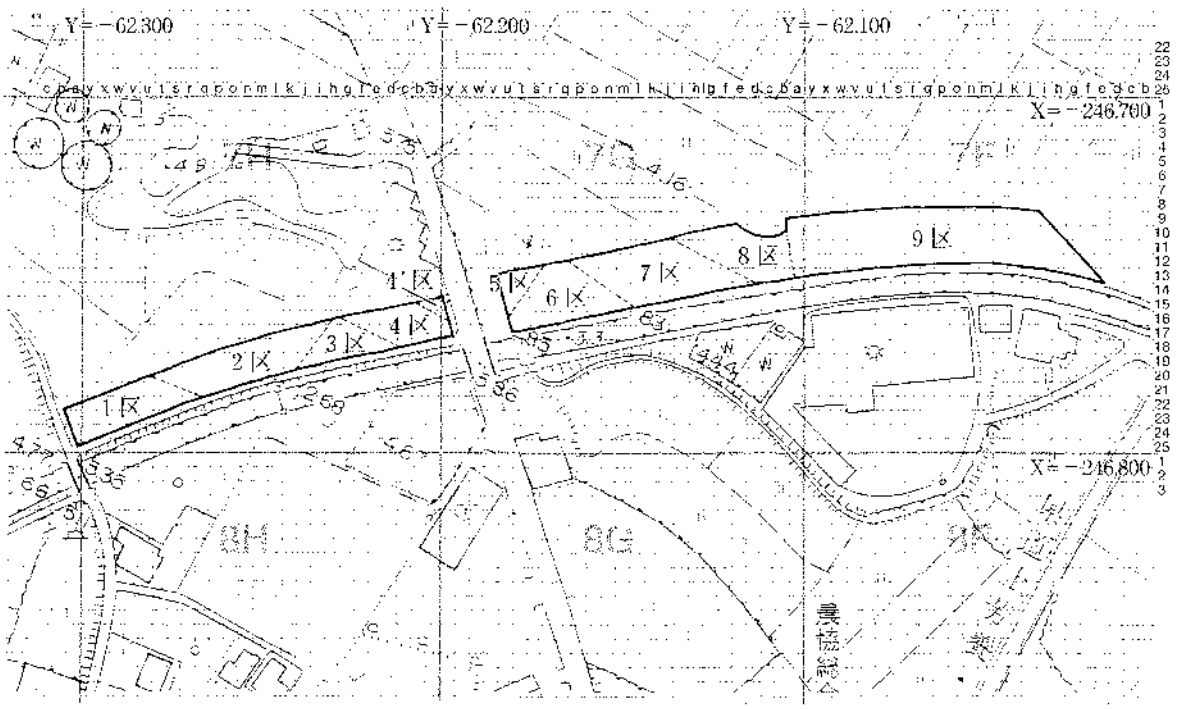


図５　調査区地区割図

第3節　基本層位

各調査区の土層を図6に柱状模式図にして明示した。調査区の延長は東西に300m近くときわめて長く、またその間を小さな谷筋が横断しているなど起伏に富んでいる。この谷は4区～8区に存在する第4層（室町時代の水田層）の下で確認された。ここでは地区ごとの基本層序を確認するとともに、そのつながりと全体としての地形に触れておきたい。

1・2区は調査区の西側、下流部に相当する箇所であるが、ここでは第1層は現代の水田耕作土、第2層はその床土、第3層として黄褐色砂礫層（2.5Y6/1）がある。この第3層は地山であり、この上面において古墳時代の遺構が検出された。大塚遺跡の所在する南側から延びる砂堆の末端部に相当すると考えられる地区であり、検出された住居跡の削平度合いなどから水田化に伴い後世かなりの削平を受けたと推定される。

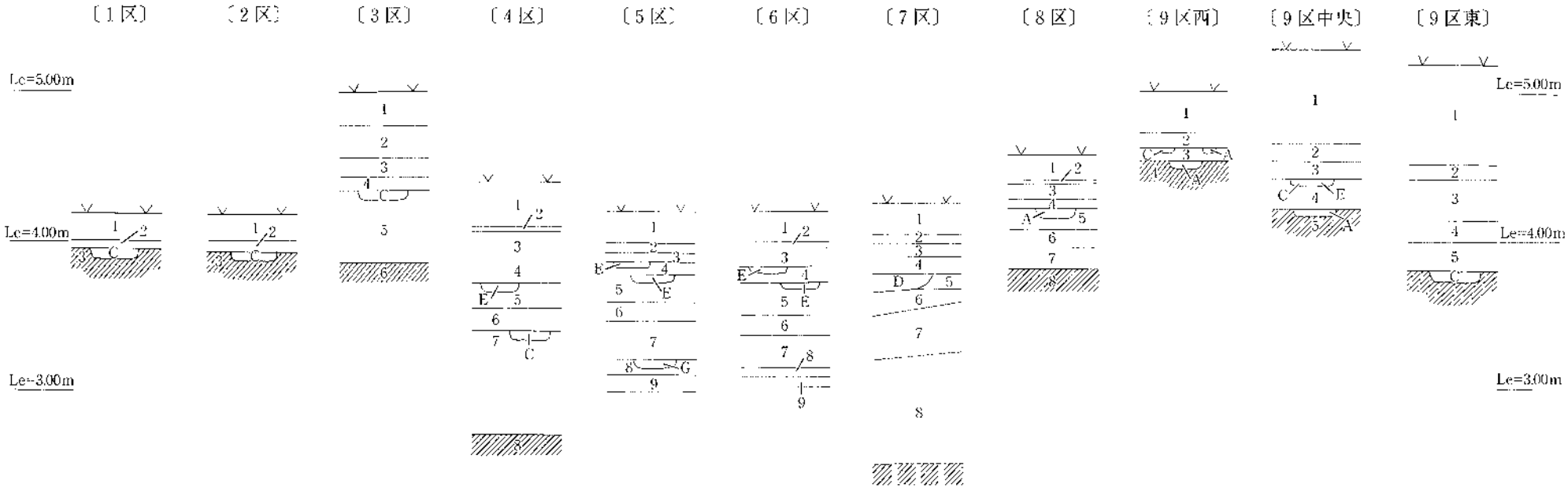
3区の第1層は現代の耕作土、第2層は盛土、第3層は近世の水田層、第4層は古墳時代の包含層である。この第4層を除去した面で古墳時代の遺構が検出された。第5層も古墳時代の包含層である。その下の第6層としたものは地山であり、この地山レベルは、前述の1・2区の地山とほとんど高低差は認められない。

4区は現代の耕作土・床土下に近世の水田層（第3層）、さらにその下に2層にわたって室町時代の水田層がある。このうち第5層を切って中世の古川が開削されている。第7層の青灰色粘質土（5BG5/1）は流路の堆積土と考えられるもので古墳時代初めの遺物が多量に含まれていた。この上面で古墳時代後期の溝が検出されている。第8層の青灰色粗砂礫層（5BG6/1）は地山で、3区の地山に比べ1m以上低くなっており、この4区を境にして東側に向かって地山が急激に落ち込んでいる。

県道上富田南部線を挟んで東側にあたる5～8区は第4層までが共通する。第1層・第2層は現代の耕作土・床土であり、6区は床土下に近世の水田層（第3層）があり、第4層は黄褐色シルト（2.5Y5/3）と灰色シルト（N5.5/0）の互層で中世の遺物を含む。この上面において中世の遺構が検出されている。第5層は明黄褐色シルト（2.5Y6/6）、第6層は黄褐色シルト（2.5Y5/6）で、ともに古墳時代から奈良時代の遺物を含む。このうち第5層上面において中世の遺構が検出されている。

第7層以下は遺物が確認されていないが、地山とは考え難い層であり、この付近では地山はTP2.5m以下とかなり下がっているものと推定される。

7区は第1層現代の耕作土、第2層床土、第3層黄褐色シルト（2.5Y5/3）、第4層黄褐色シルト（2.5Y5/3）と灰色シルト（N5.5/0）の互層、第5層明黄褐色シルト（10YR6/8）、第6層明黄褐色シルト（10YR6.5/8）、第7層黄褐色シルト（10YR5/8）に灰白色シルト（N7/0）がブロック状に入った層、第8層褐色シルト（10YR4/4）に灰色シルト（N5.5/0）が斑点状に入った層で



〔1区〕
1．現代の耕作土
2．灰　　土
3．黄褐色砂礫
（2.5Y6/1）
（地山）

C：古墳時代の遺構

〔2区〕
1．現代の耕作土
2．灰　　土
3．黄褐色砂礫
（2.5Y6/1）
（地山）

C：古墳時代の遺構

〔3区〕
1．現代の耕作土
2．褐色砂質土
（10YR4/4）
（盛土）
3．褐色砂質土
（7.5YR4/4）と
にぶい黄褐色砂質土
（10YR4/3）の互層
4．にぶい黄褐色砂質土
（10YR4/3）
（中世の耕作土）
5．灰黄褐色砂質土
（10YR5/2）
6．灰黄褐色砂質土
（10YR4/2）に礫が入る（地山）

C：古墳時代の遺構

〔4区〕
1．現代の耕作土
2．灰　　土
3．明黄褐色砂質土
（10YR7/6）と
褐灰色砂質土
（10YR6/1）の互層
（近世の耕作土）
4．にぶい黄橙色砂質土
（10YR6/3）と
灰白色砂質土
（10YR7/1）の互層
（中世後期の耕作土）
5．灰オリーブ砂質土
（5Y5/2）と
灰白色砂質土
（5Y6/1）の互層
（中世の耕作土）
6．灰色砂質土（10Y6/1）
7．青灰色粘質土
（5B5/1）
8．青灰色細砂礫
（5BG6/1）（地山）

E：中世の遺構
C：古墳時代の遺構

〔5区〕
1．現代の耕作土
2．灰　　土
3．黄褐色シルト
（2.5Y5/3）
4．黄褐色シルト
（2.5Y5/3）と
灰色シルト
（N5.5/0）の混層
（中世の耕作土）
5．明黄褐色シルト
（2.5Y6/6）
6．黄褐色シルト
（2.5Y5/6）
7．黄褐色シルト
（10YR5.5/6）
8．黄褐色シルト
（10YR5/7）
9．褐色シルト
（10YR4/4）に
灰色シルト（N5.5/0）
が混じる

E：中世の遺構
G：時期不明

〔6区〕
1．現代の耕作土
2．灰　　土
3．黄褐色シルト
（2.5Y5/3）
4．黄褐色シルト
（2.5Y5/3）と
灰色シルト
（N5.5/0）の混層
（中世の耕作土）
5．明黄褐色シルト
（2.5Y6/6）
6．黄褐色シルト
（2.5Y5/6）
7．黄褐色シルト
（10YR5.5/6）
8．黄褐色シルト
（10YR5/7）
9．褐色シルト
（10YR4/4）に
灰色シルト（N5.5/0）
が混じる

E：中世の遺構

〔7区〕
1．現代の耕作土
2．灰　　土
3．黄褐色シルト
（2.5Y5/3）
4．黄褐色シルト
（2.5Y5/3）と
灰色シルト
（N5.5/0）の混層
（中世の耕作土）
5．明黄褐色シルト
（10YR6/8）
6．明黄褐色シルト
（10YR6.5/8）
7．黄褐色シルト
（10YR5/8）に
灰白色シルト
（N7/0）がブロック
状に入る
8．褐色シルト
（10YR4/4）に
灰色シルト（N5.5/0）
が斑状に入る

D：古代の遺構

〔8区〕
1．現代の耕作土
2．灰　　土
3．黄褐色シルト
（2.5Y5/3）
（中世の耕作土）
4．明黄褐色シルト
（10YR6/8）
5．暗褐色粗砂
（10YR3/3）
6．灰黄褐色粗砂
（10YR4/2）
7．にぶい黄褐色粗砂
（10YR5/4）に
褐灰色粗砂
（10YR4.5/1）と
暗灰黄色粗砂
（2.5Y4/2）が
ブロック状に混じる
8．0.2～10cm大の礫層

A：縄文時代の遺構

〔9区西〕
1．現代の盛土
2．オリーブ色土
（5Y5/3）
3．オリーブ褐色土
（2.5Y4/3）
4．黄灰色土
（2.5Y4/1）
（旧山）

A：縄文時代の遺構
C：古墳時代の遺構
E：中世の遺構

〔9区中央〕
1．現代の盛土
2．オリーブ色土
（5Y6/3）
3．灰色土
（N6/）
（中世の包含層）
4．にぶい黄色土
（2.5Y6/3）
5．暗灰黄色土
（2.5Y5/2）

〔9区東〕
1．現代の盛土
2．オリーブ色土
（5Y6/3）
3．灰色土
（N6/）
4．灰色粘質土
（5Y5/1）
5．灰色砂質土
（N6/）
6．緑灰色粘質土
（5G6/1）

図6　調査区土層柱状図

ある。このうち第３層は近世の水田層、第４層は室町時代の水田層である。第５層は古墳時代から奈良時代の遺物を含む包含層であり、この上面で遺構が検出されている。なお、この近辺で断ち割った結果、地山は５cm前後の礫層で、ＴＰ2.5mで確認されている。

８区は第１層現代の耕作土、第２層床土、第３層黄褐色シルト（2.5Y5/3）、第４層明黄褐色シルト（10YR6/8）、第５層暗褐色粗砂（10YR3/3）、第６層灰黄褐色粗砂（10YR4/2）、第７層にぶい黄褐色粗砂（10YR5/4）に灰褐色粗砂（10YR4.5/1）と暗灰黄色粗砂（2.5Y4/2）がブロック状に入った層、第８層0.2～10cm大の礫層となっている。このうち第３層は近世の水田層。第４層は中世の包含層、第５・６層は縄文時代中期の包含層であり、遺構は第５層上面で検出された。第８層の礫層は地山であり、ＴＰ４ｍほどとここでは急激に上がってきている。

９区西側は第１層現代の盛土、第２層オリーブ色土（5Y5/3）、第３層オリーブ褐色土（2.5Y4/3）、第４層黄色土（2.5Y4/1）となっている。このうち第２層は古墳時代から中世の遺物を含む包含層、第３層は縄文時代（後期？）の包含層で、この上面で中世及び古墳時代の遺構を検出した。また第４層は無遺物層（地山）で、この面において縄文時代の遺構が検出された。

９区中央は第１層現代の盛土、第２層オリーブ色土（5Y6/3）、第３層灰色土（N6/0）、第４層にぶい黄色土（2.5Y6/3）、第５層暗灰黄色土（2.5Y5/2）となっている。このうち第２層・第３層は古墳時代から中世の遺物を含む包含層、第４層は古墳時代の包含層で、この上面が中世の遺構面である。第５層は無遺物層（地山）で、この上面で古墳時代と縄文時代の遺構が検出された。

９区東側は第３層まで中央部と同じであるが、第３層の灰色土（N6/0）がより厚く堆積する。その下の第４層・第５層はともに灰色粘質土で、古墳時代の遺物を含む包含層である。第６層は緑灰色粘質土（5G6/1）で、無遺物層となっており、この上面で古墳時代の遺構が確認された。

以上、各調査区の基本層序について概略を述べたが、西側の１～３区は大塚遺跡の所在している南側の砂堆の末端部付近と考えられ、地山は高い。この地山は４区からなだらかに落ち始め５・６区でもっとも深くなり、８区付近で再び地山は上がりだす。この地山の深い部分は小さな谷筋と考えられ、この部分を縄文時代から古墳時代にかけて河が流れていた。また中世後期に古川が整備され流路となっていたのもこの部分である。８区で上がった地山は９区中央部付近までその高さを保っているが、この部分は、インターチェンジの建設に伴う調査によって確認された縄文時代の集落が展開している沖積地の微高地の東端部に当たっているものと思われる。この微高地も９区の東側で終わり、地山は再度落ち始める。

以上述べたように調査区は西側の微高地と東側の微高地、その間の谷筋部の大きくは三箇所にわかれており、この地形を表象するように遺構密度が高かったのは西側微高地に相当する１～３区と東側微高地に相当する８区～９区中央部付近までであった。

第４節　発掘調査

１．１・２区の調査

１・２区は調査区全体の西端部に相当する地区である。現況は水田となっており、基本層序で述べたようにこの水田及び床土を除去した面が地山となっていた。この地山面においていくつかの遺構を確認した。

検出した遺構は全体に浅く、竪穴住居などは深さ10cm未満のものも見られる。このことからこの１・２区においては後世――おそらく現在の水田をつくるにあたってかなりも削平がおこなわれた可能性が高いものと思われる。現在、調査区のすぐ南側を古川が流れているが、この流路は昭和27年に付け替えられたものであり、それ以前は当然ながら南側とは地続きとなっていた。このすぐ南側には大塚遺跡として周知されている遺跡が所在しており、これまでの調査成果から古墳時代初めと奈良時代の二時期に盛時をもつ集落であることが判明している。このような位置関係・地形から推定すれば本調査区はこの大塚遺跡ときわめて関係の深いものと考えられよう。

検出した遺構には、古墳時代初めの竪穴住居・溝・土坑、古墳時代後期の溝などがある。また、これらの遺構に伴って土師器の甕・壷・高杯、須恵器の杯などが出土している。以下、これらの遺構・遺物について詳述する。

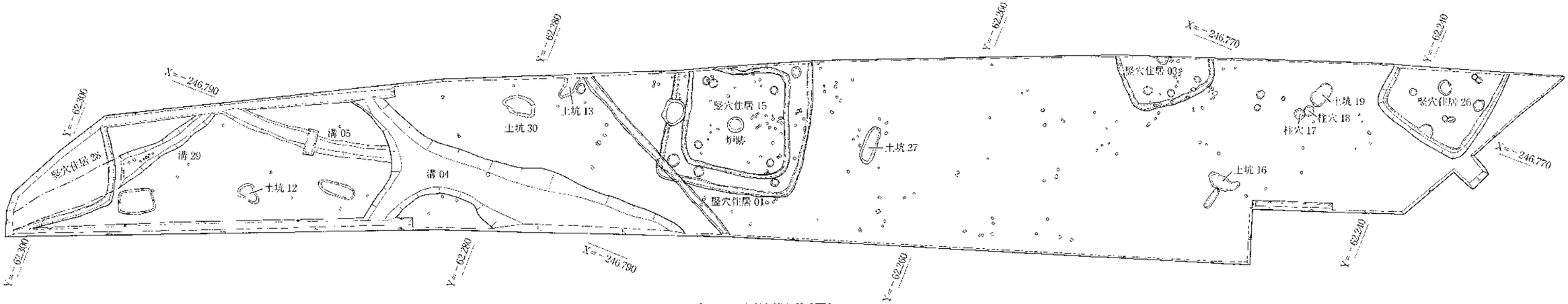
Ａ．１・２区の遺構

竪穴住居01（図８）　１区と２区の境で検出したもので、北側の一部が調査区外に延びているため全容については不明だが、やや隅丸の方形を呈するもので、一辺約７ｍを測る。深さは検出面から10cm前後と極めて浅い。埋土は一層で、暗灰色土（2.5Y4/2）である。床面の土は地山ではなく、やや砂質の灰オリーブ色土（5Y4/2）である。貼床の可能性が高い。主柱穴は４本であり、調査区外に延びる北西隅を除く三箇所で確認している。直径は40～50cm、深さ10～20cmを測る。

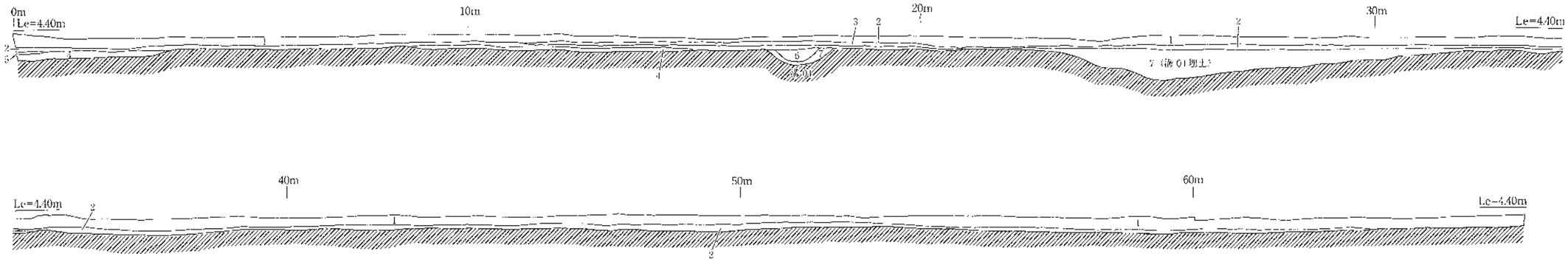
住居のほぼ中央で直径約70cm、深さ20cmほどの土坑を検出した。埋土は黒褐色土（5Y4/2）で、その中にわずかに炭化物が認められたものの焼土や熱による壁の変成などは認められなかった。ただし、その位置・大きさから土坑は炉跡であったものと考えられよう。壁溝は幅25cm前後で、深さは約15cmを測る。灰オリーブ色土（5Y4/2）により埋まっていた。炉跡内から出土したタタキの残る鉢もしくは甕の底や貼床と思われる２層からの出土遺物からこの竪穴住居の帰属年代については古墳時代初めないしそれ以前に求められる。なお、住居覆土からは古墳時代初めないし前期と思われる土師器の甕・高杯などが出土している。

竪穴住居15（図８）

前述の竪穴住居01の床面を掘り下げたところ礫混じりの地山面において竪穴住居の壁溝のみを検出した。これを竪穴住居15としている。検出された壁溝からこの住居の規模は一辺５ｍを測る



〔1・2区遺構平面図〕



〔1・2区南壁土層図〕

1．耕　　土（現代）
2．明褐色土（7.5Y5/6）（床土）
3．黄灰色土（2.5Y5/1）（旧耕土）
4．灰オリーブ色粗砂礫（5Y5/2）
5．灰黄褐色土（10YR4/2）
6．灰黄褐色礫混入土（10YR4/2）溝04埋土
7．明褐色土（10YR3/3）溝04の埋土

図7　1・2区遺構平面・南壁土層図

もので、隅丸方形と考えられる。竪穴住居01と建物の軸線を同じくしていること、また炉も共有していた可能性が高く、この竪穴住居15は竪穴住居01の拡張される前の住居であったものと考えられよう。

主柱穴は４本と思われるが、北東部の柱については判然としなかった。確認された３本でみると、柱穴の直径は20cm前後で深さは約15cmを測る。壁溝の幅は20cmほどで、深さは５cm前後と浅い。壁溝の埋土は、住居跡01の貼床と同じ灰オリーブ色土（5Y4/2）であったが、やや汚れが目立つ。竪穴住居01に造り変える前の住居であることから、それより古いことは確実であるが、時

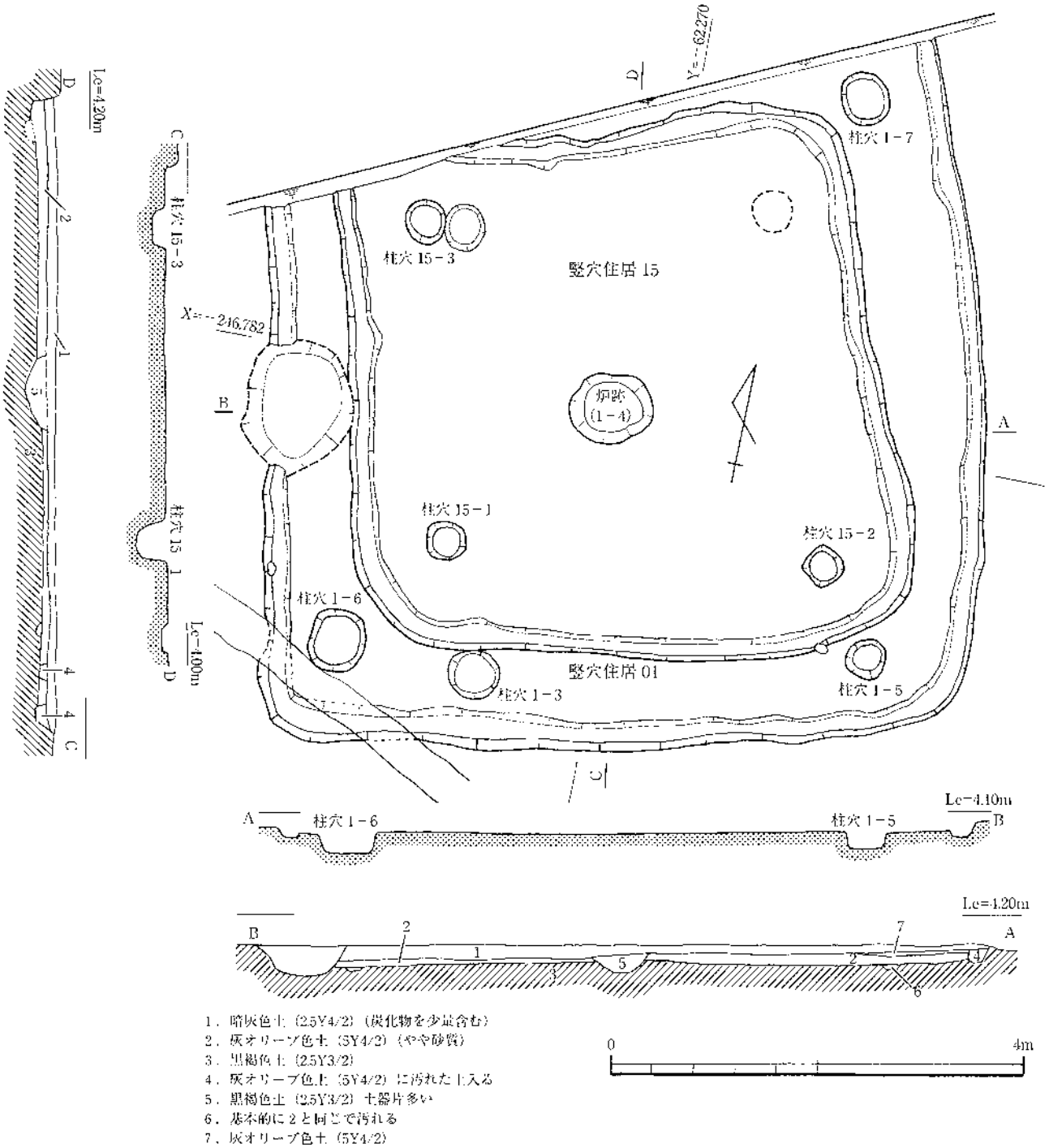


図８　２区竪穴住居01・15実測図

期差はほとんどなくこの竪穴住居の帰属年代についても古墳時代初め頃と考えてよいであろう。

竪穴住居03（図９）　２区中央部付近で検出された竪穴住居である。北側１／３ほどが調査区外に延びているため全容については不明であるが、南辺部から推定すれば一辺４ｍほどの隅丸方形を呈する住居になるものと考えられる。深さは検出面から約10cmを測る。埋土は灰黄褐色土（10YR4/2）と灰オリーブ色土（5YR5/2）が上層に、床面直上には灰オリーブ色土（5YR5/2）が堆積していた。

主柱穴は４本と推定され、このうち確認された南側の２つの柱穴（柱穴３－２・４）でみると径30～40cmで、深さは10cm前後を測る。炉跡は半分が調査区外に延びてしまっているが、50cmほどのやや楕円形を呈するものと考えられる。炉の壁面は熱を受け一部が赤褐色に変色していた。壁溝は幅30cmほどで深さ５cmほどと浅いものであった。

出土遺物が極めて少なく、わずかに土師器が数点出土しているが、小破片であるため時期については判然としない。ただ出土した甕の破片体部にタタキが残っていること、また近くから弥生時代後期の遺物がまったく出土していないことなどを考慮すれば、この住居についても古墳時代初めの可能性が高いものと考えている。

竪穴住居26（図10）　２区東端部で検出した竪穴住居である。この竪穴住居についても一部が調

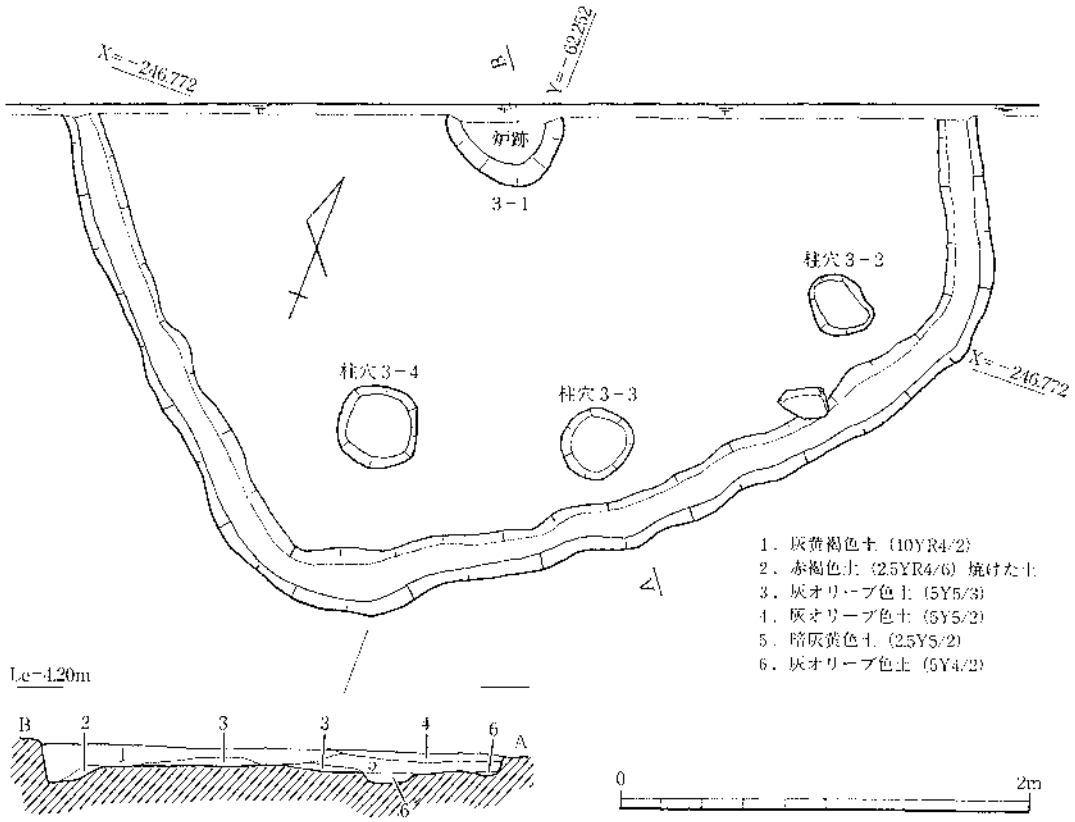


図９　２区竪穴住居03実測図

査区外に延びていっているため全容については不明であるが、一辺4.75mほどの隅丸方形になるものと思われる。検出面からの深さは30cmほどである。主柱穴は４本と思われ、確認したもので見ると直径30cm前後、深さはそれぞれ10cmほどであった。なお、東側の２基の柱穴に重複するように同じような形状の柱穴が確認されていることから柱の建替えがおこなわれたことも考えられよう。炉は中央部に設けられており、直径50cmほど、深さは10cmほどと浅いものであった。炉の埋土は褐灰色土（10YR4/1）であるが、この中には焼けた土が混じっていた。そのほか住居内では径50cmほどの土坑が２基確認されているが、これらの用途については不明である。

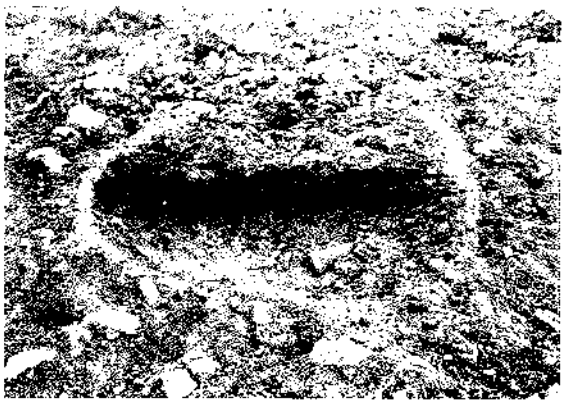


写真２　炉断割状況

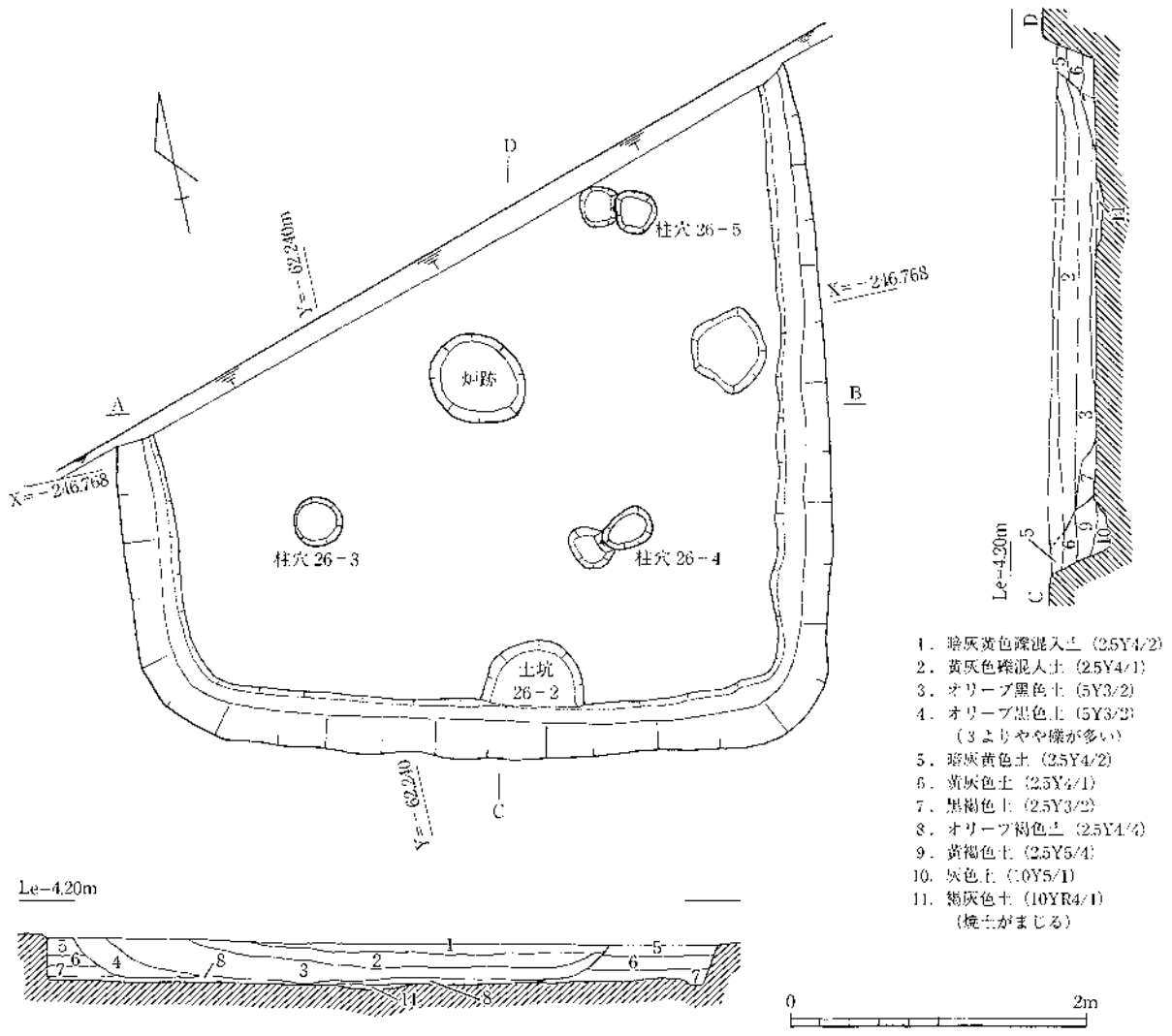


図10　２区竪穴住居26実測図

セクション土層図にも明示したように、この竪穴住居は廃棄されて埋まった後、この住居に重なるように径3.5mほどの円形状の土坑が掘られていたようで、この埋土からは古墳時代初めの土器に混じって古墳時代後期の須恵器が出土している。一方最下層から出土している遺物は土師器の高杯・粗製の鉢など古墳時代初めのものと思われるもののみであり、このことから住居の帰属年代については古墳時代初めを下限とするものと判断している。

竪穴住居28（図11）　1区の西端部で検出された竪穴住居である。当初、土坑と考えていたものであるが、掘り上がり後の形状や一部に壁溝と思われるものが確認されたことから竪穴住居と判断したものである。確認規模で一辺5.2m以上を測る。平面の形状は、おそらく隅丸方形になるものと推定しているが、大部分が調査区外に延びているため判然としない。主柱穴については検出することができなかった。壁溝は南辺部において確認しているが、幅約20cmほどで深さは5cm前後を測る。この竪穴住居からの出土遺物は少ないが、覆土から古墳時代初めから前期にかけての土師器の甕・鉢が出土している。

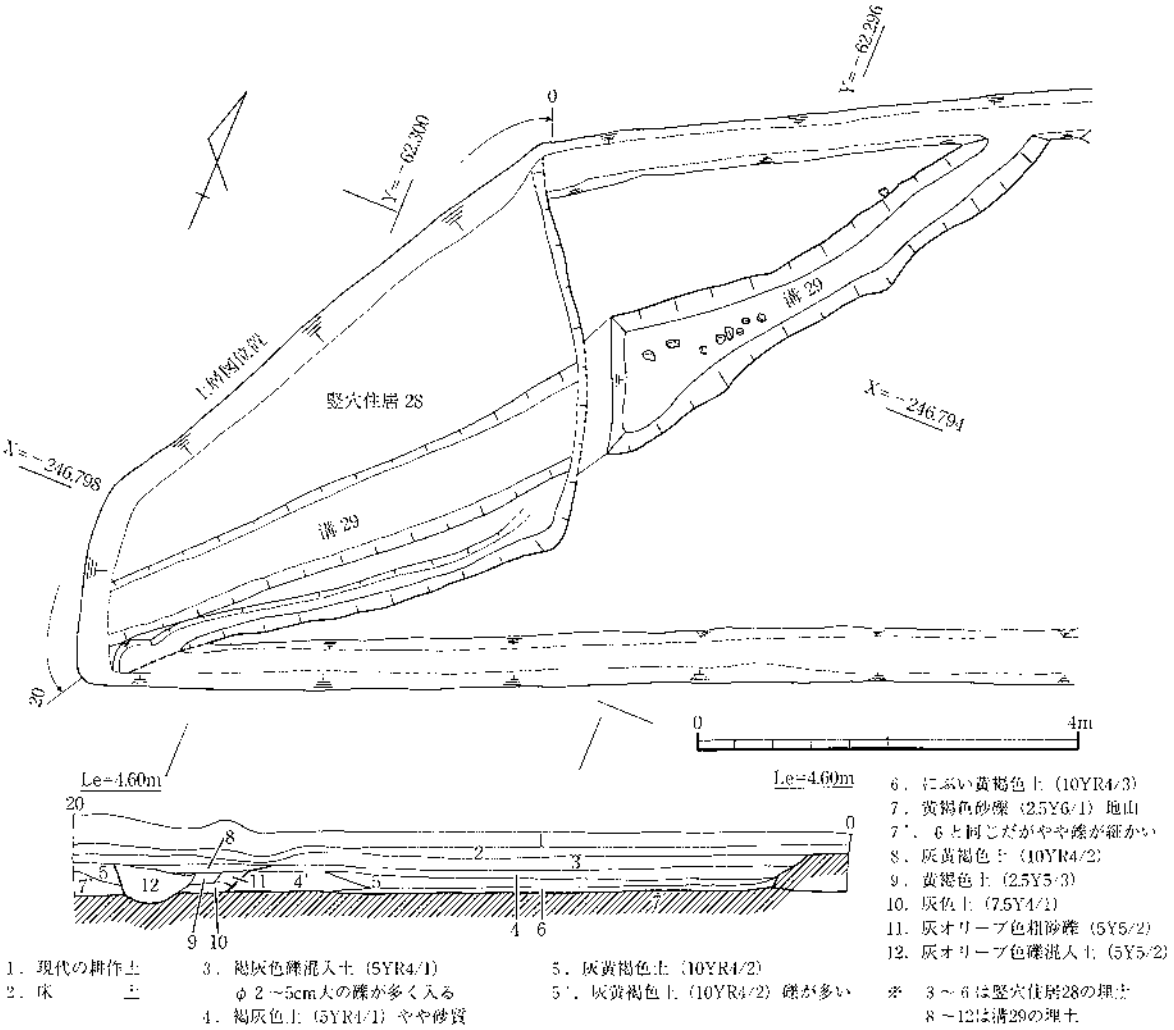


図11　1区竪穴住居28・溝29実測図

溝04（図12）　1区の東側で検出した溝である。途中で二股に分岐し幅を狭めている。溝幅は最も広い部分で3.2ｍを測り、分岐した部分では1.3ｍほどである。深さは広い部分で約50cm、狭い部分では35cmを測る。

溝底部のレベルを見ると、東側で、TP.3.00ｍ、中央と西側はTP.3.40ｍとなっており、この数値だけを見ると西から東へ流れているようであるが、おそらく部分的に抉れた結果と考えられ、地形から考えてこの溝は東から西へと流れていたものと思われる。セクションを３箇所設け、溝の埋土を観察したが、３箇所とも上層部分には暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）と暗灰黄色土（2.5Y4/2）の堆積が共通して見られ、この両層からは多量の土器が出土している。土器の出土状況としては、割れてはいるものの完形に近いものが多く見られ、ある程度かたまって出土していることが言えよう。

出土した遺物には古墳時代初めの土師器甕・壺・高杯などがある。

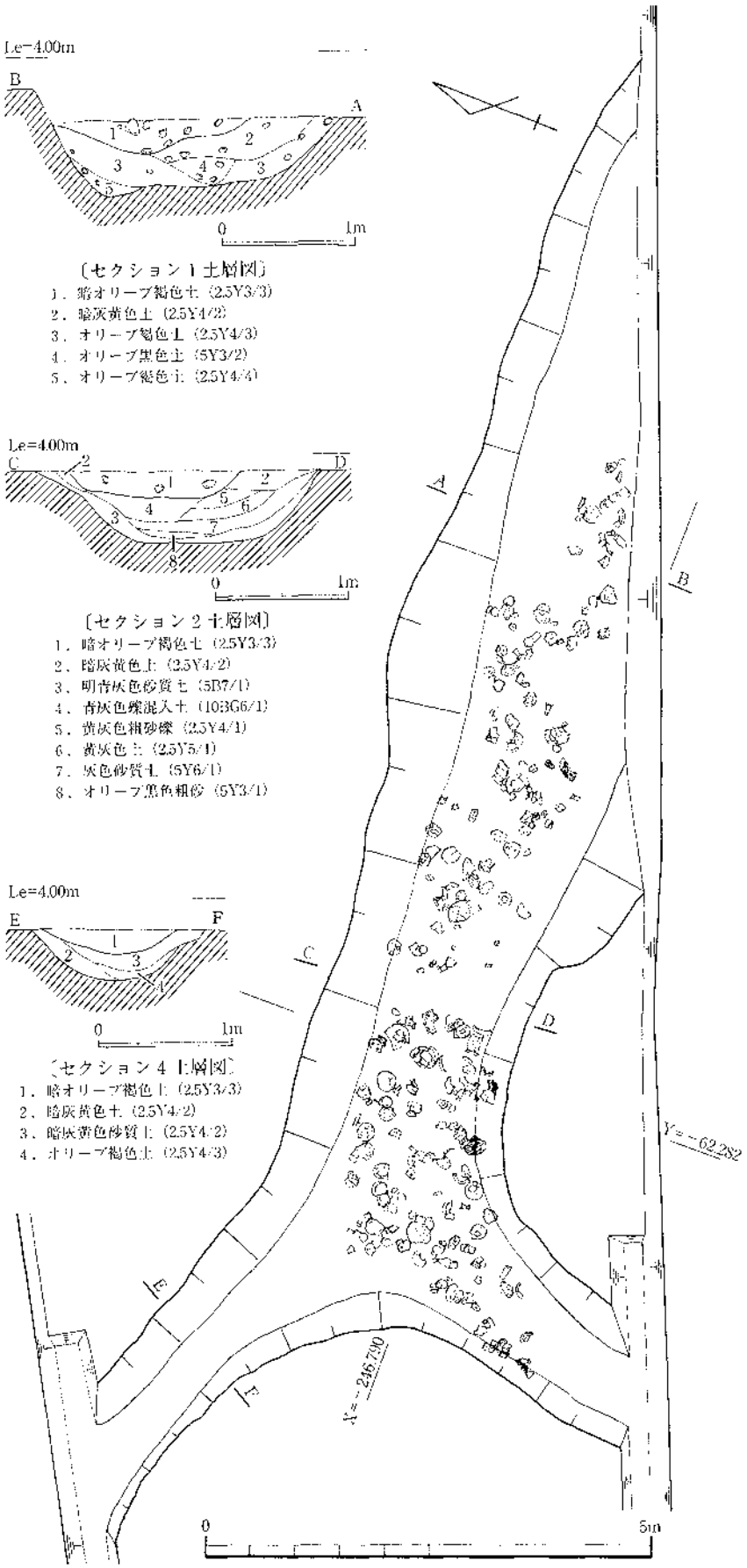


図12　２区溝04実測図

溝05（図13）　幅約80cm、深さ20cmを測る溝である。前述した溝04と同じく東から西へと流れていたものと考えられる。埋土は1層で、黄褐色土（2.5Y5/3）により埋まっていた。この溝からの出土遺物は極めて少なく、わずかに土師器の小破片が3点出土しているのみである。このため時期については判然としないが、前述の古墳時代初めの溝04によって切られていることからそれより古いものの、弥生土器は出土しておらず、さほど時期差があるものとは思えない。したがってこの溝についても古墳時代初め頃のものと考えている。

溝29（図11）　1区の西端、竪穴住居28を切ってつくられている溝である。幅は最も広い部分で1.2m、狭い部分で70cmほどである。深さは約40cmを測る。これまで述べてきた溝とは異なり、南北方向の溝である。溝断面の観察から一度埋まった後再掘削されたもようで、最終的に埋まった土は、5～10cm大の礫が多く混じる灰オリーブ色土であった。

この溝から出土している遺物には6世紀後半段階と思われる須恵器の杯などがあり、このことからこの溝の帰属年代についてはこれまで述べてきた遺構より新しく、古墳時代後期のものと考えられる。

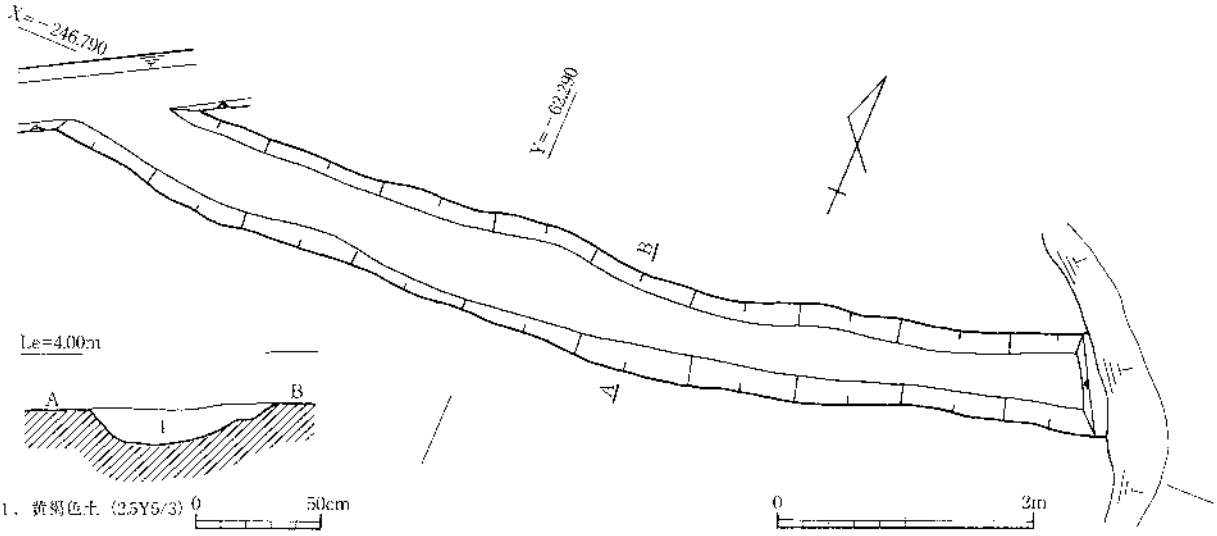


図13　2区溝05実測図

B．１・２区出土の遺物

１・２区において包含層はなく、わずかに床土から近・現代の陶器片が出土しているのみである。遺物は竪穴住居・溝から出土しており、大別すれば古墳時代初めのものと古墳時代後期に帰属するものがある。

以下、各遺構から出土した遺物について詳述する。

《竪穴住居01出土の遺物》（図14）　出土遺物は少なく、いずれも小破片である。出土遺物には土師器の甕・鉢・高杯がある。このうち１は炉跡からの出土である。甕もしくは鉢の底部付近と考えられるもので、外面にかすかなタタキの痕跡が残っている。胎土にはわずかに砂粒を含むが緻密である。外面は浅黄色を呈している。

２～５は覆土出土の土器である。このうち２は鉢の底部で、内外面とも灰白色を呈し、底はかすかに上げ底状になっている。３は甕の底部で、底部は丸底気味になりつつあるがわずかに平底になっている。外面は浅黄色、内面は灰白色を呈している。胎土には少量ながら片岩が含まれており、紀ノ川筋からの搬入品である可能性が高い。４は高杯の脚部である。中実で、脚部長は4.5cmと短く、径も３cmほどとやや細い。裾上位に径１cm足らずの穿孔が２対、４個施されている。５は甕の底部で、底部径は5.4cmを測る。底部内側がドーナツ状に窪んでいることから、製作に当たって最初に粘土紐を円形に巻いて底部とし、その上で土器製作をおこなうという底部輪台手法が用いられたものと考えられる。底部付近の一部は上から削り気味に磨いているが、その下にタタキが施された痕跡が残っている。これらの土器については、甕の丸底化が進みつつも平底が残っていることなどを根拠に庄内式新段階に併行する時期のものと考えている。

６～８は貼床と思われる灰オリーブ色土からの出土である。６は甕体部片と思われるもので、外面にはタタキが施されている。７は高杯の脚部で、やや胴脹らみの形状を呈している。脚部は中実で、内外面とも橙色を呈している。摩滅が著しく調整については不明である。８は甕の底部

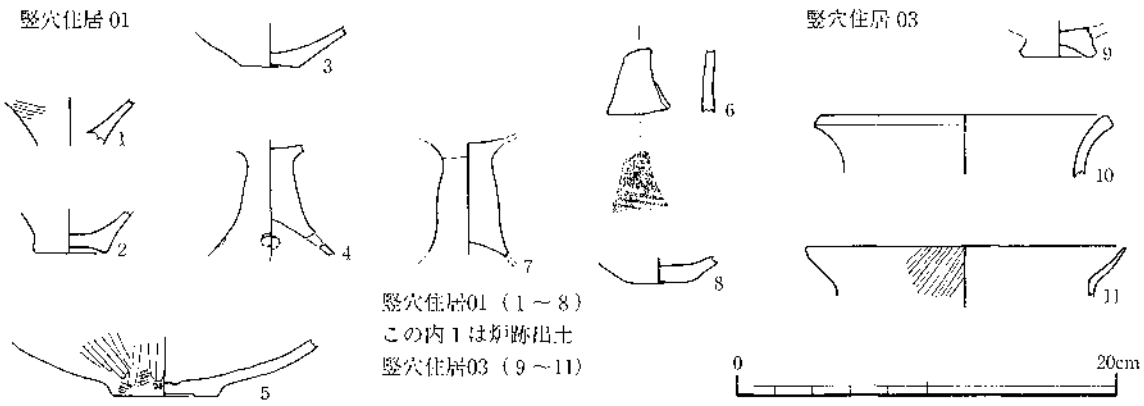


図14　２区竪穴住居01・03出土遺物

で、かすかに平底となっている。内外面とも浅黄橙色を呈する。これらの遺物についても庄内新段階に併行する時期のものと考えている。

《竪穴住居03出土の遺物》（図14）　9は鉢底部と思われ、底部内面が脚台状に上げ底となっている。内外面とも橙色を呈している。10は広口壺の口縁部であろうか。口径15cmを測る。口縁部はゆるやかに外反し、端部は面をもつ。全体に黄橙色を呈している。11の甕の口縁部であるが、左下がりのやや粗いタタキが口縁部にまで及んでいる。これらの遺物についても庄内新段階に併行する時期のものと考えている。

《竪穴住居26出土の遺物》（図15）　この住居跡は残りもよく、出土遺物も多い状況であった。遺物は最下層出土（26～36）のものとそれ以外のもの（12～25）に大別して掲載している。遺物には少量ながら6世紀代の須恵器の甕・杯が入ってきているが、これはレンズ状に堆積していた新しい堆積土の中からの出土である。主な遺物には古墳時代初めの甕・壺・高杯・鉢などがある。

このうち12～14は古墳時代後期の須恵器である。12の杯蓋は天井部2／3に回転ヘラケズリが施される。稜はなく口縁部にかけて丸みを帯びる。13は短脚の高杯で、透かしが入る。14の甕は口縁部が緩やかに外反し、端部は凹線状に面取りがなされている。これらの須恵器については、6世紀中頃から後半にかけてのものと考えている。

土師器の甕（15～18）はいずれも底部のみの出土である。このうち18は底部がしっかりと平底となっており、また底部付近にタタキが施されている。これに対し他のものは底径も小さく丸底化の傾向が認められる。なお、15は壺の底部の可能性もあろう。19は広口壺の口縁部で、大きく外側に開き端部は面を成し、かすかに上下に拡張されている。20・21の高杯口縁部は外反気味に開くもので、体部に対して短くやや古い様相を呈したものと言えよう。ともに浅黄色を呈している。22は椀形高杯になるものと思われ、脚部中位に径1cmほどの穴が4箇所穿たれている。23～25は小型の鉢であり、23は脚台状に上げ底となっており、24の底部はほぼ平らである。なお、25については甕底部の可能性もあろう。

最下層出土の遺物としては土師器の甕・壺・高杯・粗製鉢などがある。このうち26・27の甕の底部径は小さく丸底気味となっている。ともに摩滅が著しく調整については不明である。壺（28・29）はいずれも広口壺と分類されるものであるが、このうち28は厚く短い頸部から外側に摘み出すように口縁部が引き出されている。30は大型の粗製鉢となるもので、口径は復元で約29cmを測る。底部を欠くが、おそらく丸みを帯びた平底になるものと思われる。この種の粗製鉢は紀伊半島南部を中心に出土が確認されており、通例体部にタタキが施されているが、本例では摩滅しているもののその痕跡は認められない。31の高杯は口縁部が斜め上方に開くもので、体部との境にかすかに稜をもつ。32・33は椀形の高杯で32の内面には細い棒状工具によると思われるミガキの痕跡が認められる。これらの土器は、庄内新段階に併行する時期のものと考えられる。

《竪穴住居28出土の遺物》（図15）　本住居からの出土遺物は少ないが、土師器の甕・鉢が出土している。34の甕は底部から外側に大きく開くことから、体部は球胴状になるものと思われるが底部はわずかに平底を保っている。鉢のうち36は体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がる

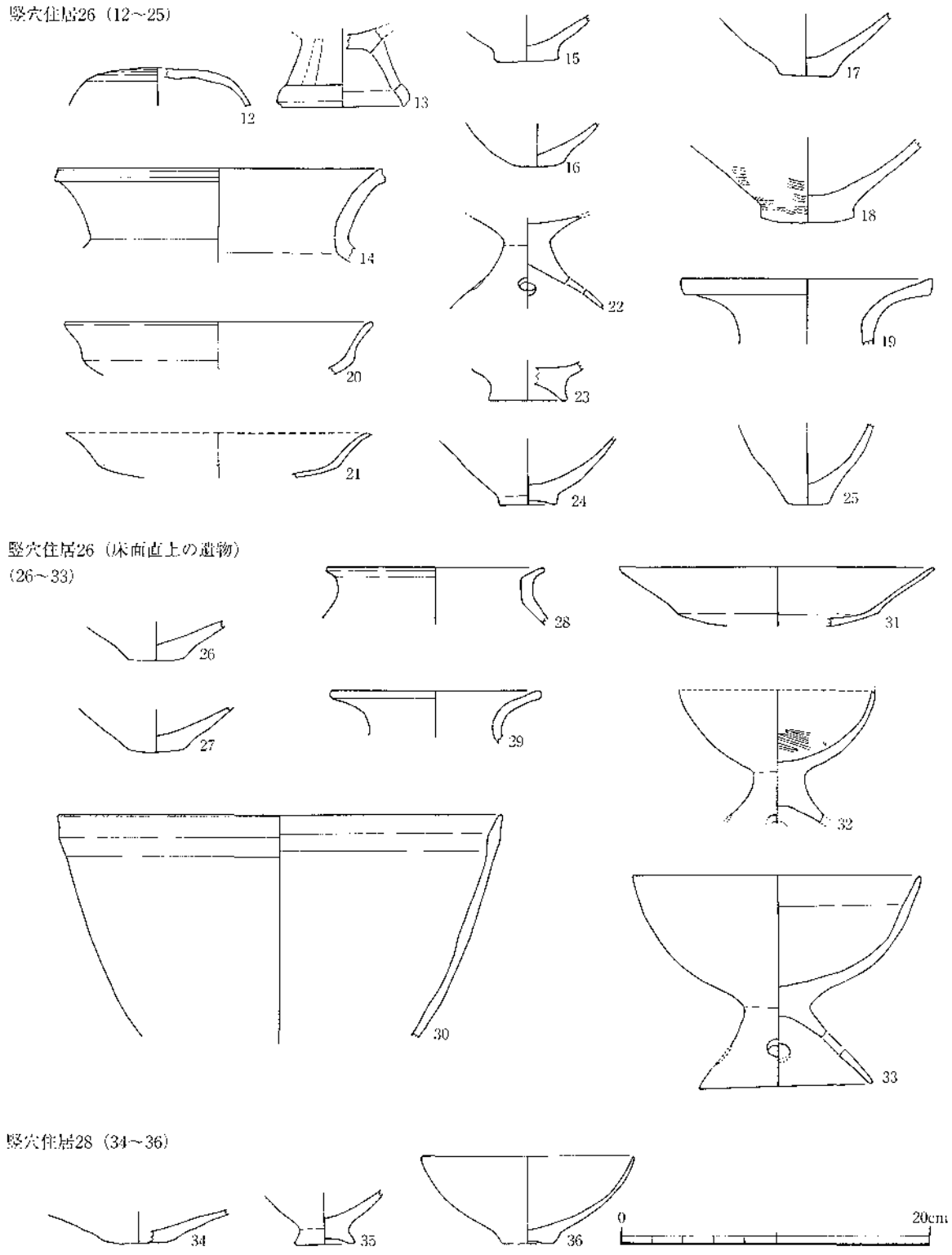


図15　1・2区竪穴住居26・28出土遺物

椀形となっている。口径13.6cmを測り、器壁は薄い。出土遺物が少なく時期については判然としないが、これらの土器については概ね庄内新段階から布留古段階に併行する時期のものと考えている。

《溝04出土の遺物》（図16）　溝04の上層からの出土遺物は多く、また短期間に投棄された状況が窺えることから一括性の高い遺物群と考えている。出土遺物には土師器の甕・壺・高杯・鉢などがある。

37～41はいずれも甕の底部で、タタキによる調整が観察されたものである。タタキは平行ないし右上がりでその幅は狭い。その他の底部についてはタタキが確認されなかったが、摩滅が著しいことを考えれば、これらにもタタキによる調整が施されていた可能性が考えられよう。これらの底部の形状は丸底化に向かいつつもなお平底を保った状態と言える。なお、底部として図示したもののうち、44および55については壷の底部の可能性も考えられる。また53は小型鉢の底部となるものであろう。

甕の口縁部は59・60を典型例とするように口縁部はくの字に折れ曲がり、端部を丸く収めるものが多い。このうち59～60では口縁部から体部にかけて右上がりの平行タタキが観察された。63の甕は口縁部がくの字状に折れ曲がった後、端部をわずかに摘み上げている。胎土には微量の金雲母が含まれており全体に濃い灰黄褐色を呈しているもので、明らかに他地域からの搬入品と考えられるものである。70は口径6.6cmと小振りのもので、器壁も薄い。また、口縁部はくの字に折れ曲がった後、端部にかけて内傾気味に立ち上がっており、時期的にやや新しくなる可能性もあろう。72の甕は口縁端部に粗い縦方向のキザミ目が施されている。また、頸部付け根あたりにタタキの痕跡が認められる。

壷は71・77などのように口縁部が緩やかに外反し、端部を丸く収めているもの。80などのように直立する短く厚い頸部をもち、口縁部が大きく外側に開いた後、端部に面をもつもの。85などのように口縁端部を上方に摘み上げ広い面を作り出しているものなどに大別することができる。このうち74は口径16.6cm、胴部径26cmを測る。全体に器壁が厚く、外面は浅黄橙色を呈している。74は斜めに短く立ち上がった頸部から口縁部はさらに大きく外側に開く。端部は欠いているがおそらく丸く収めるタイプと考えられ、口径は16.5cmほどになるものと思われる。胴部の最大径は20cmを測る。摩滅していることもあるが器壁は体部付近では２㎜ほどときわめて薄いものである。78・79は直立する短い頸部をもち、口縁部は斜め上方に開いている。ともに口径は16cmほどを測るもので、調整については両者とも摩滅が著しく不明である。80の頸部は短く厚い。口縁部は大きく外反し、端部は平坦面を作り出している。摩滅が著しいが、一部に本来の器表と思われる部分が残っており、それによればにぶい橙色を呈しており、縦方向の細かなミガキが観察される。81についても良く似たタイプと思われるが、この土器については摩滅が著しく調整については不

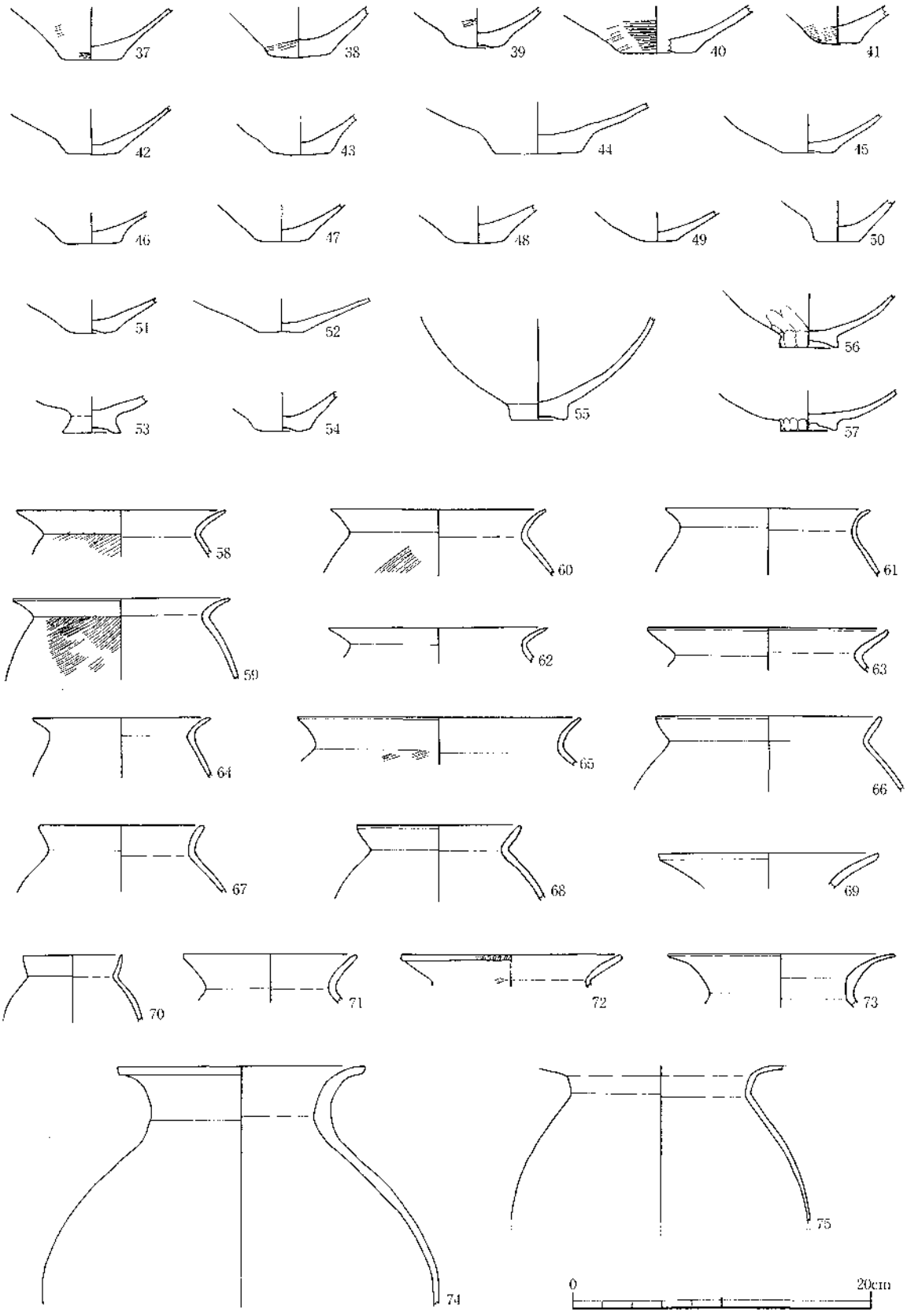


図16　1区溝04出土遺物（1）

明である。82も同じく短い頸部から口縁部が大きく外側に開くものであるが、端部内面がかすかに凹み、その分端部がわずかに上方に摘み上げられたように見える。全体に浅黄色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれる。84は口縁部のみの出土であるが、おそらく短く直立する頸部になるものと思われる。口縁端部を上下にわずかに拡張させており、端面には粗い爪形状のキザミが施されている。

85・86は口縁端部が上方に大きく引き上げられ、端面が広く作り出されている。ともに口径16cmを測り、色調は灰白色を呈するなどきわめて良く似ており、この両者については同一個体の可能性もあろう。86の壺は頸部の径が細く、口縁部は頸部と一体となるかたちで大きく外反している。端部は強い指ナデにより二重口縁気味に作り出されており、この外端面に径3㎜ほどの竹管文が二列施されている。このように広口壺の中で、口縁部に加飾されている壺は本例と84のみであり、全体に占める割合は少ない状況であった。また、口縁端部を垂下させ装飾を施す二重口縁の壺もこの遺構から出土した遺物の中では確認されていない。89は長頸壺になるものと思われる。口縁部はわずかに外反する。口径は11cmを測り、全体に浅橙黄色を呈している。全体に摩滅が著しく調整については不明である。

高杯の出土は多く、口縁部が屈曲し体部との境に稜をもつ有稜高杯と椀形高杯とに大別できる。有稜高杯は中実で脚柱部は概して長く、裾部はハの字状に開いている。椀形高杯では脚柱部を有するものも認められるが、大部分は体部から脚部へとそのまま移行しハの字状に開いている。両者とも脚部中位に穿孔を施したものが多く見られる。

このうち91の高杯は口径14cmを測るもので、口縁部は外反気味に斜め上方に立ち上がる。体部との境に明瞭な稜は見られずわずかに膨らむ程度で丸くなっている。それに比べて92は体部から口縁部の屈曲が鋭くなっている。口径はやや大きく18cmを測る。全体に灰白色を呈するもので、調整については摩滅が著しく不明である。94の高杯は口縁部が外反気味に立ち上がる。端部を欠いているが口径は16cmほどになるものと思われる。脚柱部は中実で、裾部中位に4箇所の穿孔が施されている。胎土には赤色酸化粒が少量含まれており、全体に浅黄橙色を呈している。95は杯部を欠くが、それ以外の残りは良く底部の径は13.4cmを測り、直径1cmの穴が4箇所裾部中位に穿たれている。96の高杯はほぼ水平に伸びた体部から口縁部は上方に鋭く立ち上がる。裾部の穿孔は4箇所確認である。100の高杯は体部と口縁部の境が明瞭ではなく、全体に斜め上方に立ち上がっている。これに比べて101の高杯は体部から口縁部にかけて大きく屈曲している。91・92などに比べると体部に対する口縁部の比率が大きいことが特徴として挙げられよう。102の高杯の穿孔は3箇所であり、本遺構から出土している高杯の中では珍しいものと言える。

103・106の椀形高杯は脚柱部がほとんどなく、体部と脚部がそのまま接合するタイプである。脚部はハの字状に開いている。この両者については裾部に穿孔は認められない。ともに胎土には

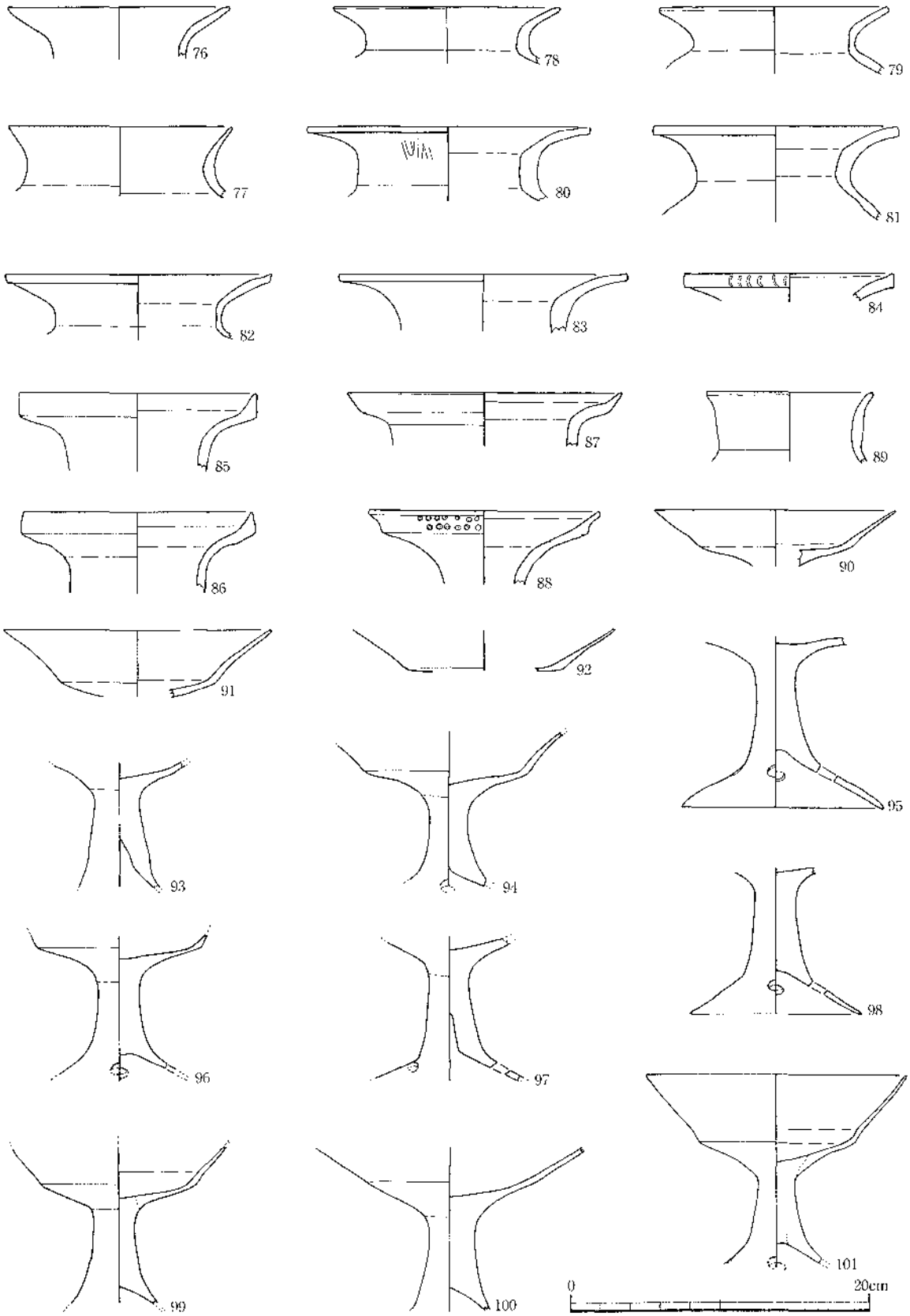


図17　1区溝04出土遺物（2）

赤色酸化粒を少量含んでおり、全体に浅黄橙色を呈するものである。104の高杯は4cmほどの脚柱部を有し、裾部を欠いているがおそらくハの字状に開くものと思われる。裾部に穿孔の痕跡を認めたが、何箇所に穿たれたものかは不明である。摩滅が著しく調整についても不明である。105の高杯は口径15cmほどを測るやや大振りのものであるが、杯部は椀形というより鉢に近い形状を成している。全体に浅黄橙色を呈しており胎土は砂粒が少なく精製されたと思われる土が使われている。脚部上位に三箇所の穿孔が施されている。108～110は脚部のみの出土であるが、形状から推して椀形の高杯になるものと思われる。このうち108は脚部に3箇所の穿孔が施されているが、穴の径が1.2cmほどと他のものに比べて大きい。また穿孔箇所も均等ではなく、本来の4箇所の部分の一箇所が欠けた状況であった。

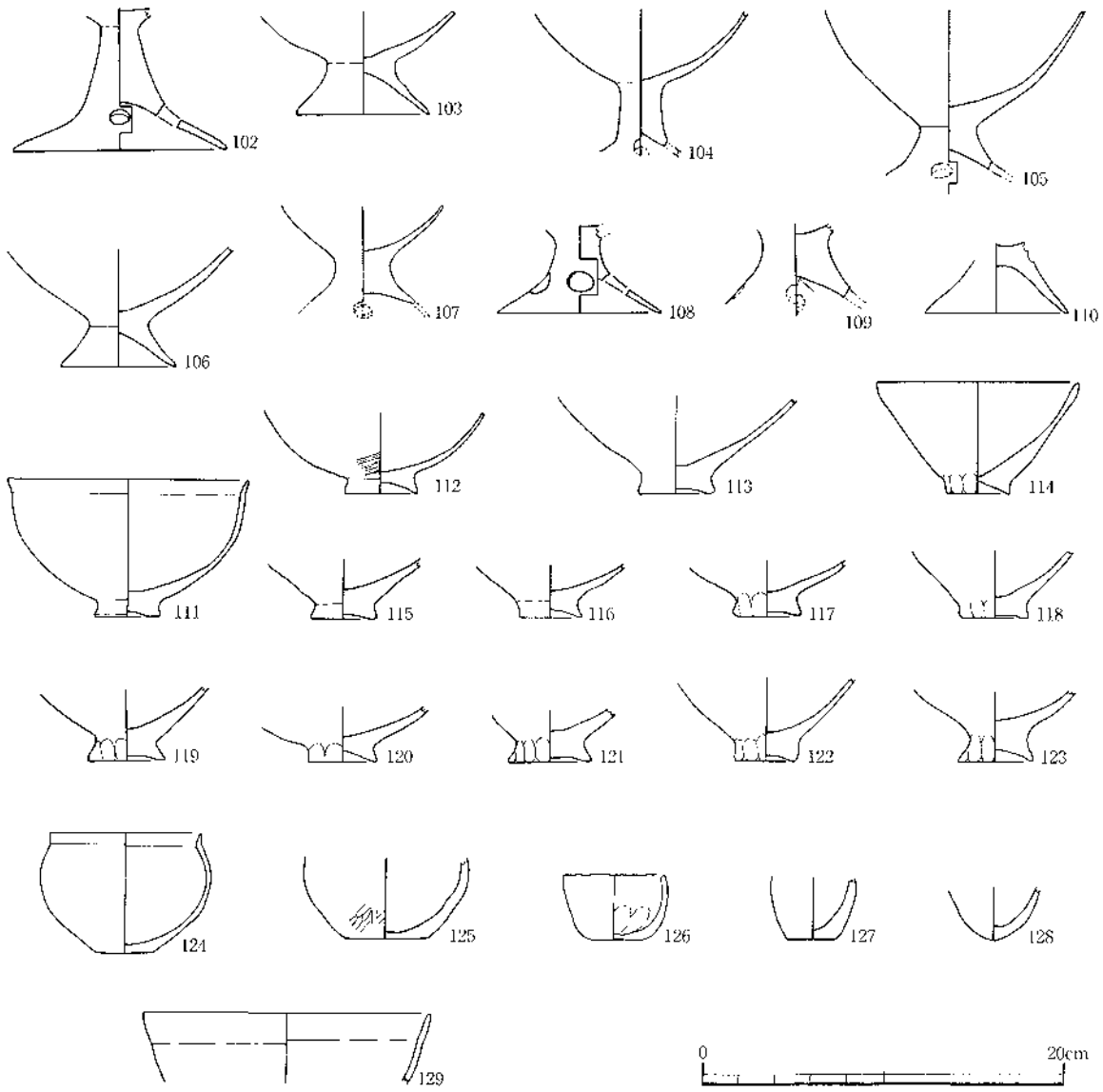


図18　1区溝04出土遺物（3）

鉢には内湾気味に丸く立ち上がる椀形のものと体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上がるものとが見受けられる。また底部に着目すれば脚台状に上げ底となっているもの、平底となっているもの、さらにその中間的な様相を呈するものがある。

このうち111の鉢は体部から口縁部にかけて丸く立ち上がるもので、口縁端部がわずかに外反している。口径13.4cm、器高7.7cmを測る。112も丸く立ち上がるタイプであり、底部付近にかすかにタタキの痕跡が認められる。これに対し、113・114は体部から口縁部にかけて斜め上方に立ち上がるもので、114では口径11.2cmを測る。115～123は底部のみの出土であり、全体については不明と言わざるを得ない。115・116の2点を除けばいずれも底部の指頭圧痕が顕著である。

124は口径8.4cm、器高6.7cmを測るもので、小型の鉢ないしは小型丸底土器の祖形とでも言うべきものであろうか。短く摘み上げられた口縁部から丸みを帯びた体部の形状は小型丸底土器を髣髴させるものであるが、底部はわずかではあるが平底となっている。全体に黄橙色を呈している。117は平底がしっかりとしており、体部下半に斜め方向のミガキの痕跡が観察される。126～128はいずれも手づくねの土器である。129は鉢の口縁部であろうか。口縁部はかすかに外反し、復元口径で16cmを測る。

以上述べてきた溝04出土の土器については、庄内新段階に併行する時期のものと考えている。

《溝29出土の遺物》（図19）　遺物は最終的に埋まった礫が多く混じる灰オリーブ色土からの出土であり、出土遺物としては須恵器の杯蓋・杯身・高杯・甕がある。このうち130は杯蓋で、口径14cmを測る。口縁部はハの字状に開き、稜は鈍い。また、口縁端部は段を成している。131～134はいずれも杯身である。131の立上がり部は内上方に伸び、端部は段を成していが、132の端部は丸く収められている。133・134の杯身の受部は丸みを帯びて小さく、また立上がりも短い。135は無蓋高杯になるものであろう。口径14.8cmを測り、口縁部はわずかに稜をもち、外反気味に立ち上がる。136の甕は口径15cmを測るもので、肩部から体部にかけて縦方向のタタキが施され、その上から細かなカキ目により調整されている。これらの須恵器については、概ね6世紀中頃から末にかけてのものと言えよう。

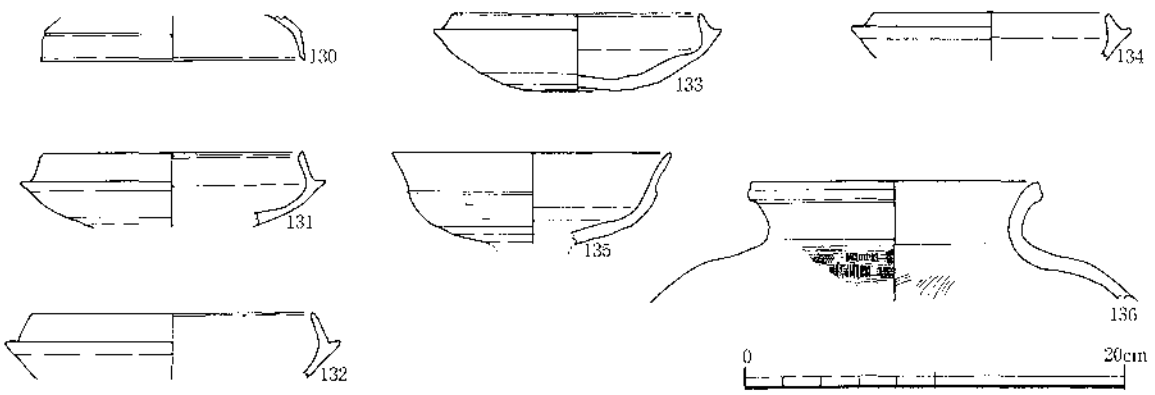


図19　1区溝29出土遺物

2．3区の調査

3区の現地表はTP.4.9mほどであり、先述した1・2区と比べると70cmほど高くなっている。現況は梅畑として利用されていたものであるが、水田から転用されたもので、1層は水田耕作土である。その下に厚さ40cmほどの新しい盛土がなされている。この盛土に使用された土は近辺から持ち込まれたものと思われるが古墳時代前期の土器が多く含まれていた。

その下は近世の水田耕作土で、さらにその下の4層としているものは古墳時代後期の包含層である。遺構はこの4層を除去した面で検出しており、検出した遺構には古墳時代の土坑・溝などがある。なお、5層としているものは、その下の灰黄褐色砂質土（10YR5/2）・黄褐色砂質土（2.5Y5/4）など地山面までの層を一括して取り扱ったもので、この層にも古墳時代後期の遺物が含まれるが、それらに混じって縄文時代の土器片が出土している。

A．3区の遺構

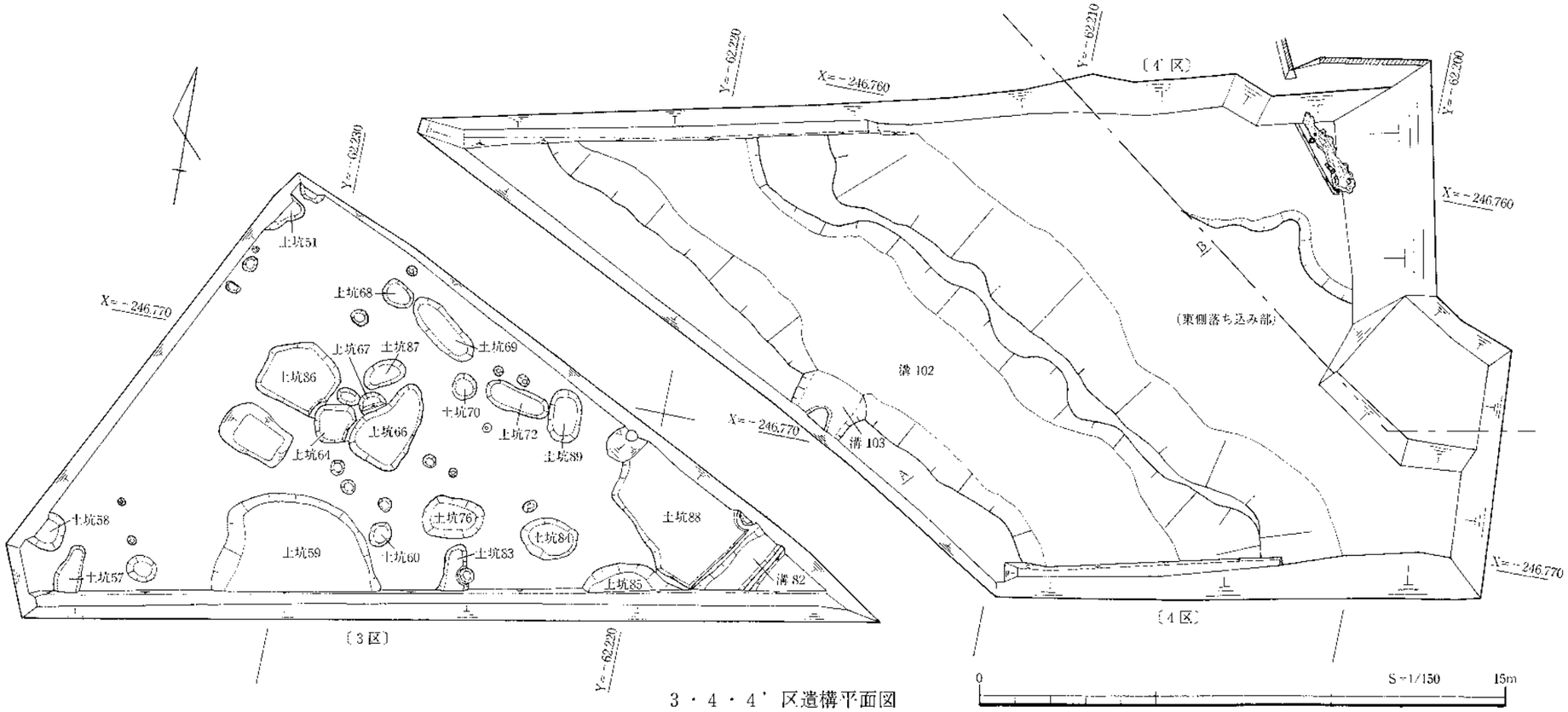
土　坑59　調査区南辺に接して検出された土坑で全容は不明であるが、最大径で4m以上を測る大型の不整形な土坑である。深さは40cmほどを測り、埋土は上層に黒褐色砂質土（7.5YR4/3）が、下層には暗褐色砂質土（7.5YR3/3）が堆積していた。出土遺物は少なく、わずかに縄文土器片と思われるものが出土しているが、層位から考えてこの土坑は古墳時代後期のものと考えよう。

土　坑64　調査区ほぼ中央で検出されたものである。南東隅を土坑66によって切られているが、一辺1.2mほどの隅丸方形になるものと思われる。深さは浅く最深部でも10cmほどであった。埋土はにぶい黄褐色土（10YR4/3）である。出土遺物は少なく、また細片であるため図示し得なかったが、古墳時代と思われる土師器が出土している。

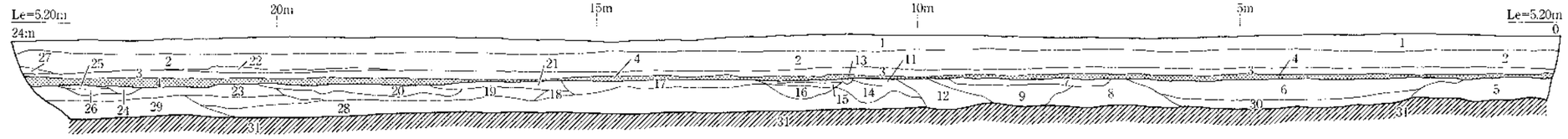
土　坑66　前述の土坑64の東側で検出された土坑である。切り合い関係から土坑64より新しい。南辺が1.6m、西辺が2.2mを測り、北側及び東辺は出っ張ったり窪んだりしており、不整形な形状となっている。深さは最深部で22cmを測り、埋土は上層ににぶい黄褐色土（10YR4/3）、下層に暗褐色砂質土（10YR3/4）が堆積していた。この土坑からは古墳時代後期の土師器の壷、須恵器の杯身などが出土している。

土　坑67　この土坑も前述した土坑64と同じように土坑66によって切られている。このため全容は不明であるが、おそらく直径40cmほどの円形を呈するものであったと考えられる。出土遺物は少ないが、古墳時代後期の須恵器杯身のほか土師器の壷が出土している。

土　坑68　調査区北側寄りで検出された土坑で、やや不整形ではあるが長径1m、短径70cmほどの楕円状を呈するものである。深さは15cmほどを測り、埋土は1層で暗褐色砂質土（10YR3/4）により埋まっていた。出土遺物は少ないが、古墳時代後期の須恵器杯身のほか細片のため図示し得なかったが土師器の壷ないし甕と思われるものも出土している。



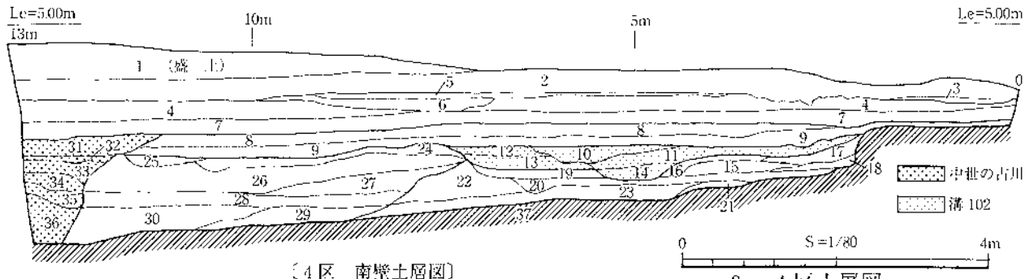
3・4・4'区遺構平面図



1．オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3)(現代の耕作土)
2．褐色砂質土(10YR4/4)
3．褐色砂質土(7.5YR4/4)とにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)の互層
4．にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
5．黄褐色砂質土(2.5Y5/4)
6．オリーブ褐色砂質土(2.5Y4/6)
7．暗褐色砂質土(10YR3/4)
8．黒褐色砂質土(7.5YR3/2)
9．褐色砂質土(10YR4/6)
10．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
11．暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2)
12．暗褐色砂質土(10YR3/3)
13．オリーブ褐色砂質土(2.5Y4/3)
14．暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)と褐色砂質土(10YR4/6)がまじる
15．褐色砂質土(10YR4/4)
16．褐色砂質土(10YR4/6)
17．褐色砂質土(10YR4/6)礫混入
18．オリーブ褐色砂質土(2.5Y4/3)
19．にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
20．褐色砂質土(10YR4/4)
21．暗褐色砂質土(10YR3/4)
22．にぶい黄褐色砂(10YR5/4)
23．褐色砂質土(10YR4/4)
24．暗褐色砂質土(10YR3/4)
25．にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
26．黒褐色砂質土(10YR2/3)
27．3と同じ
28．灰黄褐色砂質土(10YR5/2)(φ5～8cmの礫まじる)
29．褐色砂質土(10YR4/1)(やや粘性あり)
30．灰黄色砂質土(7.5YR4/2)
31．灰黄褐色砂質土(10YR4/2)にφ2～5cmの河原石入る(地山)

4層

〔3区　南壁土層図〕



〔4区　南壁土層図〕

3・4区土層図

1．現代の盛土
2．暗オリーブ褐色砂質土(2.5Y3/3)(現代の耕作土)
3．黄褐色砂質土(2.5Y5/4)
4．明黄褐色砂質土(10YR7/6)とにぶい黄褐色砂質土(10YR6/4)の互層(近世の水田)
5．暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)とにぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)の互層
6．黄灰色土(2.5Y6/1)に明黄褐色土(10YR7/6)がブロック状に入る(土坑39)
7．にぶい黄橙色砂質土(10YR6/3)と灰白色砂質土(10YR7/1)の互層(中世の水田)
8．灰オリーブ砂質土(5Y5/2)と灰色砂質土(5Y6/1)の互層(中世の水田)
9．灰色砂質土(10Y6/1)(鎌倉時代の水田?)
10．灰色土(10Y5/1)
11．灰色砂質土(7.5Y5/1)
12．灰色土(10Y5/1)に明黄褐色砂質土(2.5Y7/6)がまじる
13．黄褐色砂質土(2.5Y5/3)
14．灰色土(10Y6/1)
15．灰色土(7.5Y6/1)に礫まじる
16．黄褐色砂質土(2.5Y5/3)
17．灰色土(7.5Y6/1)
18．灰色土(7.5Y6/1)にφ5～10cm大の礫入る
19．明黄褐色砂質土(2.5Y7/6)
20．オリーブ砂質土(5Y5/4)
21．淡黄色礫混入土(7.5Y8/3)
22．青灰色砂質土(5BG5/1)
23．灰色粘質土(7.5Y4/1)
24．にぶい黄色粘質土(2.5Y6/3)
25．炭と灰が入りまじった土
26．青灰色土(5B6/1)
27．オリーブ灰色土(2.5GY)
28．緑灰色礫混入土(10GY5/1)
29．オリーブ灰色粗砂礫(5GY5/1)
30．灰色礫混入土(5Y4/1)
溝102埋土
31．にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
32．明黄褐色砂質土(2.5GY6/6)
33．灰色土(7.5Y4/1)
34．暗緑灰色粘質土(5G4/1)と暗黄色砂(2.5Y4/2)の互層
35．黄褐色砂(2.5Y5/3)
36．暗オリーブ灰色礫混入土(2.5GY4/1)
37．青灰色粗砂礫(5BG6/1)(地山)
中世の古川埋土

〔土層位置図〕

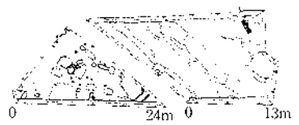


図20　3・4・4'区遺構平面・3・4区土層図

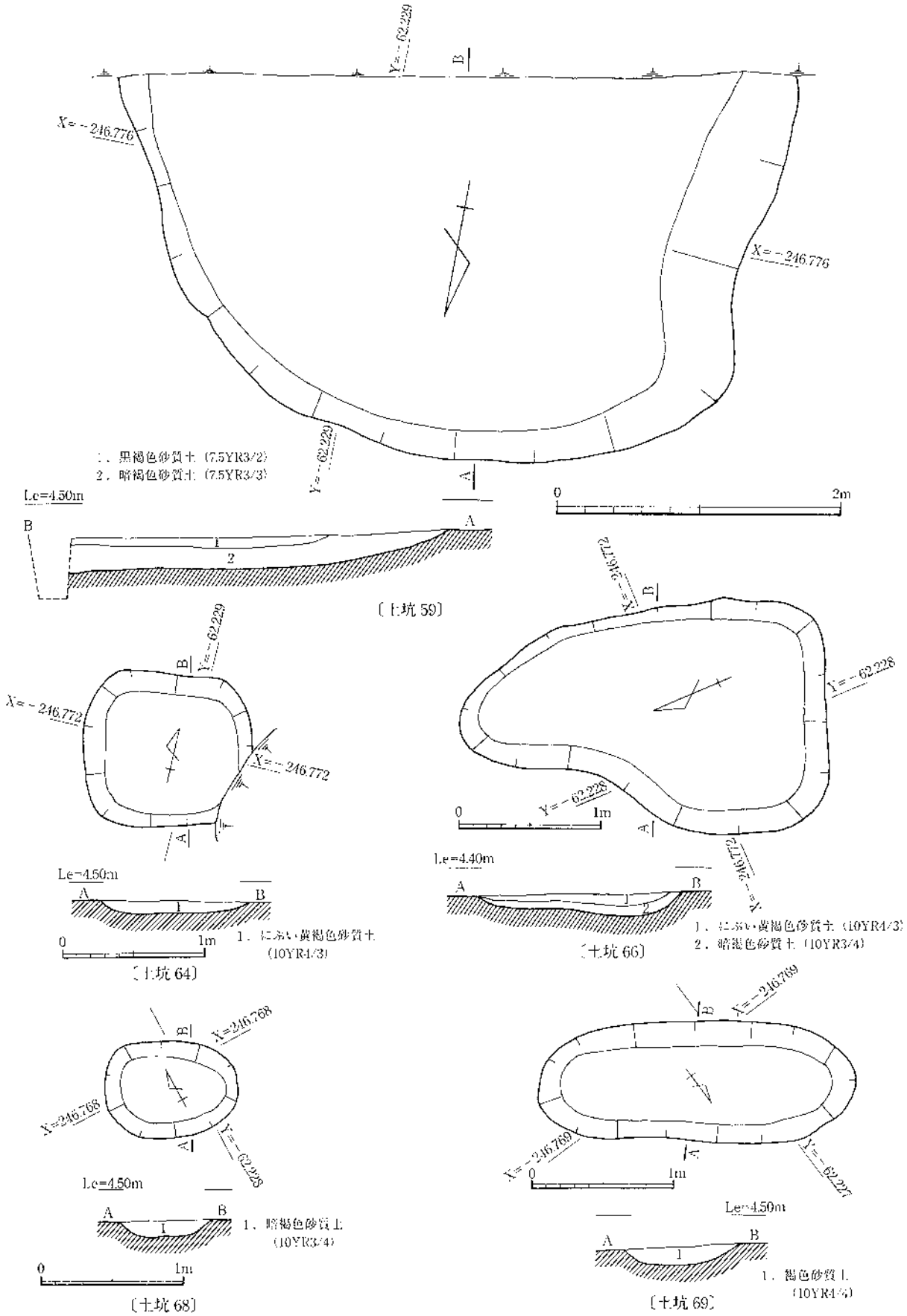


図21　3区土坑実測図（1）

土　坑72　調査区北側寄り、前述の土坑68の東側で検出された土坑で長径4.8m、短径1.2cmほどの楕円状を呈するものである。深さは最深部でも20cmほどで、大きさに比して浅いものと言えよう。埋土は1層でにぶい黄褐色土（10YR4/3）により埋まっていた。出土遺物には古墳時代後期の須恵器杯蓋・甕などがある。

土　坑76　長辺1.6m、短辺1mほどを測るもので、やや歪な隅丸方形を呈している。深さは15cmほどと浅く、暗褐色砂質土（10YR3/3）により埋まっていた。出土遺物は少なく、縄文土器の細片が3点出土したのみであった。ただ層位からこの土坑は縄文時代のものとは考えられず、古墳時代後期に帰属するものと思われる。

土　坑84　長径1.6m、短径1.2mほどのやや歪な楕円形を呈するものである。深さは20cmほどを測る。埋土は上層が灰褐色砂質土（2.5YR4/2）で、下層には薄くレンズ土に暗褐色砂質土（7.5YR3/3）が堆積していた。出土遺物としては、細片のため図示しえなかったが、古墳時代の須恵器の杯片が出土している。

土　坑85　調査区南辺に接して検出された土坑である。大部分が調査区外に拡がっていくものと

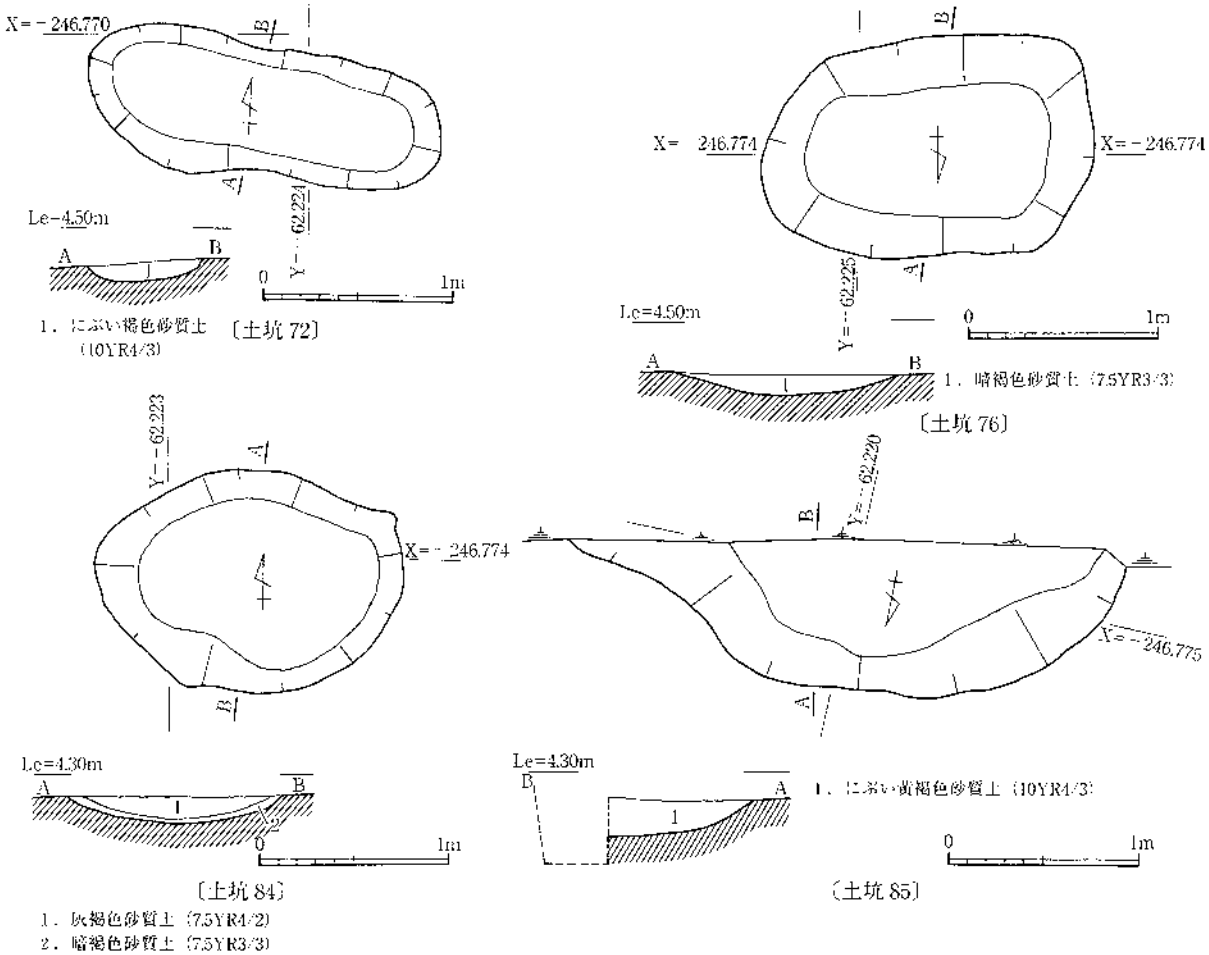


図22　3区土坑実測図（2）

思われ全容については不明であるが、確認された部分では幅３ｍ、深さ20cmを測る。埋土は１層でにぶい黄褐色土（10YR4/3）により埋まっていた。この遺構からは、縄文土器（後期？）の細片が４点出土しているのみである。

土　坑86　家形に近い不整形な五角形を呈するもので、最も長い辺で２ｍを測る。深さは15cmほどと浅い。黒褐色砂質土（7.5YR3/2）により埋まっていた。古墳時代後期の須恵器杯身、土師器の鉢もしくは壷と思われる細片が出土している。

土　坑87　調査区のほぼ中央で検出されたものであり、長径1.2m、短径70cmほどを測る楕円状の土坑である。深さは20cmほどで、暗褐色砂質土（10YR3/3）により埋まっていた。出土遺物としては古墳時代後期の須恵器の杯身のほか図示しえなかったが土師器の高杯・壷の細片がある。

土　坑89　長径1.5m、短径90cmほどを測る楕円状の土坑である。深さは20cmほどで、上層はオリーブ褐色砂質土（2.5YR4/6）、下層は暗褐色砂質土（10YR3/3）が堆積していた。この土坑から遺物はまったく出土していない。

溝　82　調査区の南東隅で検出された溝であり、幅約１ｍ、深さ30cmほどを測るものである。南西から北東方向に流れていたと思われるもので、現有の水路を挟んで４区で検出された溝103につながっていく可能性が考えられよう。この溝からは遺物が出土していない。

以上、述べてきた３区の土坑・溝については出土遺物・層位などから、古墳時代後期、概ね６世紀前半から中頃にかけてのものと考えられよう。ただし、これらの土坑の具体的な用途については不明と言わざるを得ない。遺構密度は高く、この時期の遺構は、本来的には２区にまで及んでいたものと思われるが、２区においては後世の水田化の際にこの時期の遺構が削平されたものと思われる。

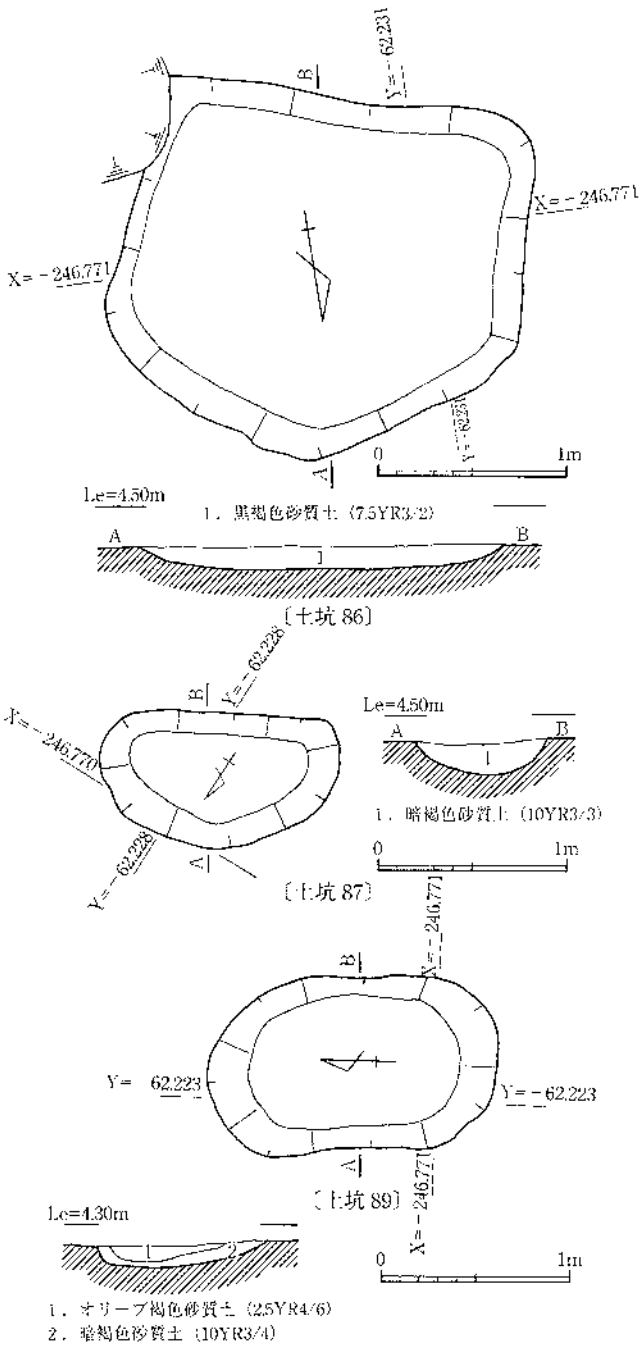


図23　３区土坑実測図（３）

B．3区の遺物

3区は遺構密度に比して出土遺物は少ない状況であった。出土した遺物は古墳時代後期の須恵器杯身・杯蓋・壷のほか土師器の壷などがある。また、細片のため図示し得なかったが、包含層などから縄文土器も出土している。以下、包含層・各遺構に分けて出土遺物の概要を記すことにする。

《4層出土の遺物》　4層からは古墳時代後期の須恵器杯のほか図示できなかったが同時代と思われる土師器の細片が出土している。138～139はいずれも須恵器の杯蓋である。このうち137は口径13.4cmを測り、天井部は丸く、2／3に回転ヘラケズリが施されている。稜は断面三角形を呈し鋭い。また口縁端部は段を成している。これに比べて138・139もともに稜を持ち、端部も段は成しているが、全体に丸みを帯びており鋭さに欠けている。140・141は須恵器の杯身である。前者の立ち上がり部は丸みを帯びて外反し、端部は丸い。後者は内上方にまっすぐ伸び、端部は段を成している。これらの須恵器は6世紀前半から中頃にかけてのものと言えよう。

《5層出土の遺物》　5層からも古墳時代後期の須恵器杯のほか図示できなかったが同時代と思われる土師器の細片が出土している。このうち須恵器の杯蓋142は稜を持ち端部は段を成すものである。143～145の杯身はいずれも口縁端部が段を成しているが、145は立ち上り部が上方にまっすぐ立ち上がっており、口径も復元ではあるが10.3cmとやや小さなものである。これらの須恵器も4層出土のものと大きな違いは見出せず、ほぼ同時期のものと考えられよう。

《土坑65出土の遺物》　146の須恵器杯身は復元口径で16.0cmを測る。立ち上り部は内上方に伸び、端部は段を成している。受け部は外上方に伸びている。

《土坑66出土の遺物》　147の土師器の壷は復元口径11.6cmを測る。口縁部はくの字状に外反し、端部は丸い。148の須恵器杯身は口径10.4cmを測り、立ち上り部の端部は段を成す。

《土坑67出土の遺物》　149の土師器の壷は復元口径13.0cmを測るもので、浅黄橙色を呈している。摩滅が著しく調整については不明である。須恵器杯身150は底部2／3に回転ヘラケズリにより調整がなされている。

《土坑68出土の遺物》　151の須恵器杯身は口径11.0cmを測る。器高は5.0cmを測り、底体部が深いものである。立ち上り部は内上方に伸び2cmと高いものであるが、端部は丸く収められている。受け部はやや丸く、外方に伸びる。

《土坑69出土の遺物》　152の須恵器甕は口径16.4cmを測る。口縁部は外反気味に立ち上り、端部は上下にやや拡張され二条の浅い凹線が巡る。体部外面は縦方向の細かなタタキが施され、内面は擦り消しているがかすかに同心円文が残っている。153の杯蓋はかすかに稜を成し、口縁部はハの字状に開き端部は丸く収められている。

《土坑86出土の遺物》　154～156はいずれも須恵器杯身である。残りの良い157でみると口縁端部はかすかに段を成している。受け部は細く上方に伸びる。

《土坑89出土の遺物》　157の杯身の立ち上り部はほぼまっすぐ上方に伸び、端部は丸く収められている。復元口径は10.4cmを測るもので、やや小振りのものである。

以上、これら遺構出土の土器についても、6世紀前半から中頃にかけてのものと言えよう。

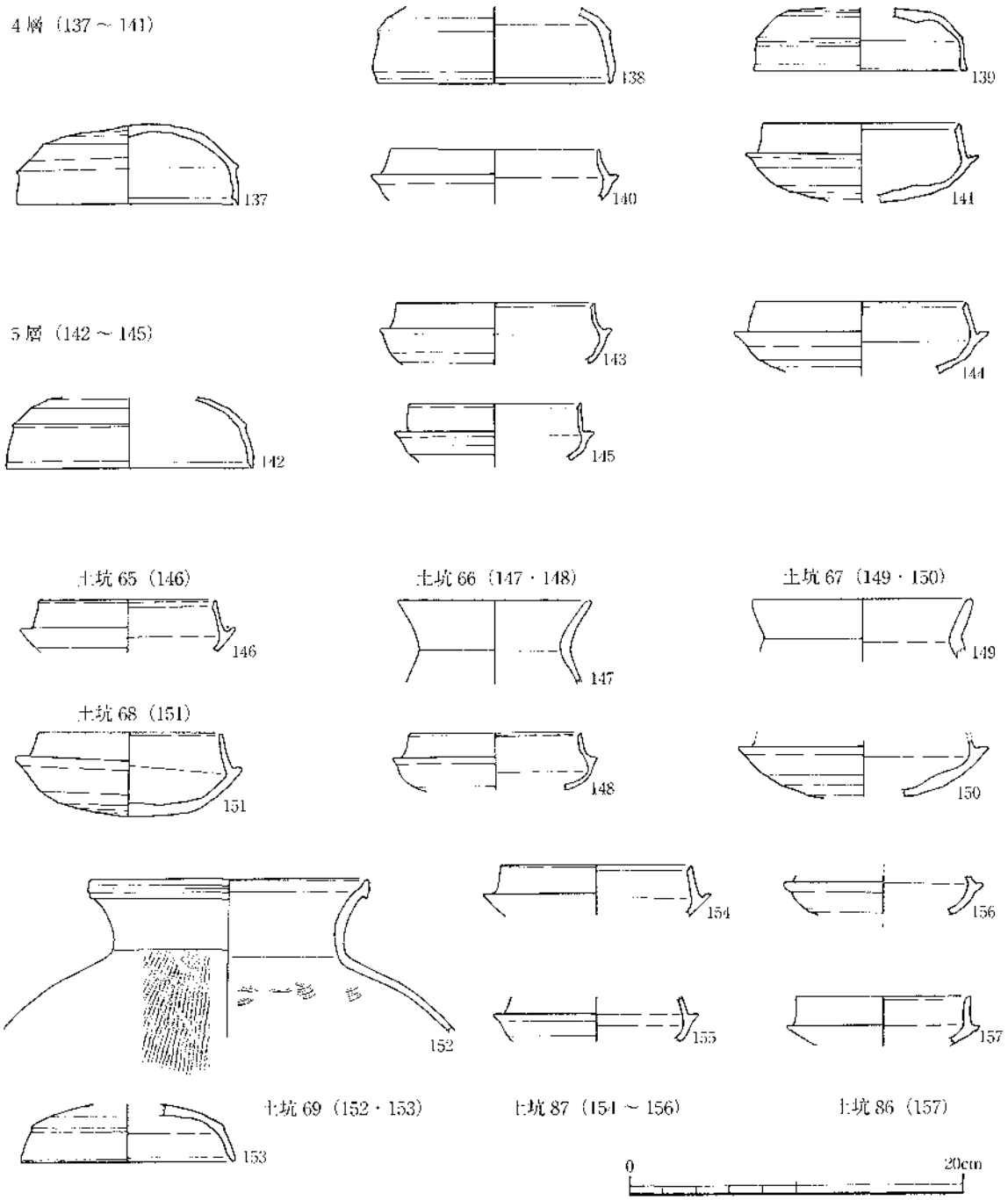


図24　3区出土遺物

3．4区・4’区の調査

4区は南西から延びてきている砂堆部が北東側に向かって落ち始める位置に当たる。このため遺構密度は低く、住居跡などは検出されていないが、落ち込みの縁辺部に沿って流れる溝・旧流路などが検出されている。このうち中世の古川の護岸については、近世の水田と思われる第4層を除去した面で確認した。また幅4mほどの古墳時代後期の溝（102）は、第7層上面で検出したものである。

出土遺物としては古川に伴う中世の陶器・土師皿のほか落ち込み部に堆積していた粘土層から古墳時代初めから古墳時代中期の土器が多量に出土している。

なお、4’区とした箇所は、4区の北東隅に隣接する場所であるが、ここには倉庫が建っており、4区と同時に調査することができなかった。このため4区の調査が終了し埋め戻した後、追加して調査を実施したものである。4’区については、個別図（図28）としても掲載しているが、全体図には図面上4区と合成して掲載している。（図20）。

以下、この両区の遺構・遺物について記す。

A．4区の遺構

中世古川護岸　先に述べたように、近世の水田層と考えられる第3層を除去した面で検出したものである。調査区の北東辺に沿う形で、延長20mほどを確認した。このうちの一部で護岸の傾斜に沿って10cm前後の川原石が敷かれるように施されていた（写真3参照）。

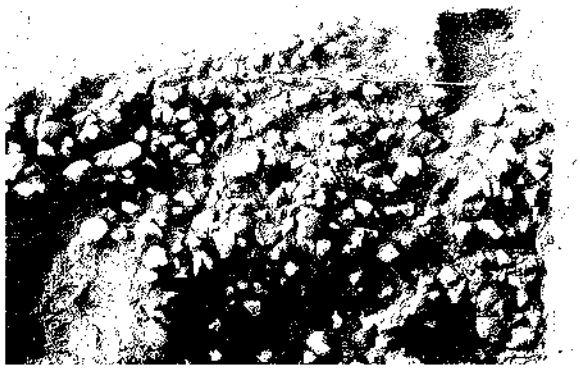
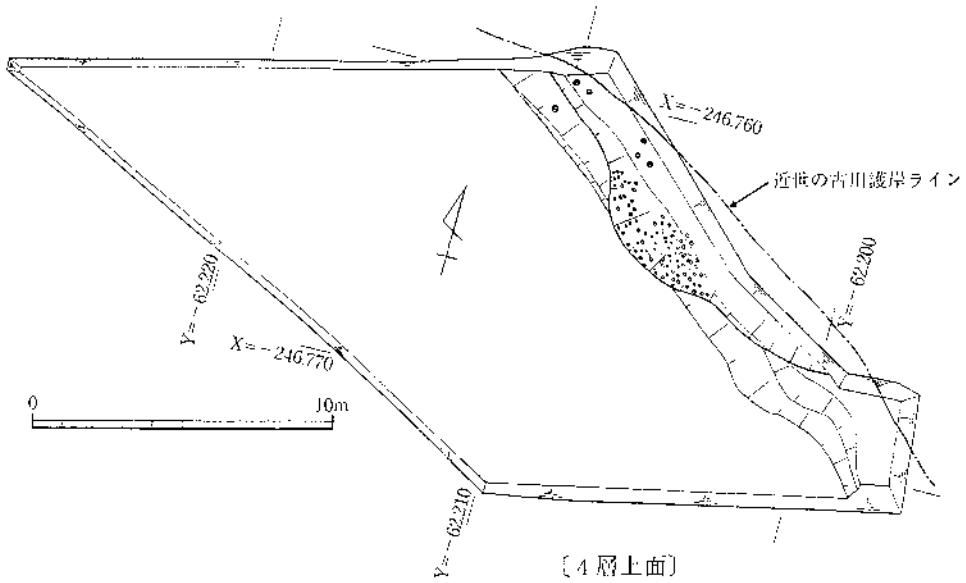


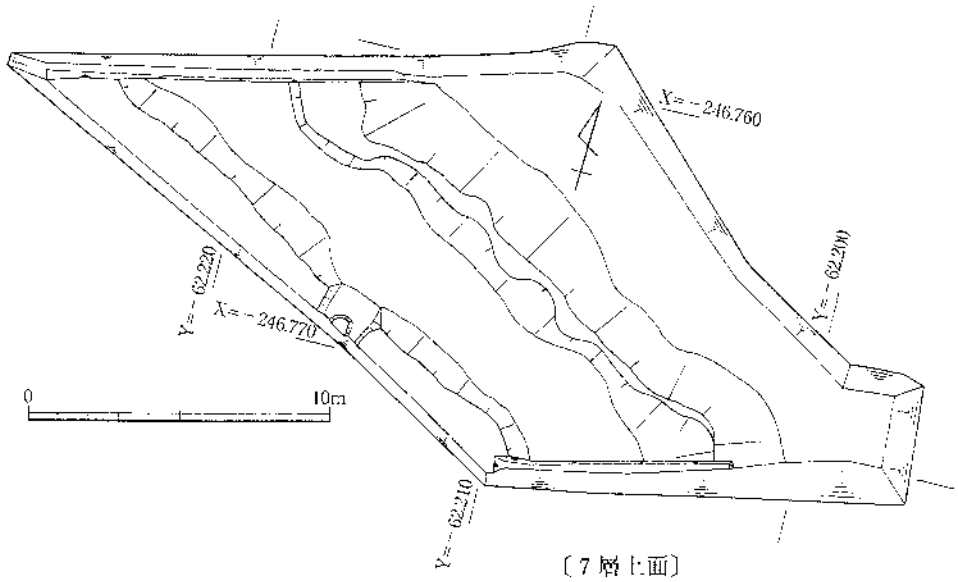
写真3　中世の古川護岸

これらの川原石は、石積みなどと呼べる状況ではなく、護岸の斜面に沿って単に突き刺すようにして並べられたような状態であった。この古川の埋土からは中世の常滑の甕片、鍛冶に伴うスラグが出土している。この古川については、中世後期に開削されたものと考えられる。

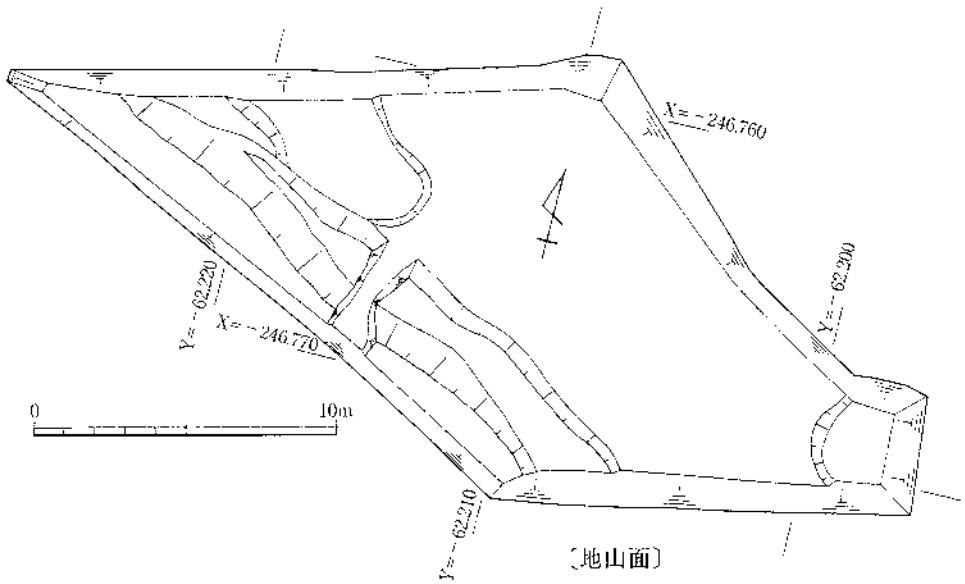
溝　102　4区南西側で検出した溝で、地山の落ち込みに沿うようにして南東から南西方向に流れていたと考えられる。幅は最も広い部分で5m、狭い部分では3m、深さは40cm弱と浅い。溝の埋土は灰色砂質土（10Y6/1）および暗緑灰色砂質土（7.5GY4/1）であり、この両層から古墳時代初めの土師器甕・高杯・鉢のほか古墳時代前期の土師器高杯・小型丸底壺、さらに6世紀前半頃と思われる須恵器の杯など時期幅のある遺物が出土している。この溝の南西側の肩は蛇行しており、整然と掘られたような状況ではない。このことからも一応人為的に掘られた溝として記載しているが、自然流路であった可能性も十分考えられよう。



〔4層上面〕



〔7層上面〕



〔地山面〕

図25　4区遺構変遷図

溝　103　前述の溝102に直交し合流する溝である。幅約1.2m、深さ約40cmを測るものである。

3区の溝82と方向をほぼ同じくしていることから、この溝につながっている可能性が高く、そうであれば、一段高い集落の排水溝としての機能を担っていた溝と考えられよう。出土遺物がなく、時期については判然とし難いが、溝102との関係から古墳時代後期前半の可能性が高いものと言える。

以上述べたように、4区の遺構密度は低いが地山が北東側に落ち込んでいっており、この落ち込んだ部分に堆積した土から遺物が多く出土している。図26としてこの落ち込みに対して直交して設定したセクションの土層図を掲載しているが、遺物が多く出土したのは、溝102の東側の肩を形成している土層番号13・14の灰色粘質土と緑灰色粘質土であり、遺物の取り上げではこの両層を“青灰色土Ⅱ”として一括して取り上げている。この層からは古墳時代初め～後期にかけての土器が混在して出土している。

また、15を挟んでその下に堆積していた16・17・18の灰色砂質土および灰色粘質土は“暗灰色土Ⅱ”としており、遺物の記述においてもこの名称を使用している。この層からは古墳時代初めの土器がまとまって出土した。なお土層番号21～31は、中世の古川に関するものである。また19としている層は一見地山と思われる礫混じりの砂質土であるが、この層からはきわめて少量であるが、摩滅した縄文土器の小破片が出土している。

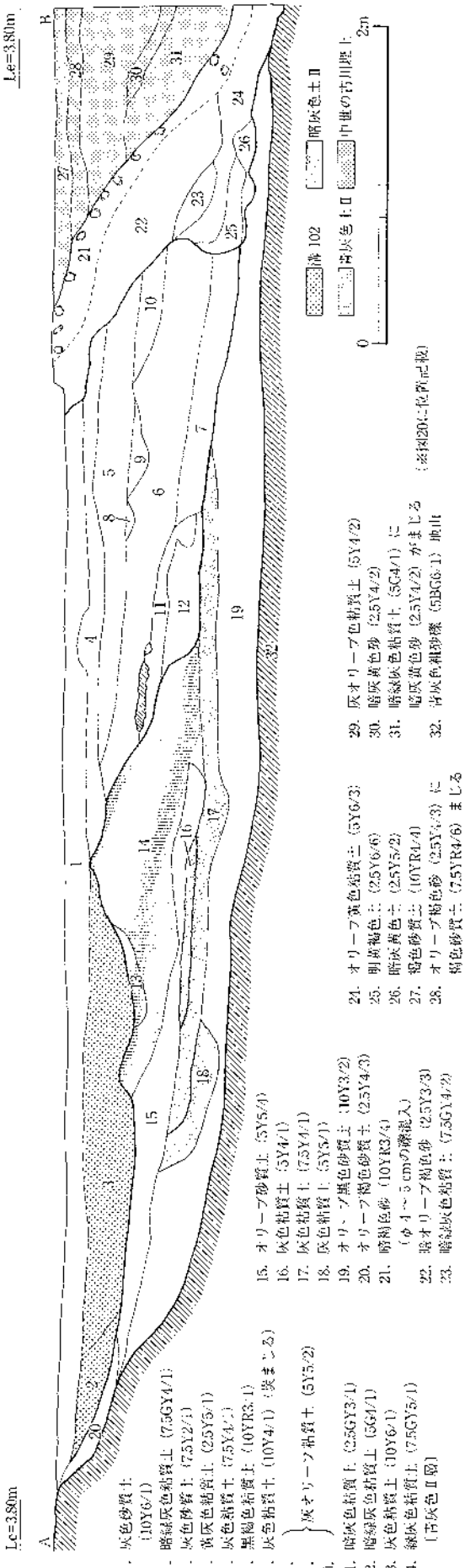


図26　4区落ち込み断面土層図

B．4’区の遺構

先にも述べたように4’区は4区北東側を追加して調査した部分である。ここでは近世の古川左岸および昭和27年まで機能していた古川の左岸を確認した。

昭和27年までの古川　盛土直下、近世の水田層の上面で検出した。埋土の大部分は一気に埋め立てたと思われる灰白色砂礫であったが、下層に本来の溝の堆積土である明赤褐色礫が残っており、この中から草履・ガラスなど極めて新しいものが出土した。

近世の古川　近世後期ないし近代と考えられる水田層を除去した面で検出した。上層の暗灰黄色土は川を埋めるに当たって投じられたと思われる土であるが、下層の黄灰色土には随所に薄い砂がブロック状に入っており、流れていた状況が窺える堆積であった。この堆積層より下で、杭列を検出した。杭は2列で、川側の列は杭と杭との間隔が80cm前後であるのに対して、手前側の方は50cm前後とやや広くなっている。また使われている部材も川側の杭は直径5cm前後のものであるのに対し、手前側は8～10cmとやや太いものが用いられており、列によって使い分けがなされていたことが窺える。杭の長さは40cm前後であったが、本来的にはもう少し長いもので、下部のみが遺ったものであろう。この杭列は検出した位置から考えて、近世の古川の護岸施設の一部であったものと考えている。なお、この杭列とは別に調査区の北東隅で横木を杭で固定したものが検出されているが、これは前述した昭和27まで機能していた古川の護岸施設であった可能性が高いものである。出土遺物としては、下層の黄灰色土から伊万里の染付け碗・皿を中心に唐津の碗、丹波焼の擂鉢などが出土している。これらの出土遺物を見る限り、18世紀末までに収まるものであり、19世紀、江戸時代後期にまで下る遺物は出土していない。

護岸部のみの調査であるため断定するには心もとない状況ではあるが、このことから、近世の古川は江戸時代中期には機能を停止し、新たに掘削され直した可能性があろう。

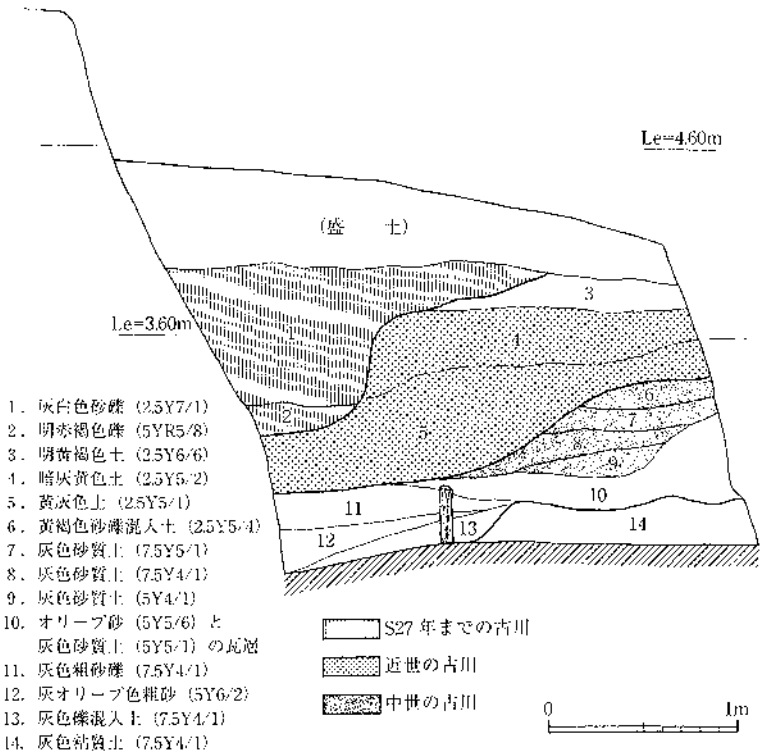
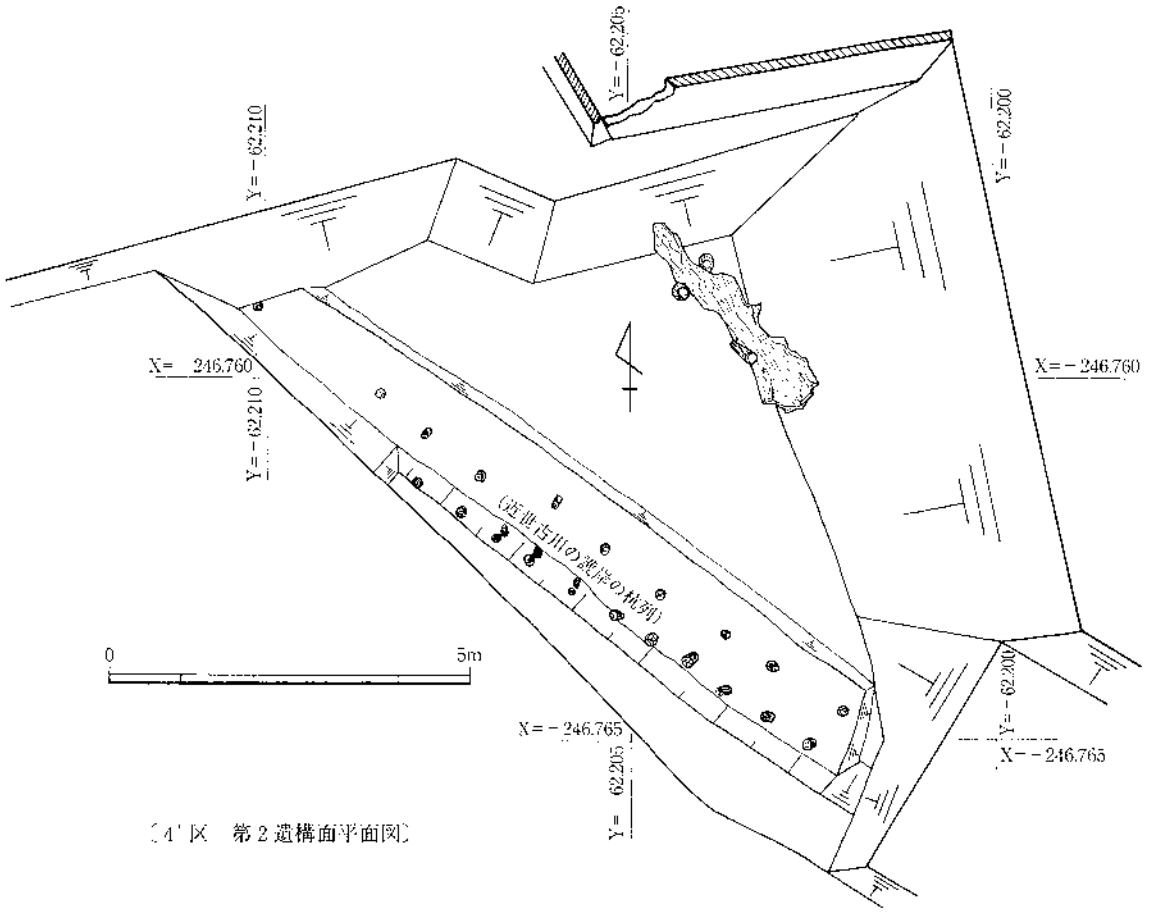
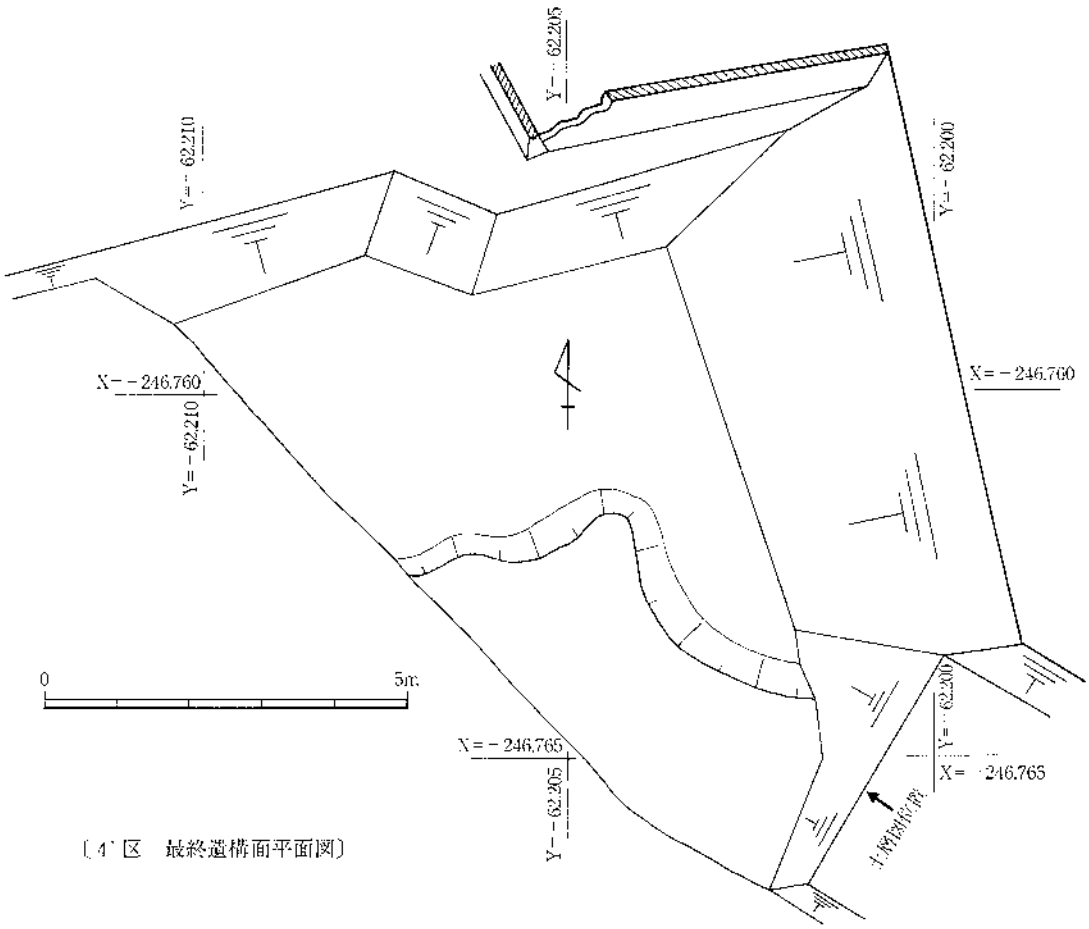


図27　4’区南東壁土層図



〔4'区　第2遺構面平面図〕



〔4'区　最終遺構面平面図〕

図28　4'区遺構平面図

C．4区出土の遺物

4区からは北東側の落ち込み部に堆積した土を中心として古墳時代の土師器・須恵器が数多く出土している。以下、包含層・遺構に分けて記述する。

《4層出土の遺物》　4層としているものは中世の水田層と考えられるものであり、出土遺物は少ない。古墳時代の土師器の小破片も出土しているが、確認される中で最も新しいものは15世紀代の土器である。このうち158は中国製の青磁碗で、底部内面にかすかに輪花状の模様と思われるものが描かれているが判然としない。釉は一部外面底部に及んでいるが、畳付け部は削り取っている。159は瓦質の羽釜である。小破片のため口径は不明。やや内傾気味に立ち上がった頸部には3本の浅い凹線が巡らされ、口縁端部は丸く収められている。

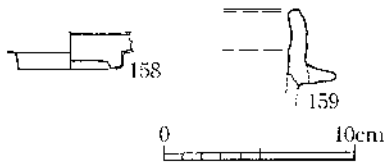


図29　4区4層出土遺物

《青灰色土Ⅱ出土の遺物》　本層からの出土遺物は多いが、時期幅が認められる一群である。古墳時代初めと思われる土師器の甕・壺・高杯・鉢が一番多いが、古墳時代前期の土師器壺・鉢・高杯のほか古墳時代後期に入る須恵器杯なども出土している。

このうち須恵器の杯蓋160はかすかに稜をもち、口縁端部は段をなしている。杯身（161・162）の立上り部は内上方に伸び、端部を丸く収めている。これらの須恵器については、6世紀前半のものと言えよう。土師器甕のうち163～168は頸部下半から体部にかけて右上がりのタタキが施されているもので、伝統的な弥生Ⅴ様式の系譜を引くものである。これらの口縁端部には粗いキザミ目が施されている。170～173はこれらの甕の底部となるもので、タタキは底部付近まで及んでおり、底部は平底となっている。庄内式新段階に併行する時期のものと考えている。

これに対し、174の甕は体部のタタキは残るものの粗い平行タタキで、体部は球胴化が進み、底部はわずかに平底を呈する程度である。182もこのタイプと思われ、これらについては布留式併行期まで下るものであろう。また、175の甕は胴部が丸みを帯びつつ長胴化の傾向がうかがわれる。摩滅が著しく調整については不明であるが、形態から前述した須恵器杯に伴う時期のものと思っている。

壺では口縁部が大きく外反し端部に面をもつものが多い。このうち183～186は口縁端部に装飾を施すもので、183では竹管による円形文様を配し、その他のものは細かな斜格子文が施されている。203～205は複合口縁の壺である。このうち203は口径18.4cmとやや大きく、口縁下部を垂下させたものである。摩滅が著しいが、端面の下部の一部に竹管による小さな円形文が施されているのを確認している。206・209はともに口縁部を欠いているが小型丸底壺となるものと思われ、体部には粗いハケによる調整が施されている。210～212も同じく小型丸底壺であるが、210では

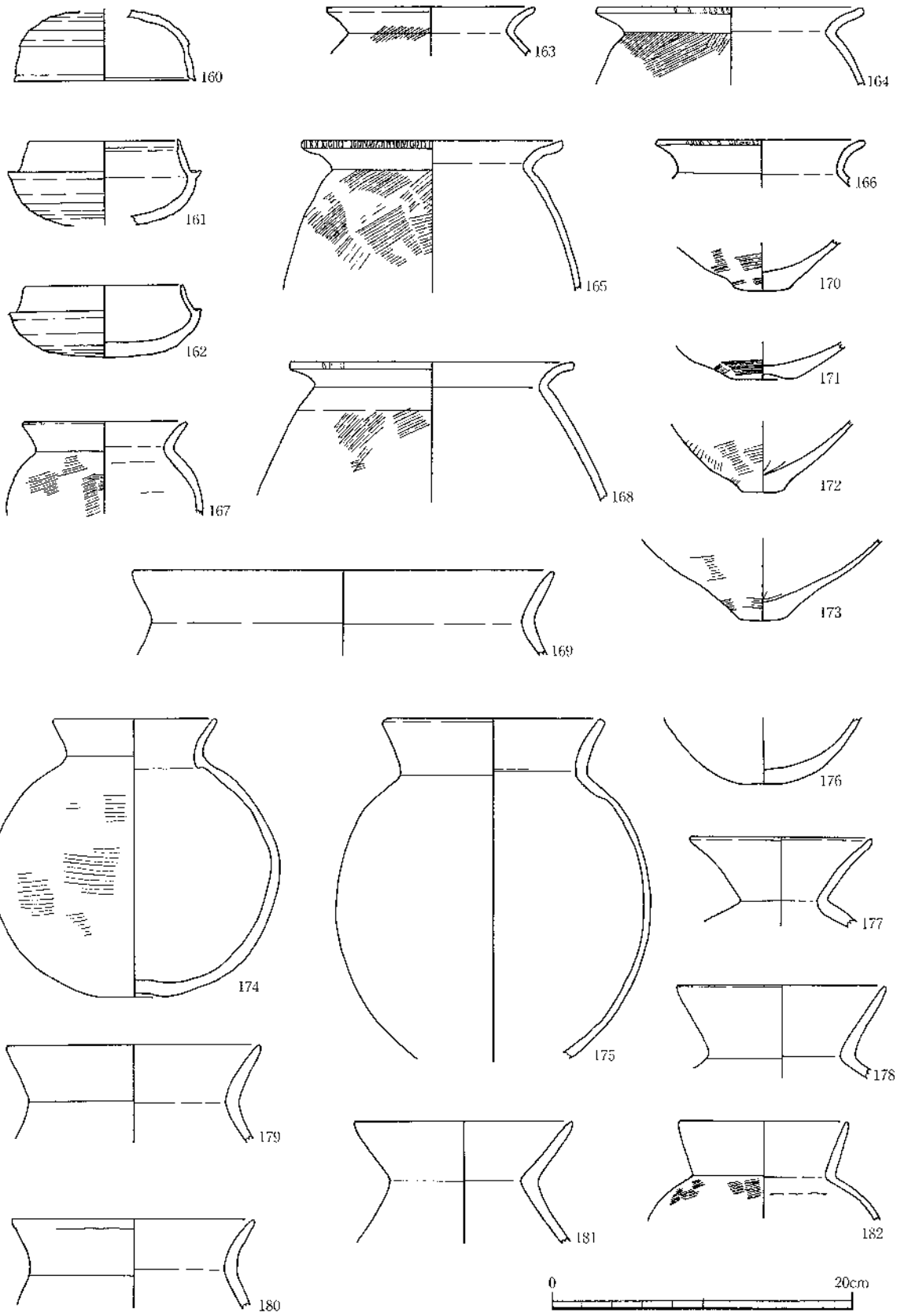


図30　4区青灰色土Ⅱ出土遺物（1）

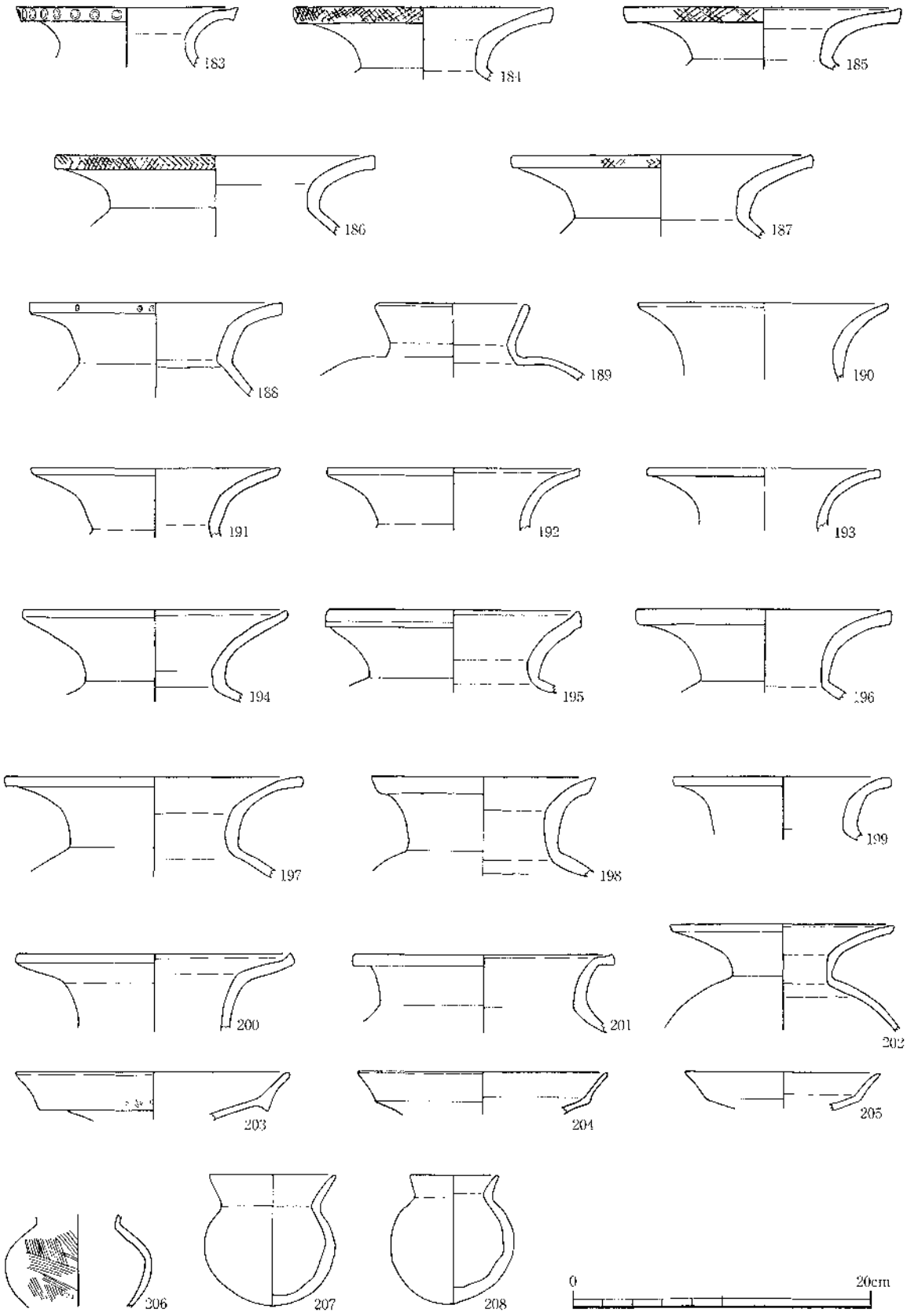


図31　4区青灰色土Ⅱ出土遺物（2）

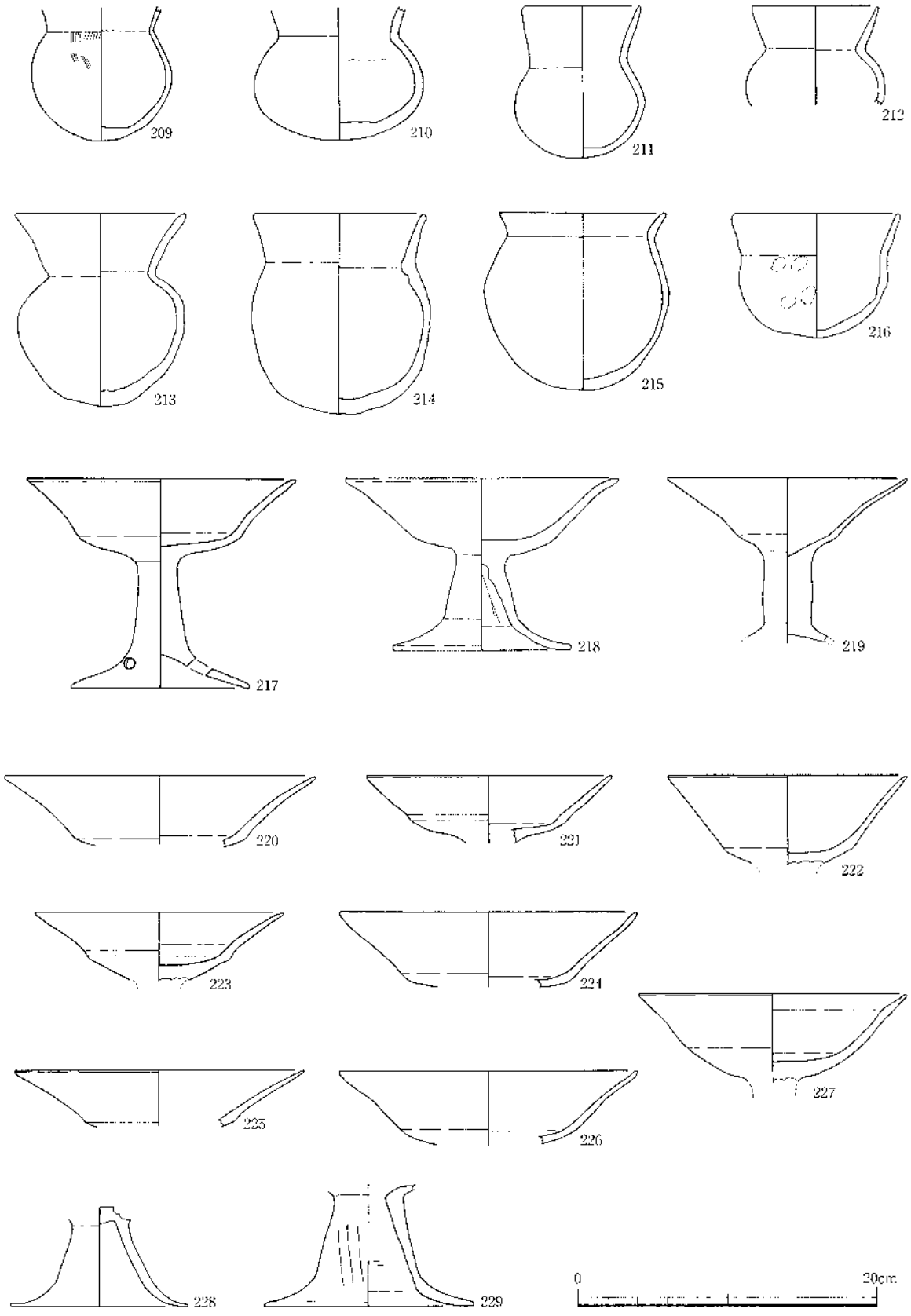


図32　4区青灰色土Ⅱ出土遺物（3）

胴部がやや扁平となっている。また、211の口縁部は長く発達したものであるが、212では口縁部は短く外側に開きつつやや内傾するなど差異が認められるが、概ね布留式古段階に併行する時期のものと考えている。208・215の壺は口径が広く、口縁部が短く外反して立ち上がる。摩滅が著しく調整については不明であるが、形態からして古墳時代中期から後期にまで下るものであろう。なお、216は口縁部が短く外反し、胴部径より口径が広いもので、器形的には鉢と称すべきものであろう。体部に指押さえの痕跡が残っている。

高杯217は水平に伸びた体部から口縁部は屈曲し外反気味に大きく開くもので、脚部は中実である。また脚部はなだらかに開いており、裾部中位に1cmほどの穿孔が施されている。これに対し、218の高杯は稜はなく体部から口縁部にかけて丸みを帯びつつ開いている。また脚部も中空となっている。前者は庄内式併行期、後者は布留式併行期のものと考えている。220～227はいずれも杯部のみの出土であるが、221・222のように体部と口縁部の境に稜を持つものが多いが、稜を持つものでも222のように体部に比して口縁部の長いものも見られる。227は丸みを帯びて開くものであるが、口縁端部の内側が強いナデによって外反し細くなっている。この高杯については

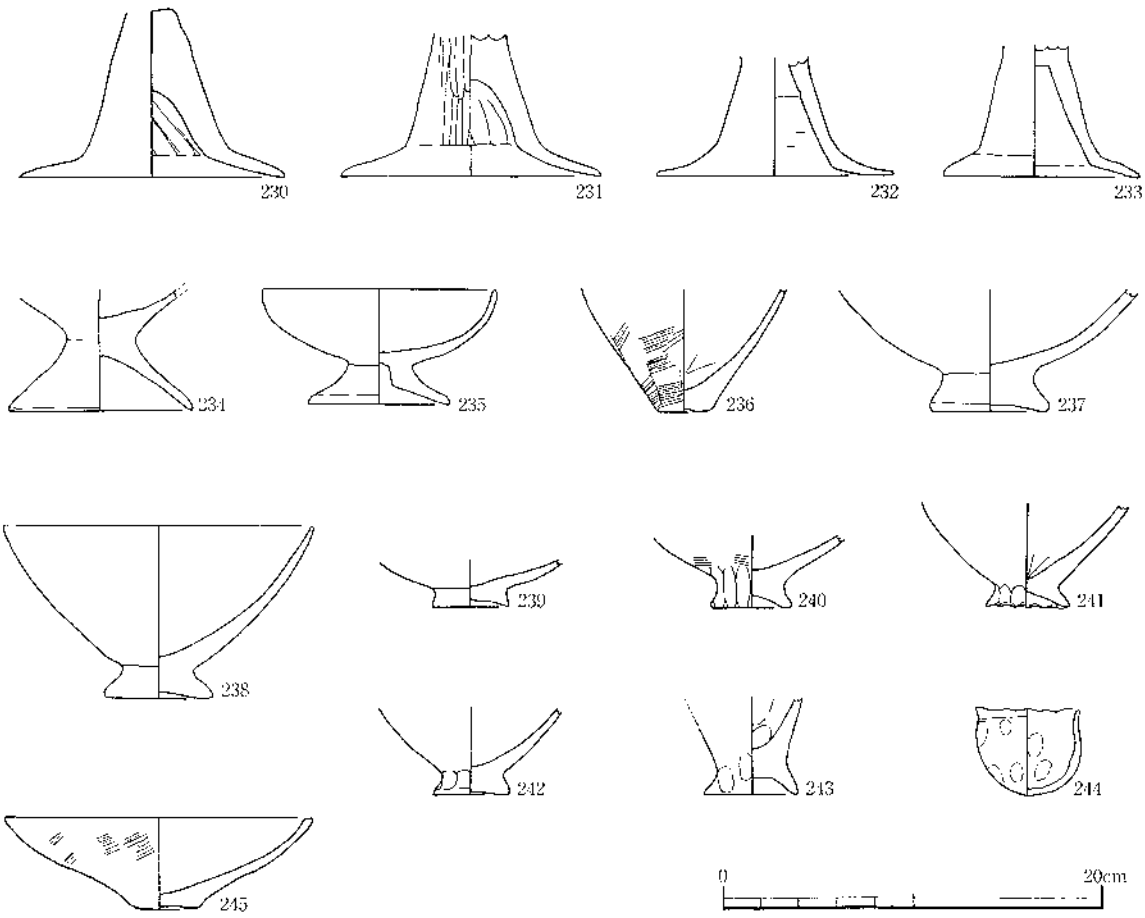


図33　4区青灰色土Ⅱ出土遺物（4）

古墳時代中・後期まで下る可能性を考えている。228～233は脚部のみであるが、いずれも中空となっている。このうち230・231は脚部中位までが中空で、この部分は棒状工具により抉りとったような痕跡が認められる。232・233の中空部は横方向のナデ調整により平滑に仕上げられている。また、裾部の屈曲も著しいものである。234は椀型の高杯となるもので、脚部はハの字状に広がるものである。235も同じく椀型の高杯であるが、口径は12.5cmと広いわりに器高は6.1cmと低い。236は平底で底部から体部にかけて斜め方向のタタキ目が施されている。甕の底部の可能性もあるが、ここでは一応鉢として取り扱った。237・238の鉢は脚台上の底部がつき、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるタイプのものである。240～242の鉢はいずれも底部付近に強い指頭圧痕が残り、240・241では底部は上げ底状になっている。これらの鉢は庄内式期に併行する時期のものであろう。243の底部は上げ底で底部付近に指頭圧痕が施されており、体部の立ち上りは急である。このことから脚台Ⅰ式の製塩土器と考えている。244は手づくねのミニチュア土器である。245の鉢は口径16.3cm、器高4.8cmを測るもので、体部は細い斜め方向のタタキを施した後、ナデ調整を加えている。内面にもナデ調整が施されており、口縁端部を平滑な水平面に仕上げるなど全体に丁寧なつくりである。

《暗灰色土Ⅱ出土の遺物》　本層からの出土遺物としては土師器の甕・壺・高杯・鉢などがある。落ち込み部での二次堆積の遺物ではあるが、比較的時期にはまとまりが見られる一群である。このうち土師器の甕口縁部（246～252）についてみると、多少のバリエーションは認められるもののいずれも頸部からくの字状に外反するもので、頸部下半から体部にかけて右上がりのタタキが施されている。端部は丸く収めているものと面を作り出しているものがあり、面を成すものでは246・252などのようにキザミ目が施されている。甕の底部（253～255）はいずれも平底となっており、このうち255では底部付近までタタキが密に施されている。

257・258は複合口縁の壺である。257では口縁端部と頸部との屈曲点の二箇所にキザミ目が施され、258では口縁端部面に斜格子のキザミ目、口縁部下方に竹管による円形文が施されている。その他の壺では頸部が短く立ち上がり、口縁部は大きく外反するタイプのもの（259～263）が多い。これらの壺は端部をかすかに上方に摘み上げ端面を作り出し、この部分に斜格子のキザミ目が施されている。

高杯の杯部（266～271）はいずれも体部と口縁部との境に稜を持つもので、口縁部は外反気味に立ち上がっている。脚部は中実で、裾部はハの字状に開き、中ほどには径約1cmの穿孔が4箇所施されている。鉢では口径13cm前後で、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるタイプ（274～277）が多い。279～281は製塩土器で、脚部はかなりの上げ底となっている。脚部にはタタキは施されていないが、280でみると体部は斜め上方に立ち上がっていき、タタキによる調整がなされているものと思われる。このタイプの製塩土器はこれまでの周辺の調査では大塚遺跡で

数点確認されている。また、みなべ町の海岸部に所在する製塩遺跡である大目津戸泊りⅠ遺跡からもわずかではあるがこのタイプと思われるものが出土している。大阪南部辺りで弥生時代末から古墳時代にかけて盛行するタイプと似ているが詳細については不明である。

282・283は粗製の大型鉢である。胎土には砂粒を多く含む。体部には粗いタタキが施され、283のように口縁部下に突帯が貼り巡らされるものもある。あまり類例のみないものであるが、これまでの大塚遺跡の調査でまとまって確認されており、和歌山県南部から三重県南部にかけて出土例が多いものである。

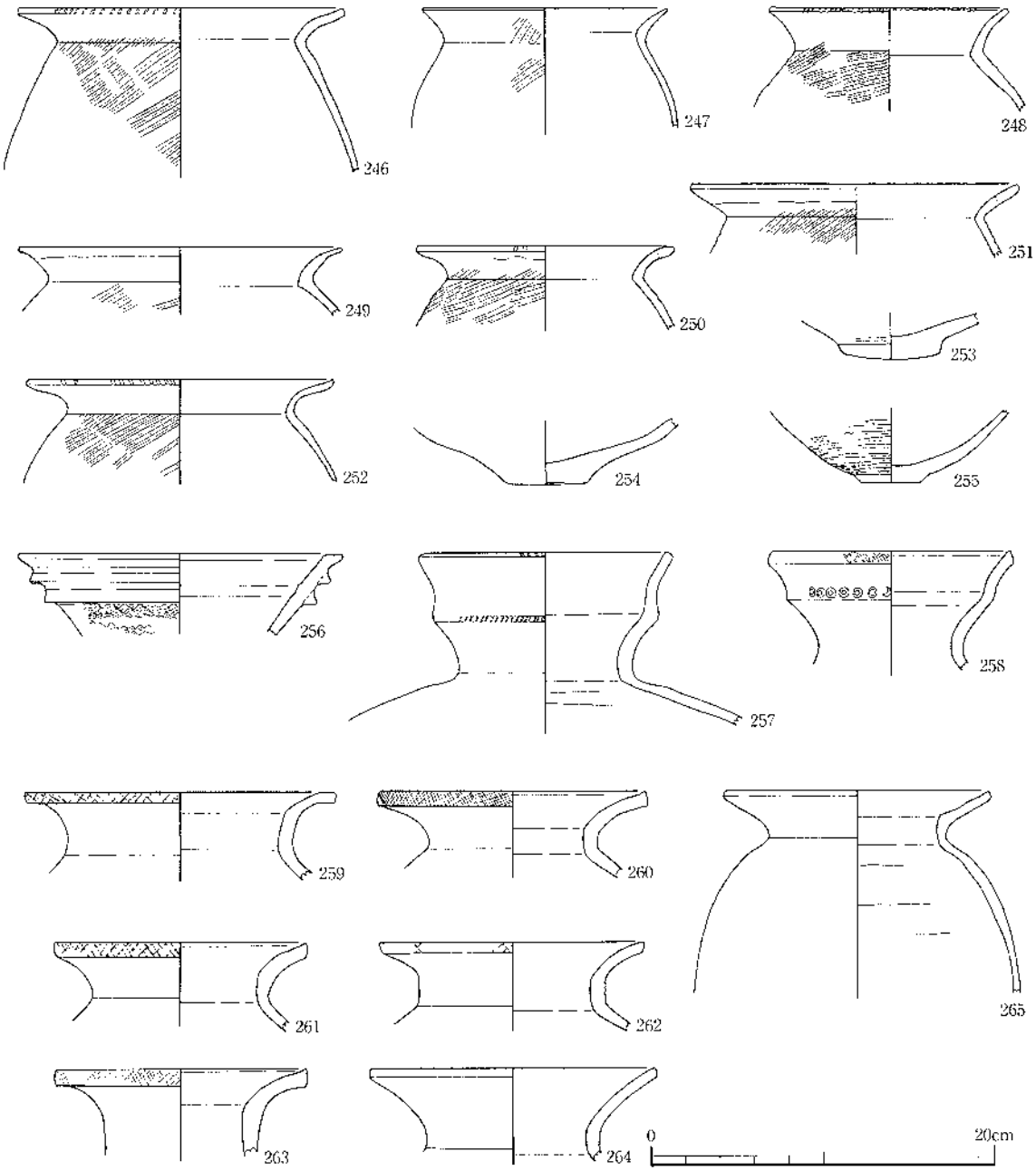


図34　4区暗灰色土Ⅱ出土遺物（1）

なお、256の壺は、弥生時代中期の土器であろう。口縁端部は水平に作り出されており、端面の中央部には浅く細い沈線が一条巡らされている。口縁部下には断面三角形の突帯が二条貼り付けられており、その下には粗い波状文が二段確認される。搬入品の可能性が高い。以上の土器については、256の弥生土器を除けば概ね庄内式併行期のものと考えられよう。

《溝102出土の遺物》　出土遺物には古墳時代初めから前期にかけての土師器の甕・壺・高杯・鉢のほか後期の須恵器杯などがある。須恵器杯蓋のうち284は小破片の復元ではあるが口径11.0cmとやや小さく、器壁も薄い。口縁端部がわずかに外側に張り出し面を成している。杯身286・287の立上り部は内上方に伸び端部は丸い。底体部は深めのものであるが、288は底部が平で浅くな

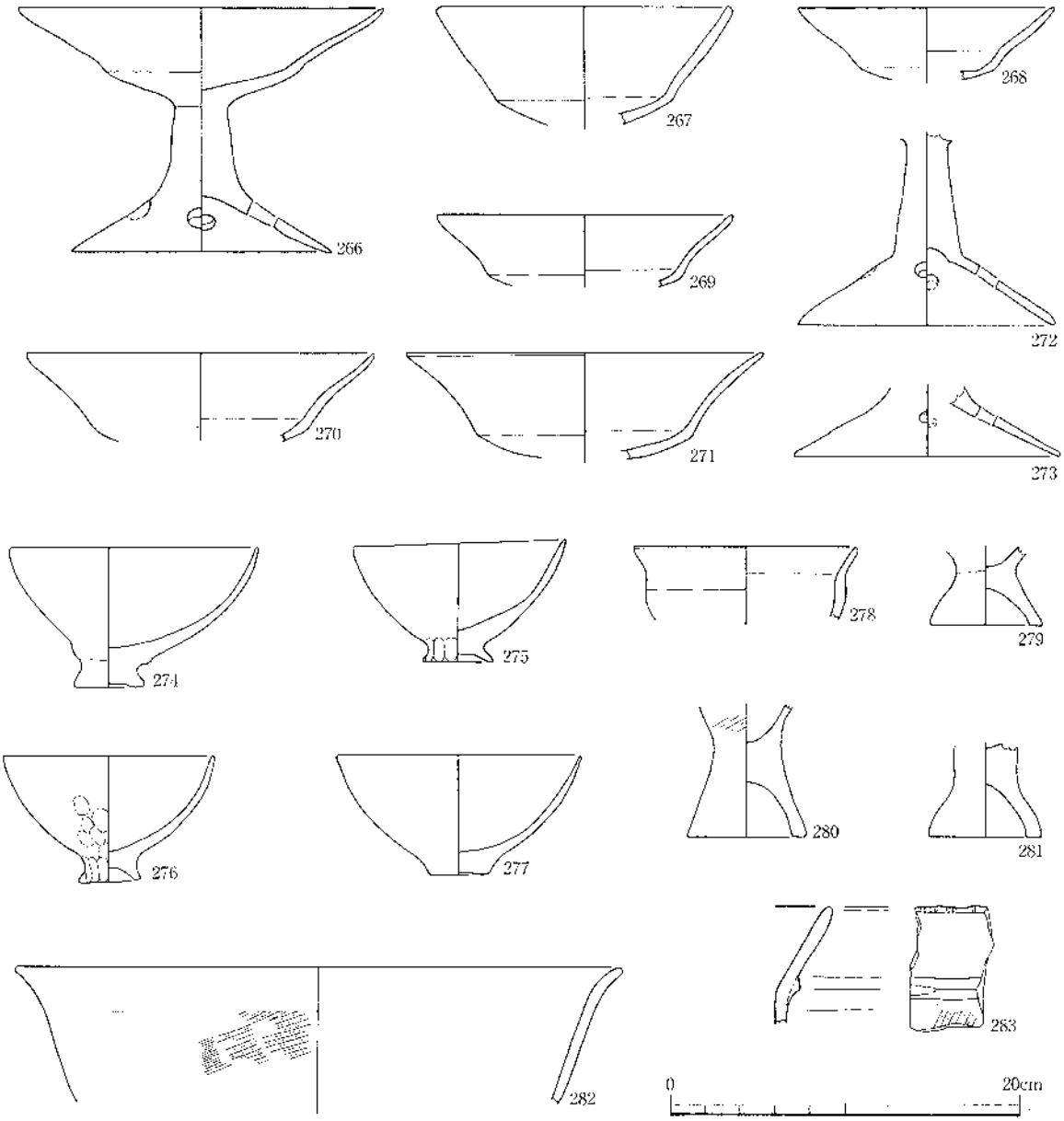


図35　4区暗灰色土Ⅱ出土遺物（2）

っている。これらの須恵器は6世紀前半段階のものと言えよう。

土師器の甕のうち289は口縁端部にキザミ目を施し、体部にはタタキの残るものである。290～292の甕についてはおそらくタタキによる調整はなく、体部は球形に近いもので底部は丸底になるものと思われる。

高杯のうち293の杯部は体部に比して口縁部が大きく、斜め上方に立ち上がるもので、布留式併行期のものであろう。脚部は中空で裾部が屈曲して外側に開くもの（294・295）と脚部の中位まで中空となっており、この部分の粘土を棒状の工具によって抉りとった痕跡を残しているもの（296・297）の二つのタイプが見られるが、裾部の屈曲具合からいずれも布留式併行期以後のも

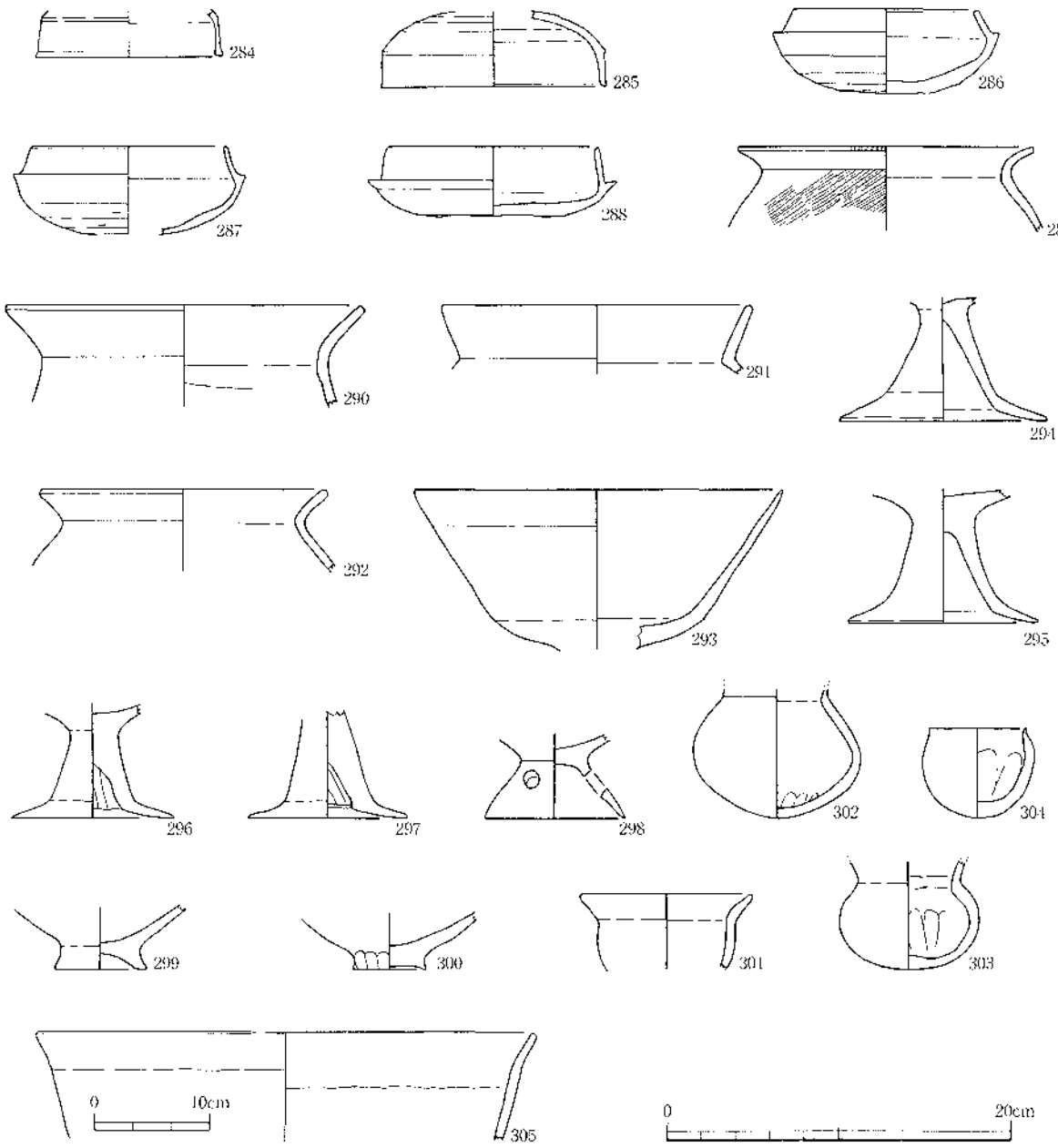


図36　4区溝102出土遺物

のと言えよう。298は椀形の高杯になるものである。鉢のうち299・300は脚台状の底部で、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるものである。301の鉢は口縁部が短く外側に開く。底部はおそらく丸底状を呈するもので、庄内式新段階から布留式古段階にかけてのものであろう。

302・303は小型丸底壷である。304はミニュチアの手づくねの土器で、内面には指押さえの痕跡が明瞭に残る。305は大型の粗製鉢であり、口縁部はかすかに外反しているが、成形時にこの部分には異なる粘土を継ぎ足しているようで、体部には2～3㎜の粗い砂粒が多く入っているのに対して、口縁部の胎土は細かなものである。

D．4’区出土の遺物

《近世の古川出土遺物》　出土遺物には土師器皿、丹波焼の擂鉢のほか伊万里の染付け碗・皿などがある。306の土師器皿は口径7.9cm、器高1.4cmを測るもので、内外面とも丁寧なナデ調整が施される。近世の土師器皿である。307は丹波の擂り鉢。308は唐津の碗と思われるもので、底部内面には天目釉がかかる。309は天目茶碗であり、体部下半は露胎。胎土は黄色の土で、おそらく瀬戸の製品であろう。310の碗は淡い緑色のガラス質の釉が高台部付近まで施されるもので、焼成は堅密で磁器の感がある。近世の瀬戸の製品の可能性が高い。伊万里の染付け碗では311・313・314がくらわんか茶碗と称されているもので、それぞれ体部には草花文・菊文が描かれている。315は細く長い首の付く伊万里の瓶である。316の染付け体部内面に松葉文を配し、内底面の釉は蛇の目状に削り取っている。これらの遺物は概ね18世紀までのものと思われ、江戸時代後期にドるものは出土していない。

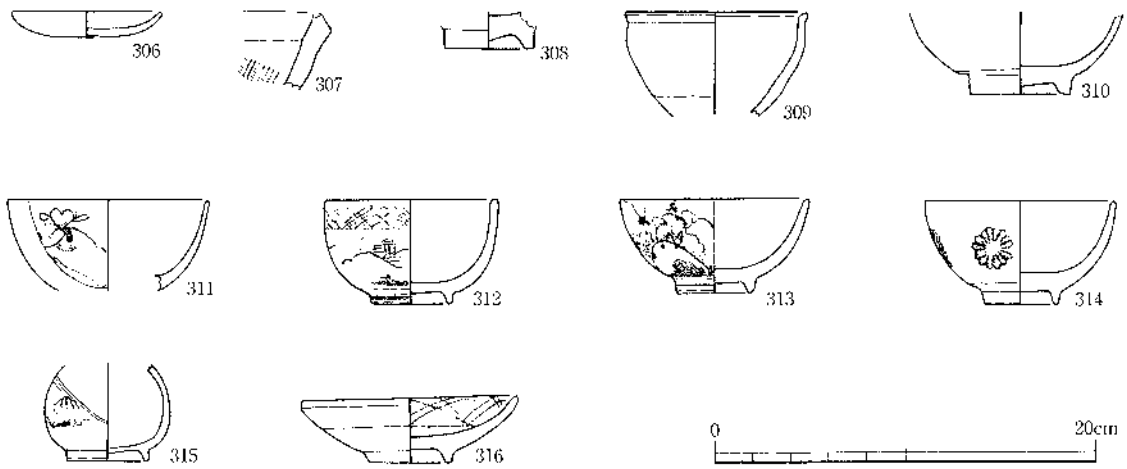


図37　4’区近世古川出土遺物

4．5・6区の調査

5・6区は県道上富田南部線の東側に当たる地区である。遺構面としては、第4層上面・第5層上面・第6層上面さらに第9層上面の4面を確認しているが、全体に遺構密度は低く、竪穴住居跡などは検出されていない。また、出土遺物も極めて少ない状況であった。以下、各面ごとの概要を記すことにする。

A．5・6区の遺構

第4層上面　幅10cm前後の鋤溝をほぼ全面で検出した。第3層としている水田に伴う鋤溝である。出土遺物から3層は中世の水田と考えられるものであり、その方向は現在の水田と合致している。また、畦畔も現在の水田とほぼ同じ場所で検出されている。このことから現在の水田は中世の水田区画を踏襲して営まれていることが判明した。

第5層上面　ほぼ全域にわたって径5～30cmほどの柱穴状遺構を多数検出した。これらの穴の深さにはばらつきがあり、深いものでは40cm以上に及ぶものもあるが、大部分は10～20cmほどであった。多数の穴が検出されたにも拘らず整然とした並びは確認できず、具体的な建物を復元するには至らなかった。遺構からの出土遺物がまったくなく時期については判然としないが、第3層・4層が中世の遺物包含層であり、第5層は古墳時代の包含層である可能性が高い。このことから柱穴状遺構は古墳時代～中世に帰属するものと考えられよう。その他には6区の東端で、後述する旧河道203の東肩を検出した。旧河道の方向は、現在の水田畦畔と同じくほぼ南東から北西への向きとなっている。また、東肩の落ちは二段の緩やかな落ちとなっていた。

第6層上面　第5層上面と同じく径5～30cmほどの柱穴状遺構を多数検出したが、第4層上面に比べるとその数は少ない状況であった。そのほか、不整形な土坑を2基検出した。このうち土坑207は長径約2.0m、短径約1.5mを測るやや歪な楕円状を呈する。深さは最深部でも15cmほどと浅いものである。埋土は2層で、上層は暗褐色シルト（10YR3/3）が粒状に入る褐灰色シルト（10YR5/1）で、下層は暗褐色シルト（10YR3/3）が粒状に入る褐灰色シルト（10YR4/1）であった。この土坑から遺物は出土していない。土坑206は最大幅約1.75m、長さ約6.5mを測るアメーバー状を呈する。深さは20cmほどと浅いもので、埋

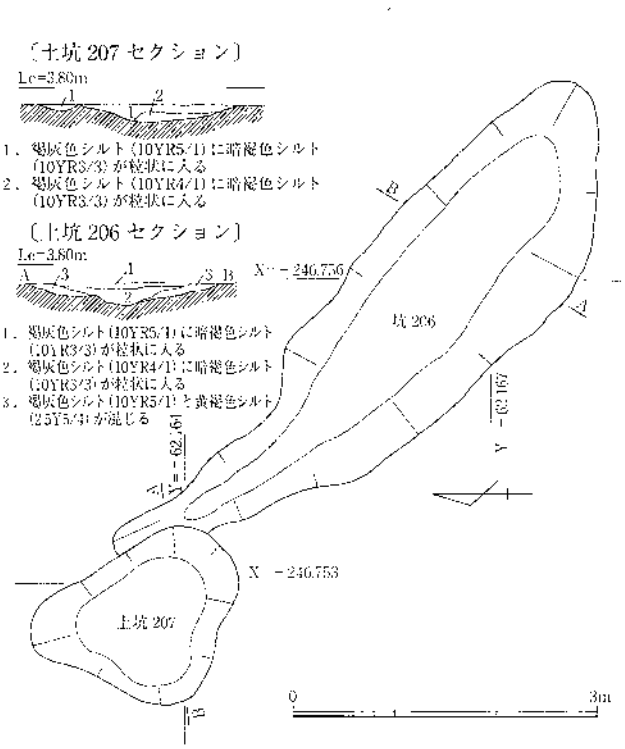


図38　6区土坑206・207実測図

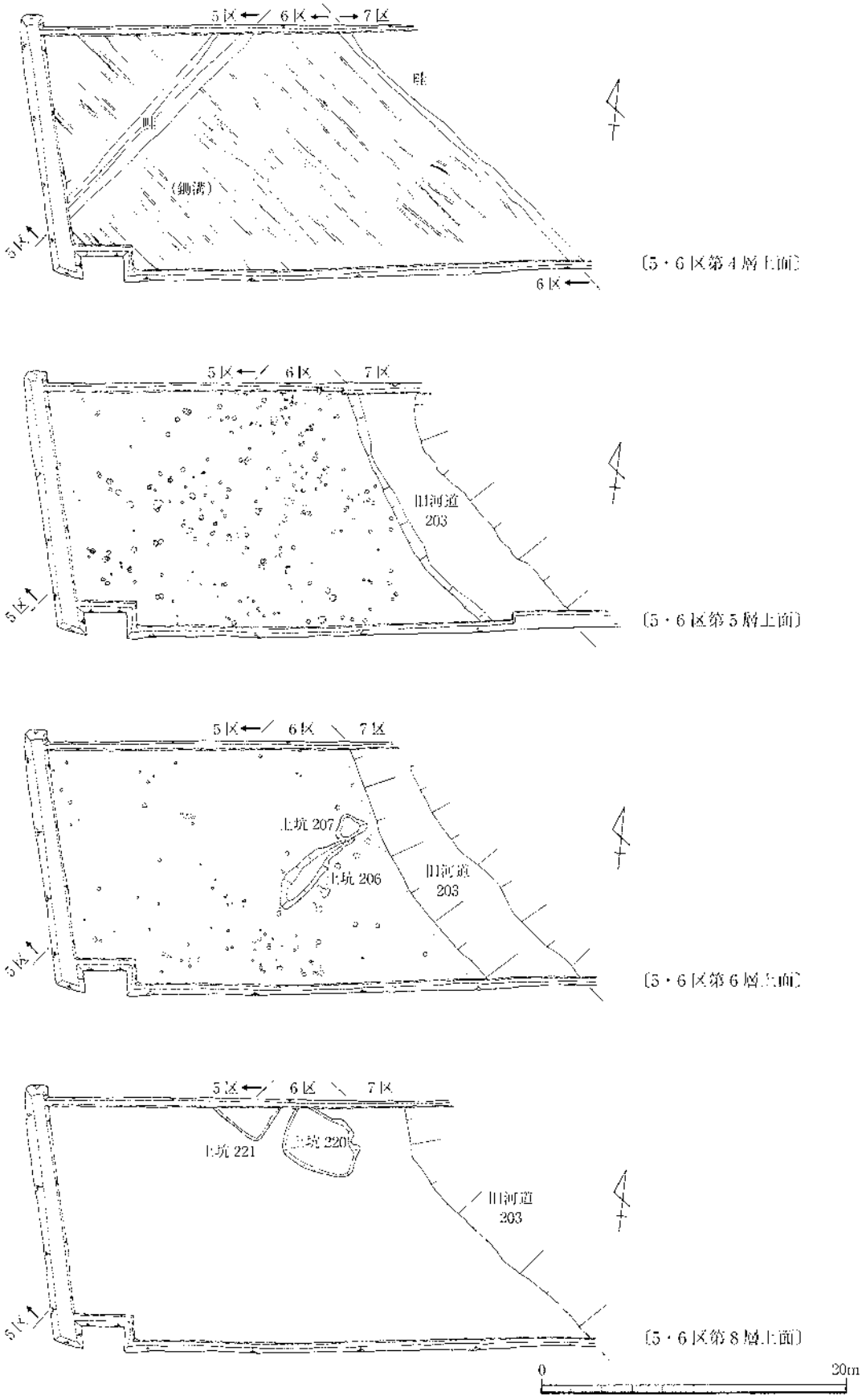
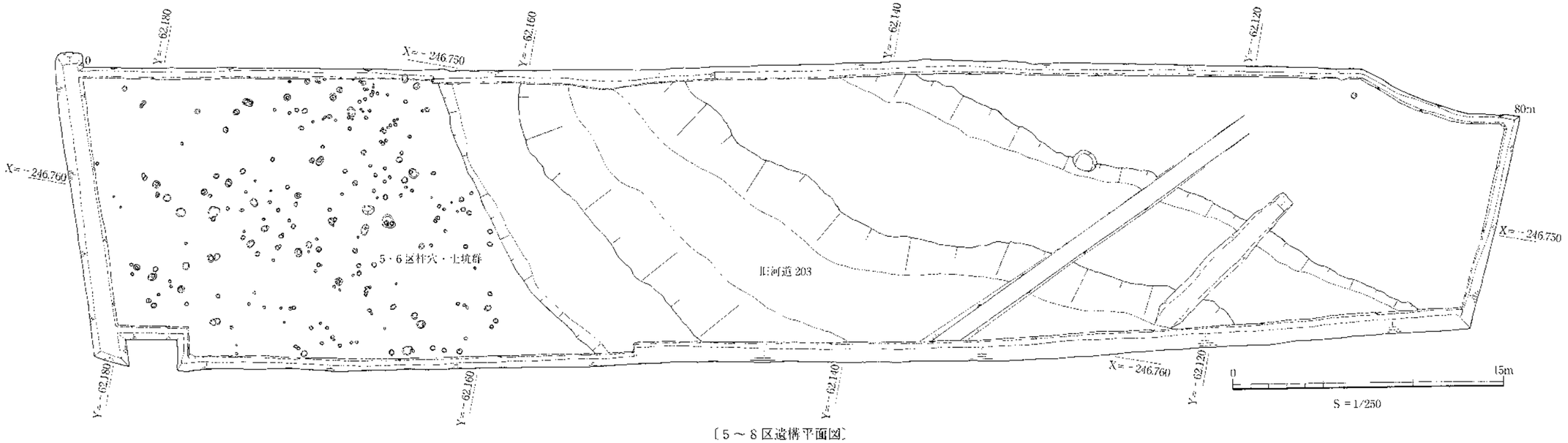
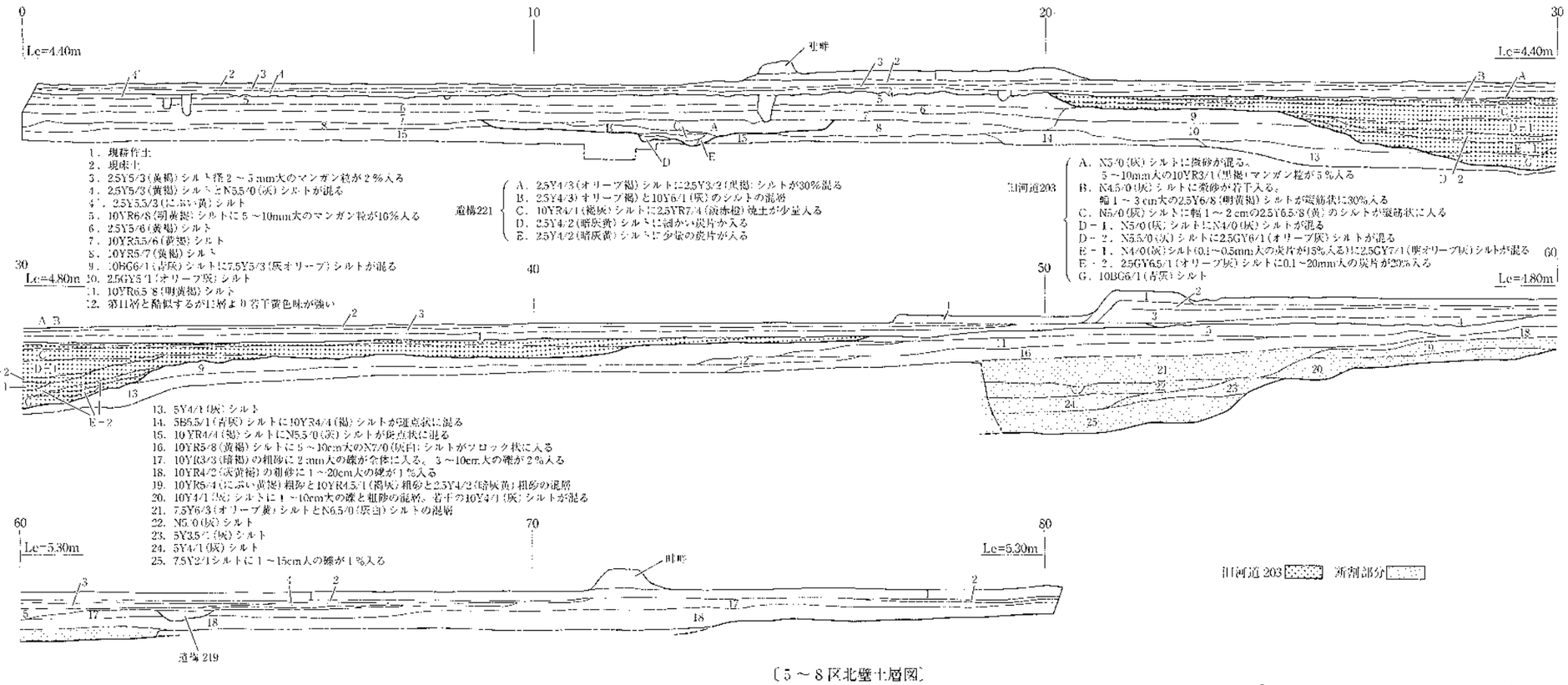


図39　5・6区遺構平面図



〔5～8区遺構平面図〕



〔5～8区北壁土層図〕

図40　5～8区遺構平面・北壁土層図

土は3層であるが前述の土坑207の埋土に酷似している。この土坑からも遺物は出土していない。なお、この第6層からは図示し得なかったがわずか1点ではあるが弥生土器の甕と思われる細片が出土している。

第8層上面　北側の壁際で2基の土坑を検出した。このうち土坑220は長辺約5m、短辺約3.6mを測る長方形に近い形状を呈する。深さは10cmほどと浅い。土坑221は調査区外に延びているため全容は不明だが、一辺4m以上を測り、深さは15cmほどである。ともに遺物は全く出土していない。また第7層以下から遺物は出土していないことから時期については判然としない。遺構ではなく単なる窪みであった可能性もあろうが、土坑の下層で炭・焼土が確認されている。

B．5・6区の出土遺物

遺構から遺物は出土しておらず、包含層のみの出土である。出土した遺物には中世の土師器皿・瓦器・土鍋などがある。

《6区3層出土遺物》　319の土師器皿は口径12.3cm、器高は2.4cmほどになるものと思われる。底部から口縁部にかけてなだらかに立ち上がるもので、口縁端部は丸く収めている。320は土師器の土鍋で、口縁部はくの字状に折れ曲がり端部を鋭く上方に摘み上げている。

《5区4層出土遺物》　317は瓦器の椀である。口径12.5cmを測る。口縁部のみであり、また摩滅が著しく調整等については不明である。318は土師質のこね鉢となるものであろうか。口径は復元で約28.0cmを測るものである。胎土は黄白色で細かな砂粒を多く含む。表面が著しく摩滅しているもので、瓦質のこね鉢の可能性もあろう。

《6区4層出土遺物》　321・322も土師器の土鍋である。このうち321は端部を鋭く上方に摘み上げるものであるが、端面にはかすかな凹線状の窪みが巡る。茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含まれている。322は摘み上げがさほど強くないが、口縁端部のヨコナデが強く、端面は全体に窪んでいる。胎土には片岩が含まれており、紀ノ川流域からの搬入品の可能性が高いものである。

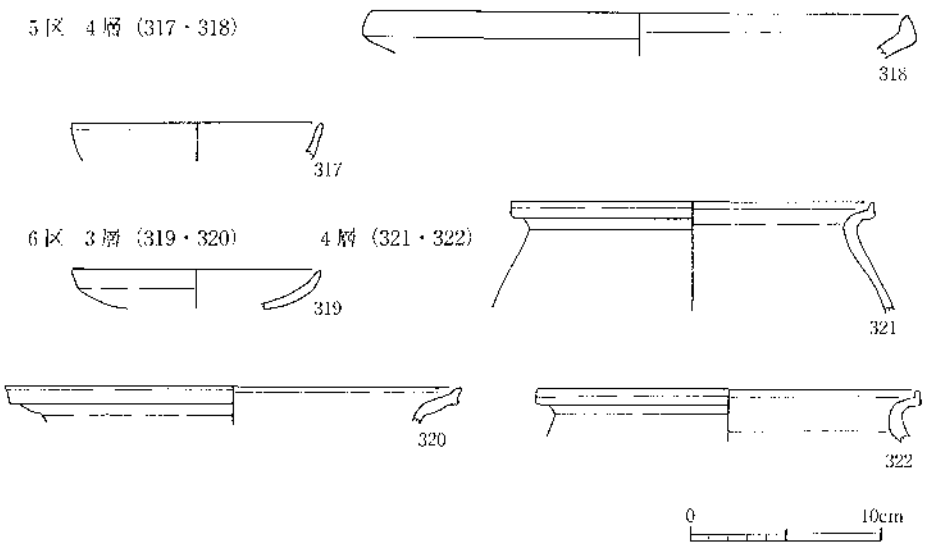


図41　5・6区出土遺物

5．7区の調査

7区は谷筋に当たる箇所であり、ここでは縄文時代後期から古墳時代にかけて流れていた自然流路を検出した。これを旧河道203としている。この河道の堆積層から縄文時代後・晩期の深鉢、弥生時代の甕・壺・高杯、古墳時代の杯・甕などが出土している。

A．遺　　構（自然地形）

旧河道203　中世の包含層である第4層を除去した面で検出したものであり、幅約25m、深さは検出面から1.5mを測るものである。河の断面は二段の落ちになっており、中央部のゆるやかなV字状となる部分の幅は10mを測る。自然堆積によって埋まっており、堆積はほぼ平行で大きくは7層に分層できる。ただし、E－2層については東側の微高地側からの落ち込みによる堆積層と考えられる。下図に土層図とは別に堆積状況を模式図として提示したが、最上層に当たるA層には古墳時代後期の遺物に混じって、混入の可能性もあるが鎌倉時代の遺物が若干含まれている。中層のB・C・D層からは古墳時代後期から奈良時代の遺物が出土している。その下のE層は弥生時代前期から中期の土器が出土し、E－2層およびG層からは縄文時代後期から晩期の土器が出土している。これらの堆積状況からこの自然流路は長い時間をかけ徐々に堆積していき、中世の前半に埋没していたことが考えられよう。

B．遺　　物

第3層および第4層からは中世の土師器皿、東播系のこね鉢、備前の擂鉢などが出土しており、第5層からは古墳時代後期の須恵器杯身、奈良時代の杯が出土している。また、自然流路である河道203からは縄文時代後期から中世までの遺物が出土している。

《3層出土遺物》（図43）　土師器の皿（323～325）のうち324は口縁部が肥厚し、全体に器壁が厚いもので、15世紀代のものである。327・328は土師器の鍋で、口縁部下に突帯が貼り付けら

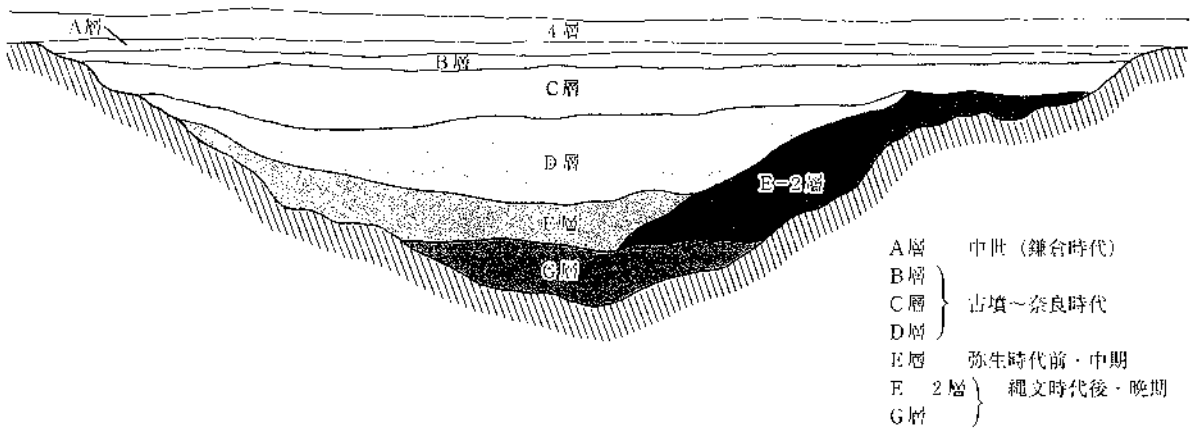


図42　旧河道203堆積模式図

れている。中世陶器としては備前の擂鉢329、壷331、常滑の甕330がある。

《4層出土遺物》（図43）　333は土師器の鍋もしくは羽釜となるものであろう。中国製磁器のうち334は青磁の碗。335は白磁の碗で、体部下半は露胎となっておりおそらく口縁部は玉縁状となるものであろう。336は備前の擂鉢で口縁部断面は三角形を呈し、上下に拡張されていない。337・338はともに東播系のこね鉢であり、13世紀代の製品である。

《5層出土遺物》（図43）　須恵器杯339の受け部は内上方に立ち上り、端部は丸い。6世紀前半から中頃にかけての製品であろう。341・342は須恵器の杯Bで、ともに底部径は10.8cmを測り高台は細くやや外方に開く。飛鳥から奈良時代にかけてのものと思われる。

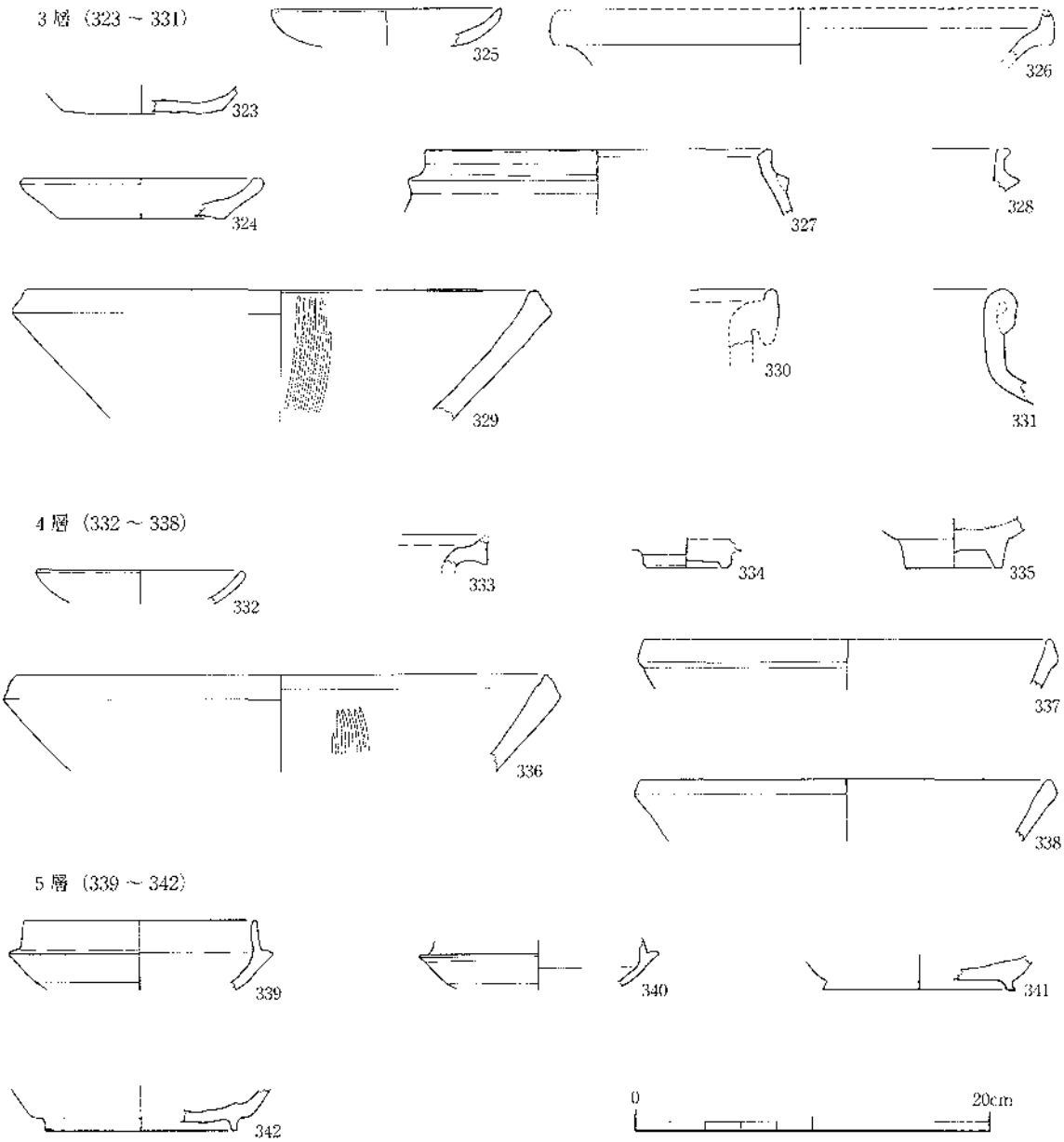


図43　7区3・4・5層出土遺物

《旧河道203A層出土遺物》（図44）　343は瓦器の皿である。口径8.0cmで、ミガキは体部内面にまで及んでいる。13世紀前半頃の製品であろう。344は須恵器杯蓋で、口径14.2cm。口縁部は外側に開き、端部は段を成す。

《旧河道203B層出土遺物》（図44）　345・346は須恵器の杯身である。このうち345は口径13.6cmを測り、受け部は内上方に立ち上がる。端部は欠いており不明。346の杯身の受け部はやや外反しながら立ち上り端部を丸く収めている。6世紀前半から中頃にかけてのものである。

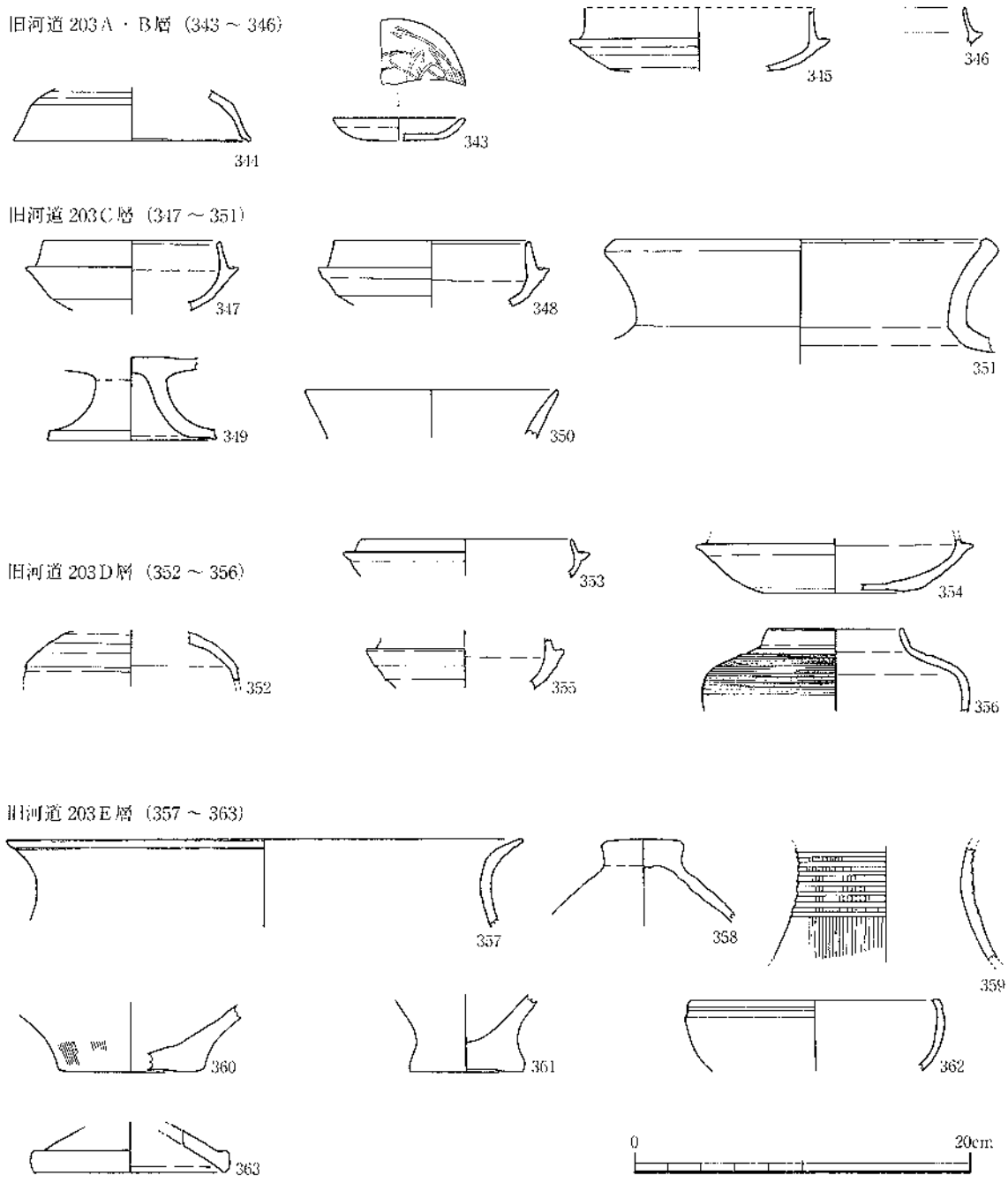


図44　7区旧河道203出土遺物（1）

《旧河道203C層出土遺物》（図44）　須恵器杯身347・348も前述の杯身と良く似た形状であり時期差はさほど認められない。349は高杯の脚部である。裾部にかけてゆるやかに屈曲し、端部は面を成す。内外面とも丁寧なヨコナデ調整が施されている。350は土師器で、壺の口縁部になるものであろう。摩滅が著しく調整については不明である。351の須恵器甕は口縁部がゆるやかに外反し、端部は摘み上げ気味に内側に丸く収めている。

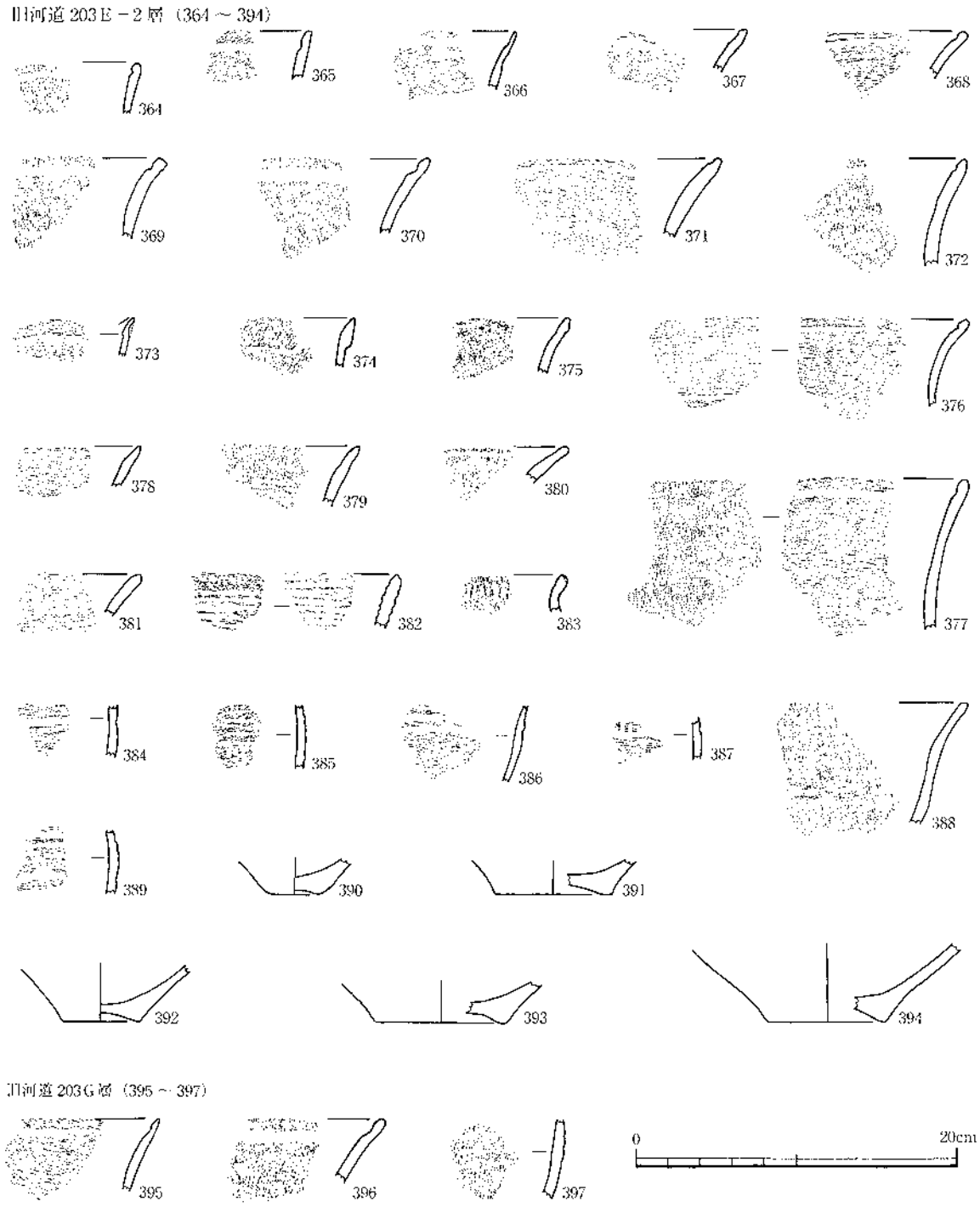


図45　7区旧河道203出土遺物（2）

《旧河道203D層出土遺物》（図44）　352の須恵器杯蓋は稜を持たず、天井部から口縁部にかけて丸みを帯びる。353～355は杯身である。このうち353は受け部の立ち上りが短く、6世紀後半から末まで下るものと思われる。356は須恵器の壷で、口径7.8cmを測る。頸部は短く内傾気味に立ち上がるものである。この壷についても、6世紀後半から末のものと言えよう。

《旧河道203E層出土遺物》（図44）　357は弥生土器の甕である。復元口径30.8cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は細くなり丸く収めている。外面口縁部下に、かすかに沈線状の窪みが巡っている。調整については不明。258は弥生土器の蓋として提示したが、内面の調整が粗く甕もしくは壷底部の可能性もあろう。黄灰色を呈し、胎土には大粒の砂粒が多く含まれる。239は弥生土器壷の頸部である。縦方向のハケ調整を行った後、5㎜間隔ほどでヘラ描きによる沈線が7本以上施されている。これらの弥生土器についてはⅠ様式の新相に位置づけられよう。360・361は弥生土器の甕もしくは壷の底部である。360の底部付近には縦方向の細かなハケ調整の痕跡が認められる。361の底部はかすかに上げ底状を呈する。362は弥生土器高杯もしくは鉢の口縁部で、内湾して立ち上がった口縁下に2条の凹線が巡る。363は弥生土器高杯の裾部である。これらの2点についてはⅣ様式まで下るものであろう。

《旧河道203E－2層出土遺物》（図45）　本層からは出土している遺物はすべて縄文土器である。このうち最も多いものは364～377のように口縁部が外反気味に立ち上り、口縁端部近くの内面に一条の凹線を施した深鉢である。凹線の形状は366・370のように比較的幅が広く浅いものと、372・376のように沈線状に狭く鋭利に施されたものがある。また、367・369のように端部を面取りし平坦となっているものと、その他のもののように端部を丸く収めているものがある。いずれも凹線と端部の間にキザミ目は施されていない。調整については摩滅が著しく判然としないが、比較的残りの良いものでみるとヨコ方向のナデ調整が施されており、ミガキの痕跡は見出せない。これらの土器は元住吉山Ⅱ式と考えられ、縄文時代後期中葉から後葉にかけてのものである。

385は横方向の粗い沈線を数条引き、その上下にキザミ目を施している。滋賀里Ⅲb式である。387も体部外面に沈線およびキザミ目を施すものである。388は内外面に貝殻条痕による調整を施し、口縁部外面は横方向のナデ調整を加えて平滑に仕上げている。389は三叉文と沈線および刻み目が施されている。これらの土器については、縄文時代晩期に帰属するものであろう。390～394は深鉢底部と考えられるものであるが、いずれも上げ底となっており後期に帰属するものであろう。底部のミガキの有無については、摩滅しているため不明である。

《旧河道203G層出土遺物》（図45）　最下層に当たる本層からも縄文土器のみが出土しているが、量的にはE－2層と比べると少ない状況であった。このうち395・396は口縁端部近くの内面に一条の凹線を施した深鉢であり、縄文時代後期中葉から後葉にかけてのものである。397は体部外面に浅い沈線が3条施こされる。縄文時代晩期に帰属するものであろう。

6．8区の調査

本調査区で検出された遺構は土坑ばかりであった。また、この調査区の微高地から旧河道203に向かって地山確認のためのトレンチを設けた結果、この旧河道より下層の堆積層からは縄文時代中期の土器が出土している。この状況から縄文時代中期の段階では、この微高地形から西方向に落ちる谷状地形となっていたと考えられる。基本層序は第1層（現水田耕作土）、第2層（現水田床土）、第3層（中世水田層）、第4層（中世包含層）、第5層（飛鳥時代包含層）である。

A．8区の遺構

検出した土坑は1.0～2.2mの規模のもので、深さも約10～24cmと浅いものばかりである。また、これらの遺構からの出土遺物は皆無のものが殆どで、出土した遺物は縄文土器の摩滅した細片とサヌカイトの剥片ばかりで、いずれの遺物も図示できないものである。

土坑210　調査区ほぼ中央北寄りで検出した。長楕円形の土坑である。規模は長軸1.5m、短軸約60cm、深さ20cmを測る。断面の形状は逆台形を呈し、埋土は黄褐色系シルトの2層に分層できる。ここからの出土遺物は皆無であった。

土坑211　調査区中央で検出した長楕円形の土坑である。規模は長軸約1.5m、短軸約60cm、深さは約30センチを測る。埋土は3層に分層でき全て黄褐色系のシルトである。出土遺物は第3層から石鏃の未製品が1点出土している。

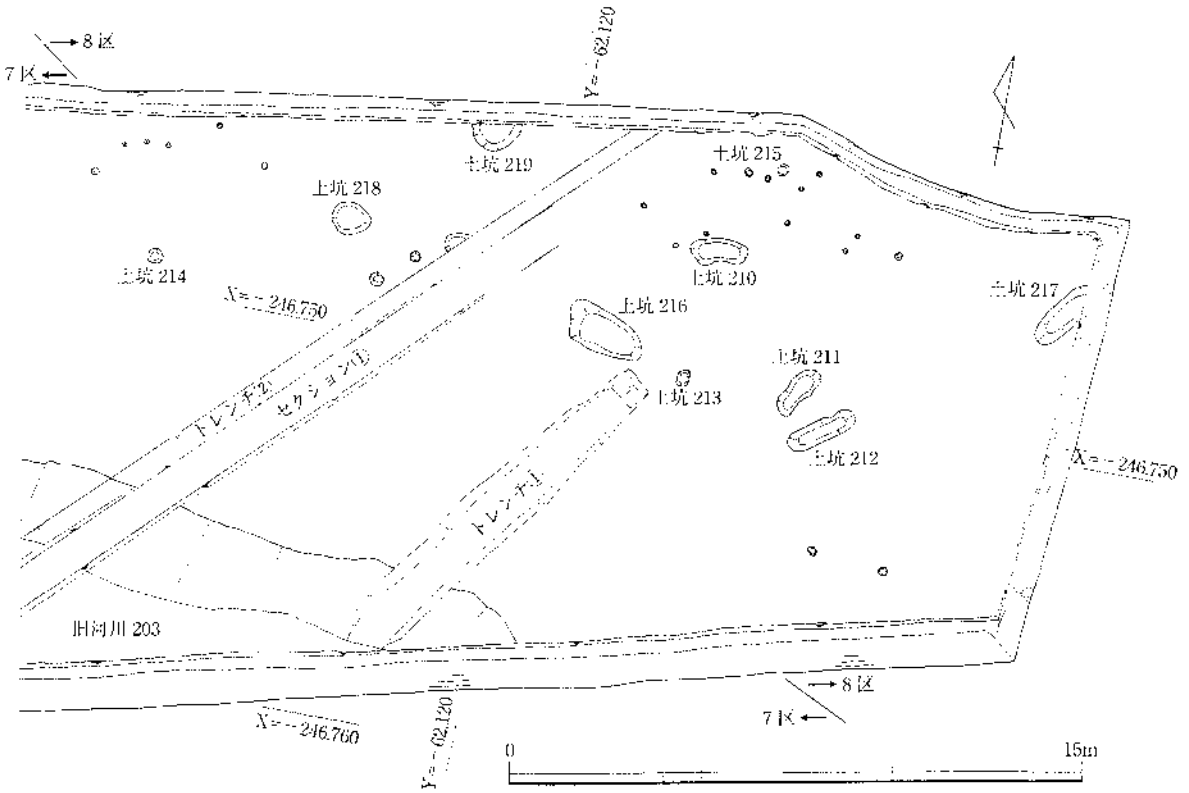


図46　8区遺構平面図

土坑212　長軸約1.9m、短軸55cmを測る。深さは約10cmと浅い。埋土は単層のシルト質で、色調は土坑210・211の上層とほぼ同一のものである。この土坑からの出土遺物は無い。

土坑216　形状は不定形で浅い遺構である。規模は長軸約2.2m、短軸約1.1mを測る。深さは12cmを測り、肩は緩やかに落ち、底は平らとなる。埋土は単一の明黄褐色シルトである。ここからの出土遺物には微量の縄文土器の細片とサヌカイトの剥片1片がある。

土坑217　調査区東端の中央北寄りで検出した。一部は調査区外である。遺構の形状および規模は土坑212と酷似し、遺構の軸もほぼ同一である。規模は長軸1.8m以上、短軸62cmを測り、深さ約15cmを測る。断面の形状は船底状を呈し、埋土は2層に分層できるが、基本的には第1層、第2層は同一のシルトで第2層に暗褐色のシルトが斑点状に入る。出土遺物は皆無であった。

土坑218　調査区中央北寄りで検出したやや楕円形の土坑である。規模は長軸1.05m、短軸88cmをはかり、深さは最も深いところで11cmと浅い。出土遺物は皆無であった。

土坑219　調査区北端中央で検出し、半分は調査区外のため全容は不明である。規模は1.25m×

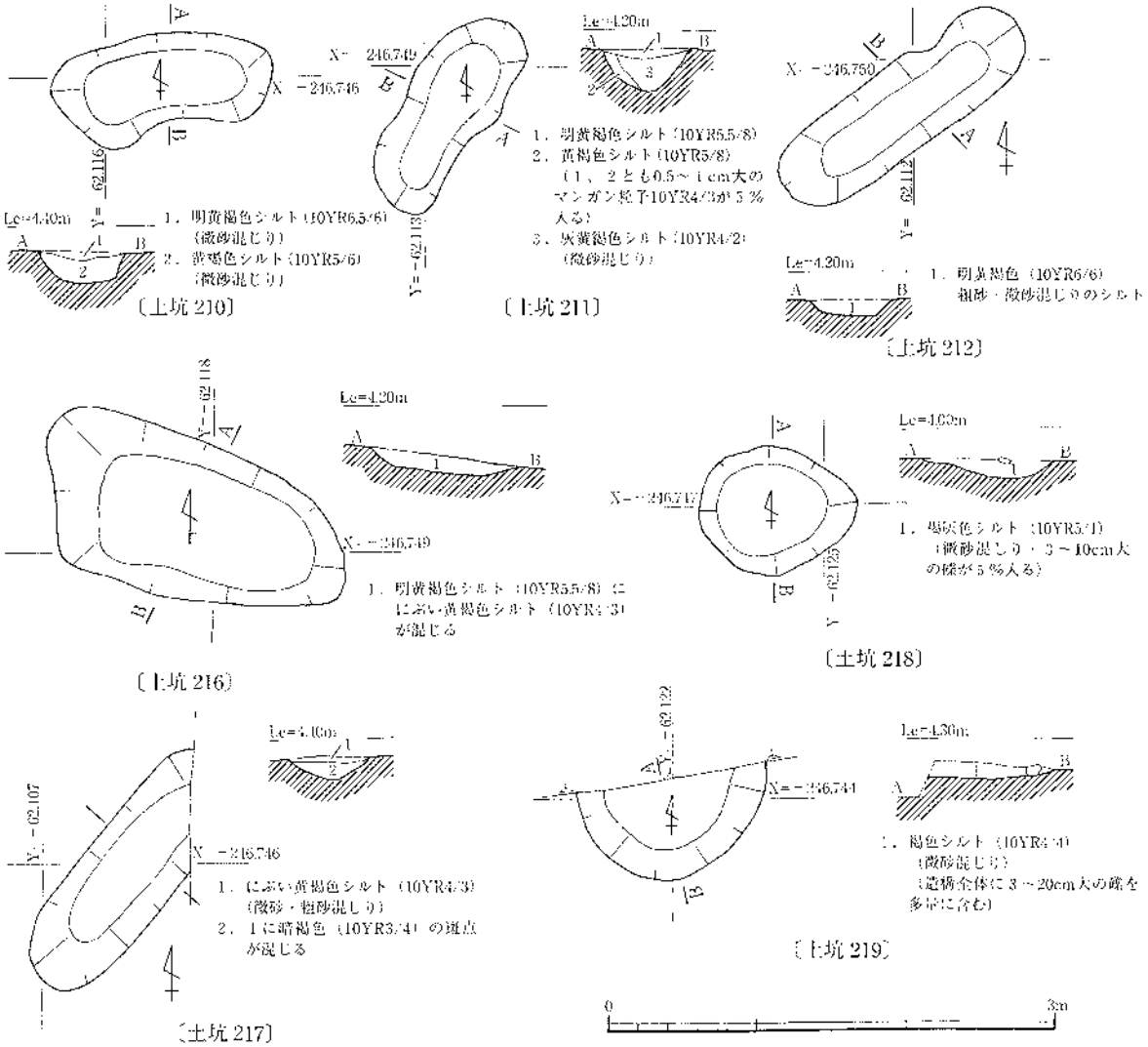


図47　8区土坑210～212・216～219実測図

68cmを測る。深さは10cmを測る。埋土は褐色シルトの単一層で3～20cm大の礫を多量に含む。

B．谷状地形の堆積層出土遺物（図49）

調査区北壁沿いに地山確認のために設けたトレンチから出土した遺物である。先述したように谷状地形の堆積土中の縄文時代中期の土器である。

褐色粗砂礫層Ⅰ出土遺物　398は外面口縁に刺突文を施す。船元Ⅰ式である。399は貼付け突帯を付す深鉢である。色調は明赤褐色を呈する。搬入品と考えられる。400は頸部にC型爪形文を施す。鷹島式か。401は口縁に爪形文を、下に刺突文を施す。船元Ⅱ式である。402は体部に突帯を貼付け、その上に爪形文を施す。船元Ⅱ式である。403は山田平式と考えられる搬入品である。竹管による沈線を施し、その後突帯を貼付けている。色調は明黄褐色を呈する。404は頸部に竹管による平行沈線と縦状の沈線を施し、口縁端部には爪形文を施す。405・406はサヌカイト製の縦形石匙である。

褐色粗砂礫層Ⅱ出土遺物　407は船元Ⅰ式である。突帯の上部に貝殻圧痕を、下部に連続刺突文を施している。408は船元Ⅰ式である。口縁に沿って貝殻圧痕を施し、口辺端面には爪形文を施す。409はC型爪形文を施す。410は竹管文を施し、爪形文を施す。411は地文にRLの縄文を施した後、突帯を貼付け爪形文を施している。412から414は搬入品である。412の器面は摩滅し文様は不明である。色調は黒褐色である。413は浅鉢である。連続の爪形文と三叉文が施される。414は竹管文を施される。胎土は砂粒が多く金雲母が含まれる。

黄褐色シルト層出土遺物　415は船元Ⅰ式である。突帯の上に爪形文を施す。416は連続刺突文を施す。417の色調は明赤褐色を呈する。418は船元Ⅱ式である。419の器面は摩滅している。船元Ⅱ式か。420はキャリパー形で竹管による二条の沈線を施す。421はRLの縄文を施文後、二条の沈線を施す。422の色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土には長石が含まれ、搬入品と考えられる。

褐色シルト層出土遺物　423は突帯状にキザミを施し、口縁端部には貝殻で押し引きされる。424の外面は口辺からの垂下隆帯にキザミを施し、内面端部にはC型爪形文を施す。425は口縁端部に貝殻圧痕を施す。胎土には片岩が入る。426は口辺端部にキザミを施す。427は口縁端部にハイ貝による貝殻圧痕を施し、突帯上面にC型爪形文を施す。428は搬入品で勝坂式である。429は突帯上にC型爪形文を施す。430はRLの地文上に突帯を施し、キザミ目を付す。431は五領ヶ台式である。外面には三叉文を施し、口辺部には沈線を施す。

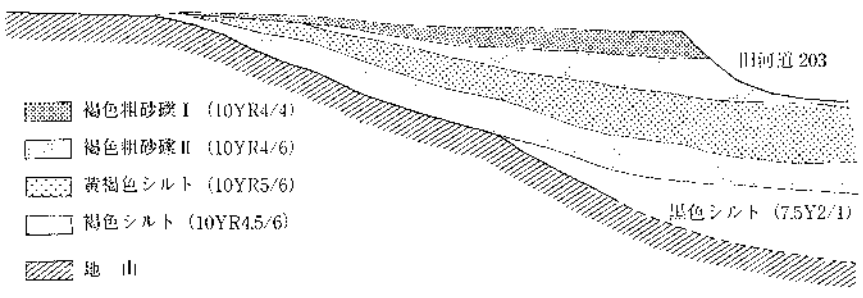


図48　8区谷状地形肩部堆積模式図

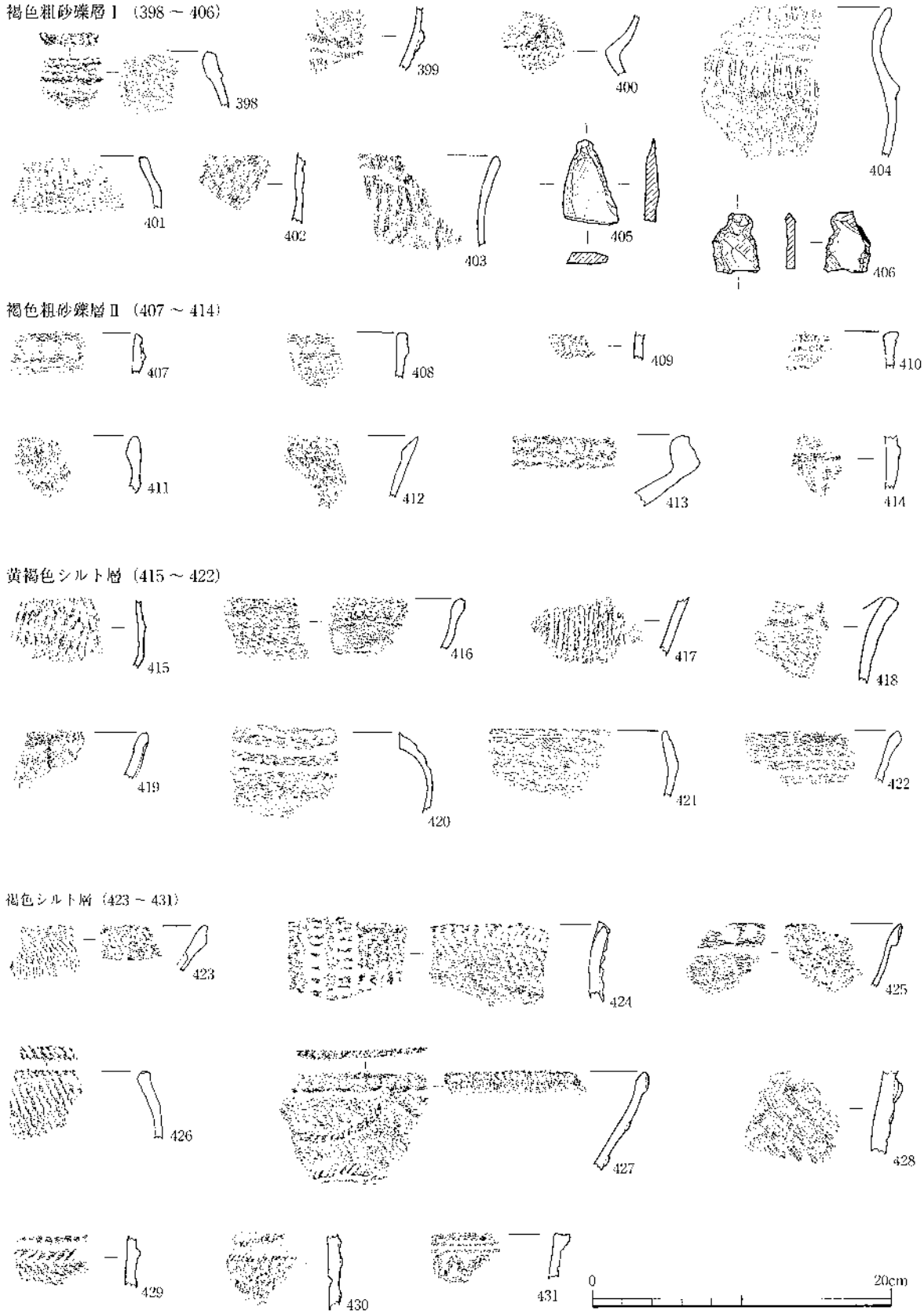


図49　8区包含層出土遺物

7．9区の調査

調査区は東西に80mと細長く、層序については場所により異なっている。調査区西側では盛土直下に中世の遺物を含む灰オリーブ色の土が厚さ10cmほど堆積している。これは8区の4層に相当する土であり、中世の水田と考えられるものである。この層を取り除いた面が上層遺構面で、この面では縄文時代から中世の遺構が検出されている。この遺構面を成している土は縄文時代の包含層であり、厚さ約10cm。8区の6層に相当する土である。その下は礫を含む黄灰色の地山で、この面を下層遺構面としており、遺構密度は低いが縄文時代（中期）の遺構が検出されている。

調査区中央部付近でも土質はやや異なるものの西側の1層及び2層に相当する土が確認されるが、この間に古墳時代から中世の遺物を含む灰色土が入る。この灰色土の下が上層遺構面で、地山面が下層遺構面である。 この付近から遺構面は東に向かって急激に下りはじめ、前述の灰色土はそれに比例するように厚く堆積し、調査区の東側では60cmほどとなる。さらにその下層に灰色粘質土が厚く堆積しており、これを取り除いた面が上層遺構面となる。この面で古墳時代の溝を検出している。なお、この付近では地山はかなり下がっているようで確認できなかった。

以下、検出した主要遺構・遺物について述べる。

A．上層遺構面の遺構

検出した遺構には縄文時代及び古墳時代初めの土坑、古墳時代中期の竪穴住居・土坑、中世の土坑などがある。

竪穴住居40　東西5.5m、南北5.4mを測る方形の竪穴住居である。南辺はいくつかの土坑により撹乱をうけている。深さは約20cmである。床面には壁溝がめぐらされており、幅は約20cm、深さは4cmほどであった。竈は東辺で、中央よりかすかに南に寄って設けられている。竈には甕が倒立した状態で据え置かれていた。竈の築造方法につい

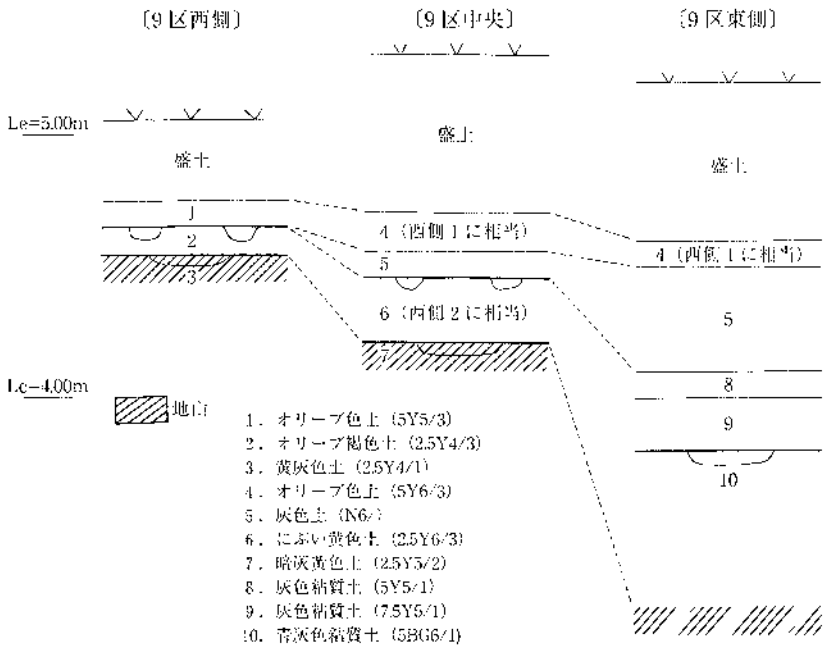


図50　9区基本層序柱状模式図

ては、断面観察の結果、粘土を貼り付けた明瞭な痕跡は認めがたく、おそらく造り出しているものと考えている。東北隅では1m×80cmほどの土坑を検出したが、深さは壁溝とかわらず5cmほどでありその用途については不明である。主柱穴については、検出することができなかった。住居の埋土は暗褐色の土で一気に埋められている。竈・床面から古墳時代中期の土師器の鉢・椀が出土している。

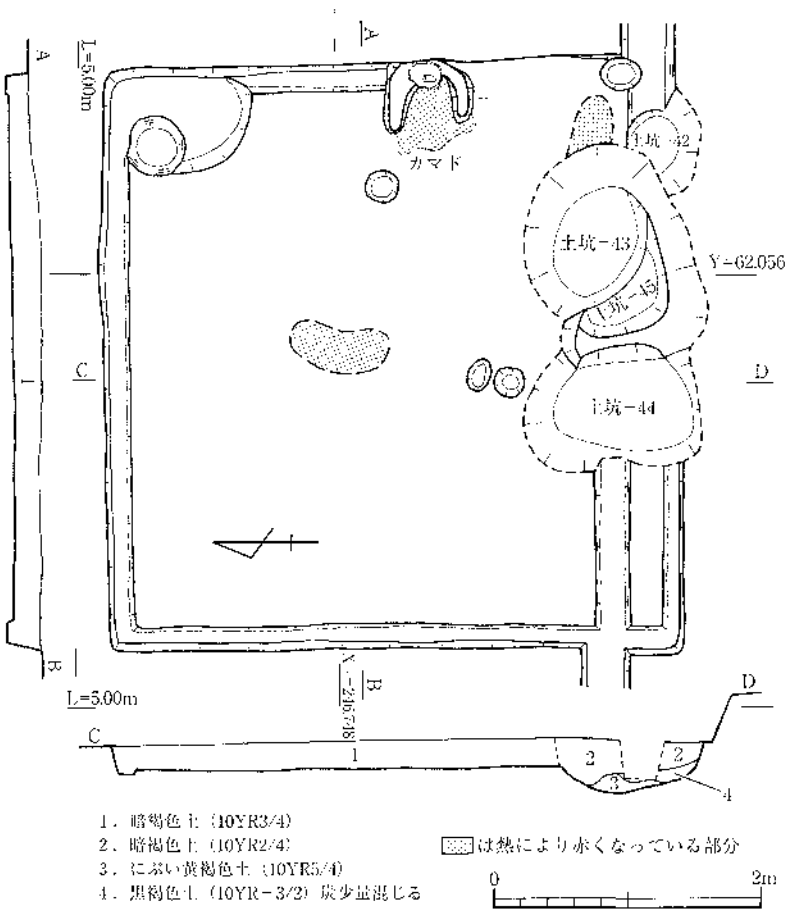


図51　9区竪穴住居40実測図

土坑13　調査区の南側にひっかかる形で検出されたもので、その全容については不明だが、おそらく長径2m、深さ45cmほどの楕円形の土坑になるものと推定される。上層の黄褐色土から船元Ⅱ式と思われる縄文時代中期の土器小片が出土している。

土坑14　北側が撹乱により削り取られているが、長径2mほどの土坑であったものと考えられる。深さは20cmほどである。礫混じりの灰黄色土によって埋まっており、この中からも船元Ⅰ・Ⅱ式の土器が出土している。

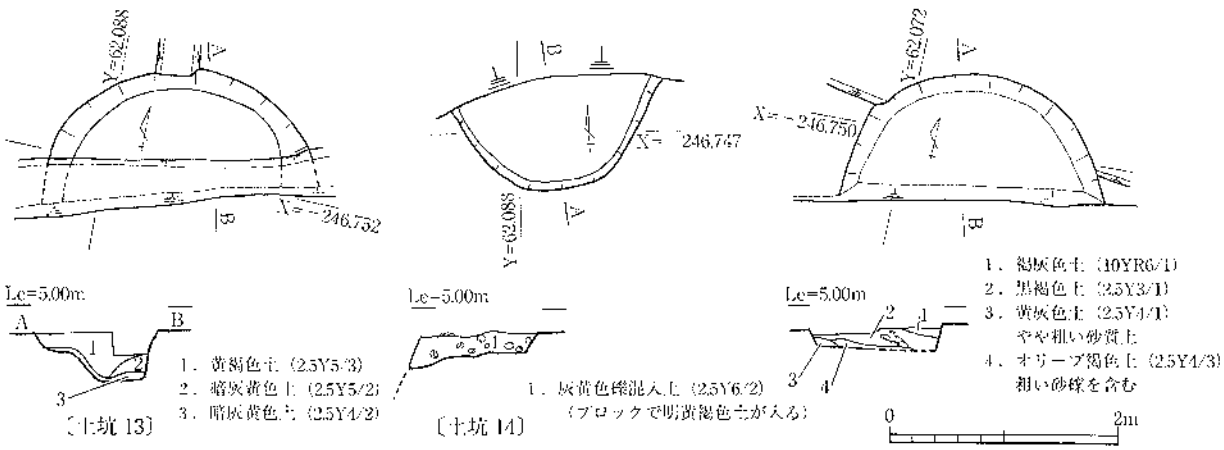
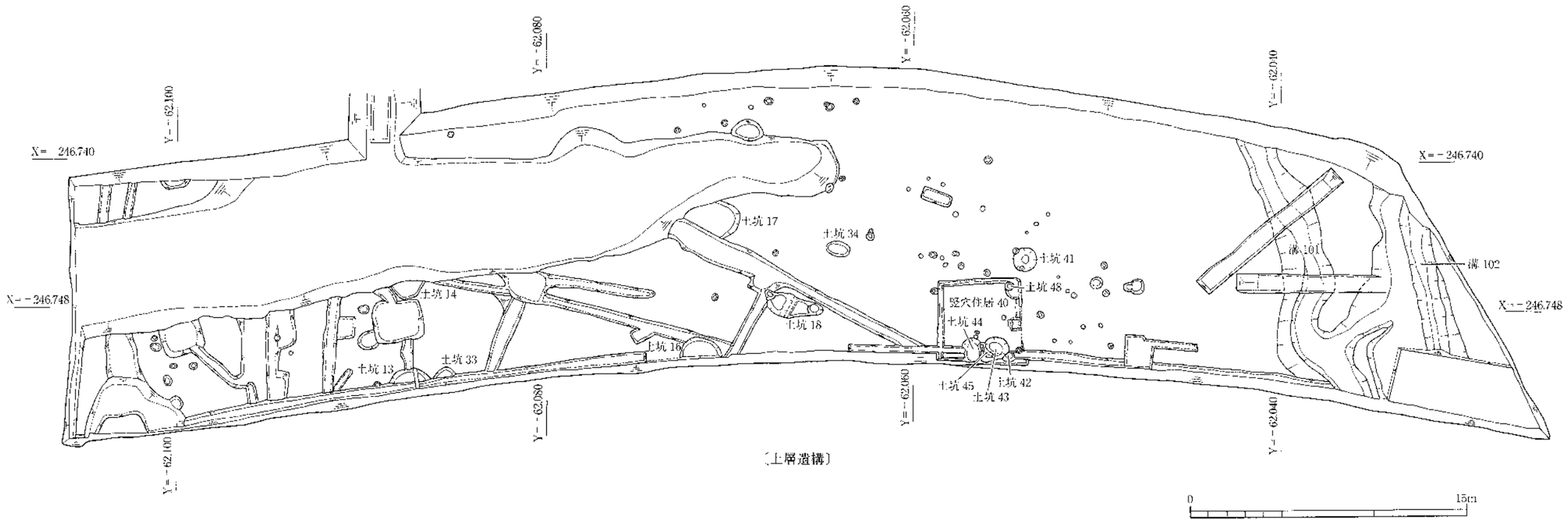


図52　9区土坑13・14・16実測図


Y=-62.080
Y=-62.060
Y=-62.040
Y=-62.100
X=-246.740
X=-246.748
土坑 17
土坑 34
土坑 41
土坑 48
竪穴住居 40
土坑 44
土坑 14
土坑 18
土坑 16
土坑 13
土坑 33
土坑 45
土坑 43
土坑 42
溝 101
溝 102
Y=-62.080
Y=-62.060
Y=-62.040
Y=-62.100
〔上層遺構〕
0
15cm

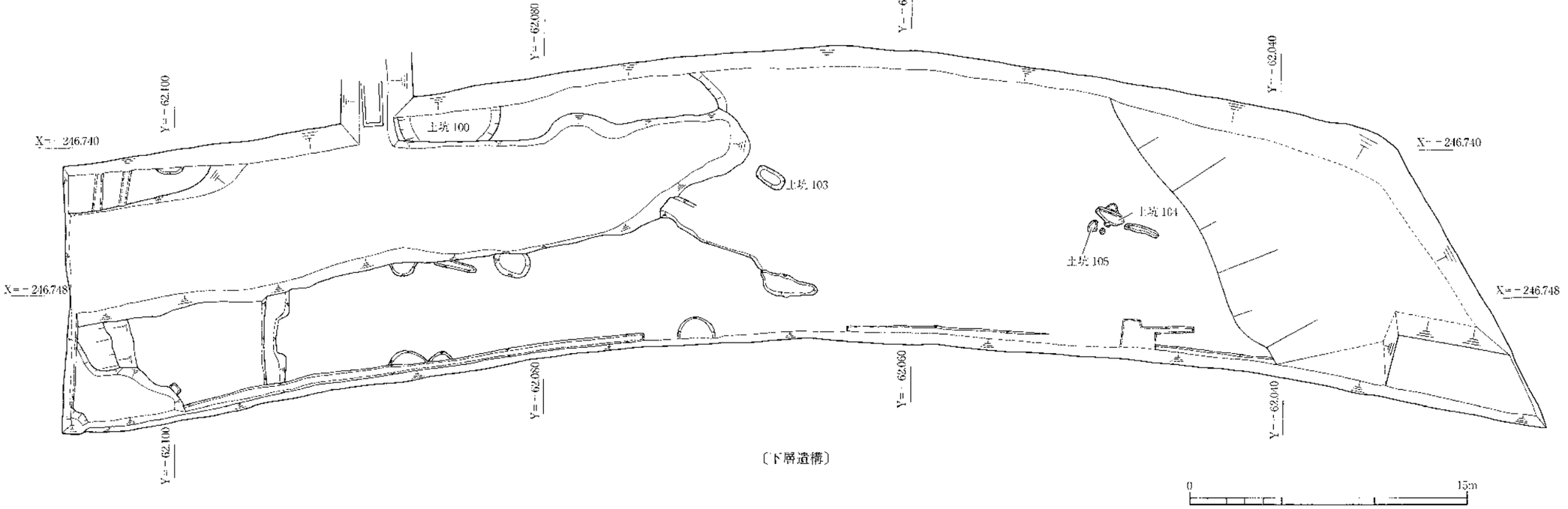

Y=-62.080
Y=-62.060
Y=-62.040
Y=-62.100
X=-246.740
X=-246.748
土坑 100
土坑 103
土坑 104
土坑 105
Y=-62.080
Y=-62.060
Y=-62.040
Y=-62.100
〔下層遺構〕
0
15cm

図53　9区遺構平面

土坑16　調査区の南端にひっかかる形で検出したため全体の大きさは不明だが、おそらく直径2.5mほどの円形になるものと思われる。深さは30cmほどで、遺物とともに15cm前後の川原石が多く入っていた。中層の黒褐色土から古墳時代初めの甕・高杯・鉢などが出土している。

土坑41　直径1.2mほどの円形土坑である。深さは最深部で50cmを測る。埋土は主に灰色を呈した土である。遺物は上層から瓦器椀、中国製の青磁椀などが出土しており、13世紀後半のものと思われる。検出した遺構の中で、明らかに中世のものとしては、この遺構だけである。

土坑42～45　いずれも40～80cmほどの楕円形の土坑で、前述した竪穴住居40の南壁を切って掘られたものである。相互に複雑に切り合っている。埋土はどの土坑も竪穴住居と酷似した暗褐色の土であり、出土した遺物についても時期差は認められず5世紀後半と考えられるものである。このことから住居が廃絶した後、きわめて短期間に相次いで掘られたことが窺える。

溝　101　東側の落ち込み部で検出された溝で、幅2.0～2.5m、深さ40cmほどのU状に掘られている。直線的ではなく蛇行し、一部東側へ分岐している。埋土は灰色粘質土で、底には砂などの滞留は認められない。ここからは古墳時代初めの土器片が出土している。

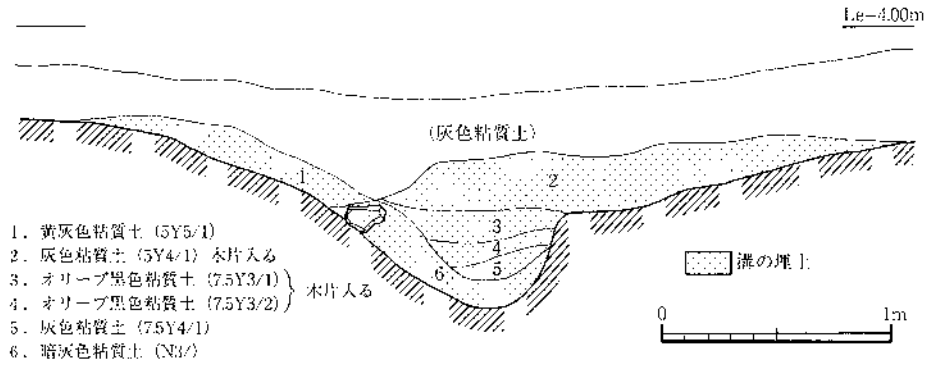


図54　9区溝102断面図

溝　102　溝101のさらに東側で検出した溝で、溝101とほぼ平行して流れる。2段に掘られており上段の幅は4mから5mほどと広く、下段では幅1mほどとなっている。深さは検出面から約1m弱である。この溝の下層からは古墳時代初めと思われる土師器の高杯・鉢などとともに少量だが古墳時代後期の須恵器の杯・脚台などが出土している。

B．下層遺構面の遺構

下層遺構面の遺構密度は極めて低い状況であった。検出された遺構としてはいくつかの土坑がある。出土遺物がまったくない土坑もあり時期は確定し難いが、層序などからいずれも縄文時代中期に帰属するものと思われる。

土坑100　北側は調査区外に延び、南側は撹乱により削り取られている。このため全容は不明だが、確認規模からすれば直径5.5mほどの大きな円形状を呈する土拡になるものと思われる。深さは最深部でも20cm足らずと浅い。埋土は暗灰黄色土で、船元Ⅰないし Ⅱ式と思われる縄文時代中

期の土器が出土している。

土坑103　長辺1.6m、短辺90cmを測る長方形に近い楕円状を呈した土坑である。深さは25cmを測る。埋土は褐色土一層であり、船元Ⅰないし Ⅱ式と思われる縄文時代中期の土器が出土している。

土坑104・105　ともに東側の落ち込み部に近いところで検出された不整形な土坑である。出土遺物がまったくなく時期は確定できないが、堆積状況から考えれば縄文時代の可能性が高いものと考えている。両者とも壁面が火を受けたように赤く変色していた。

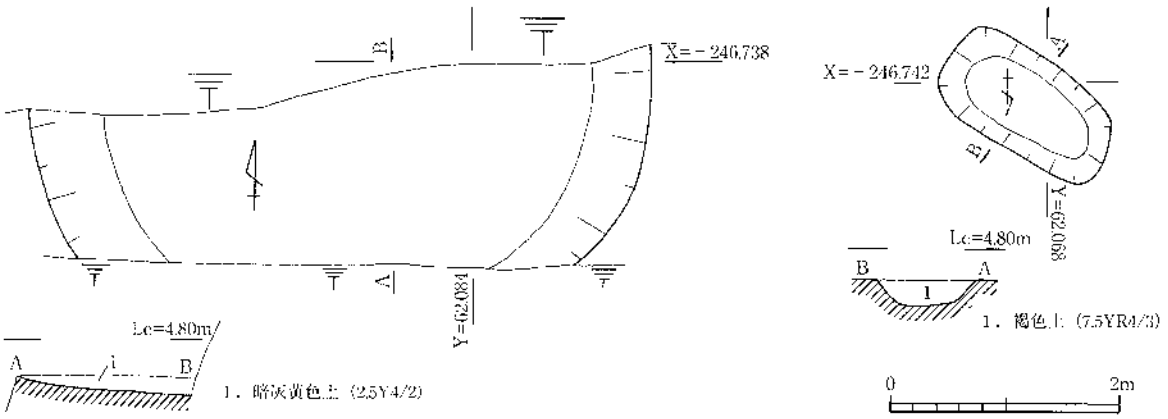


図55　9区土坑100・103実測図

C．9区の出土遺物

《竪穴住居40出土遺物》　432の土師器は口径11.2cmを測り口縁部は外反する。器形的には小型の鉢になるものであろう。この土器は炉跡からの出土である。433は土師器の椀である。口径9.2cm、器高5.6cmを測るもので、内面は粗いナデ調整が施されている。この土器は床面直上からの出土である。434は須恵器の甕で、大きく外反した口縁部の中ほどに断面三角形の突帯が巡らされている。435は須恵器の壺になるものであろう。口径9.0cmを測り、頸部に波状文が施されている。436～439はいずれも土師器の高杯である。杯部は水平に伸びた体部から口縁部が鋭角的に立ち上が

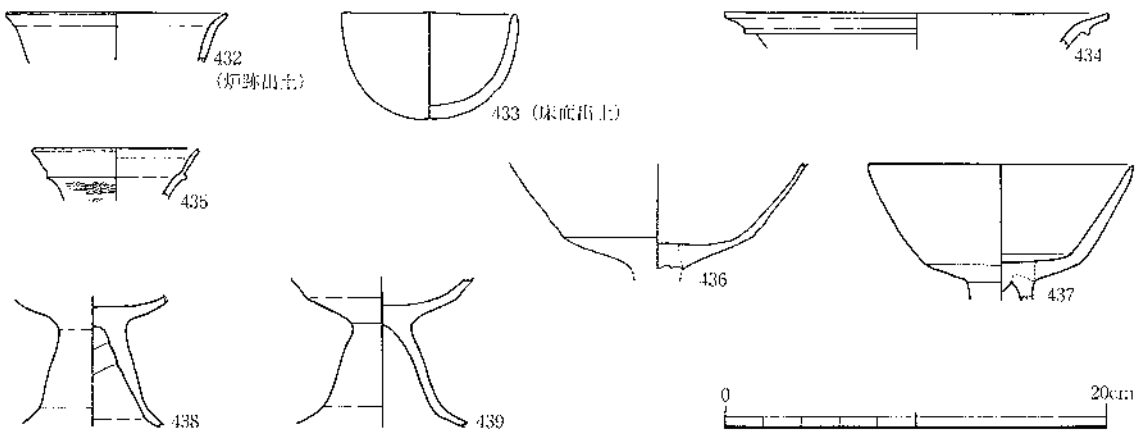


図56　9区竪穴住居40出土遺物

るもので、体部に対して口縁部が長い。脚部は中空で、裾部は屈曲して外側に開いている。これらの土器は住居の覆土からの出土である。

《土坑13・14出土遺物》　440は土坑13から出土したもので縄文時代中期の深鉢である。体部外面にはＲＬの縄文が施されている。船元Ⅰないし Ⅱ式と思われる。441は土坑14からの出土であり、この土器についても同じく船元Ⅰないし Ⅱ式で、縄文時代中期の深鉢である。

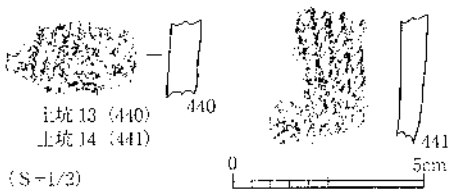


図57　9区土坑13・14出土遺物

《土坑16出土遺物》　442・443は土師器の甕底部で、ともに底部は平底を呈する。442は摩滅が著しく、調整については不明だが、443では右上がりのタタキ調整が底部まで及んでいる。444・445は土師器の壺である。このうち444は口縁部が大きく外反するもので、端部は面取りされている。445の壺は頸部が直立気味に立ち上った後、口縁部は外反し端部が上方に摘み上げられている。口径は復元で17.0cmほどになるものと思われ、全体に浅黄橙色を呈している。

446は土師器高杯である。裾部はなだらかで外側に広がっている。447・448は小型の鉢底部で、ともに底部外面の指頭圧痕が顕著に残っている。これらの土器は庄内式新段階に併行する時期のものと考えられよう。

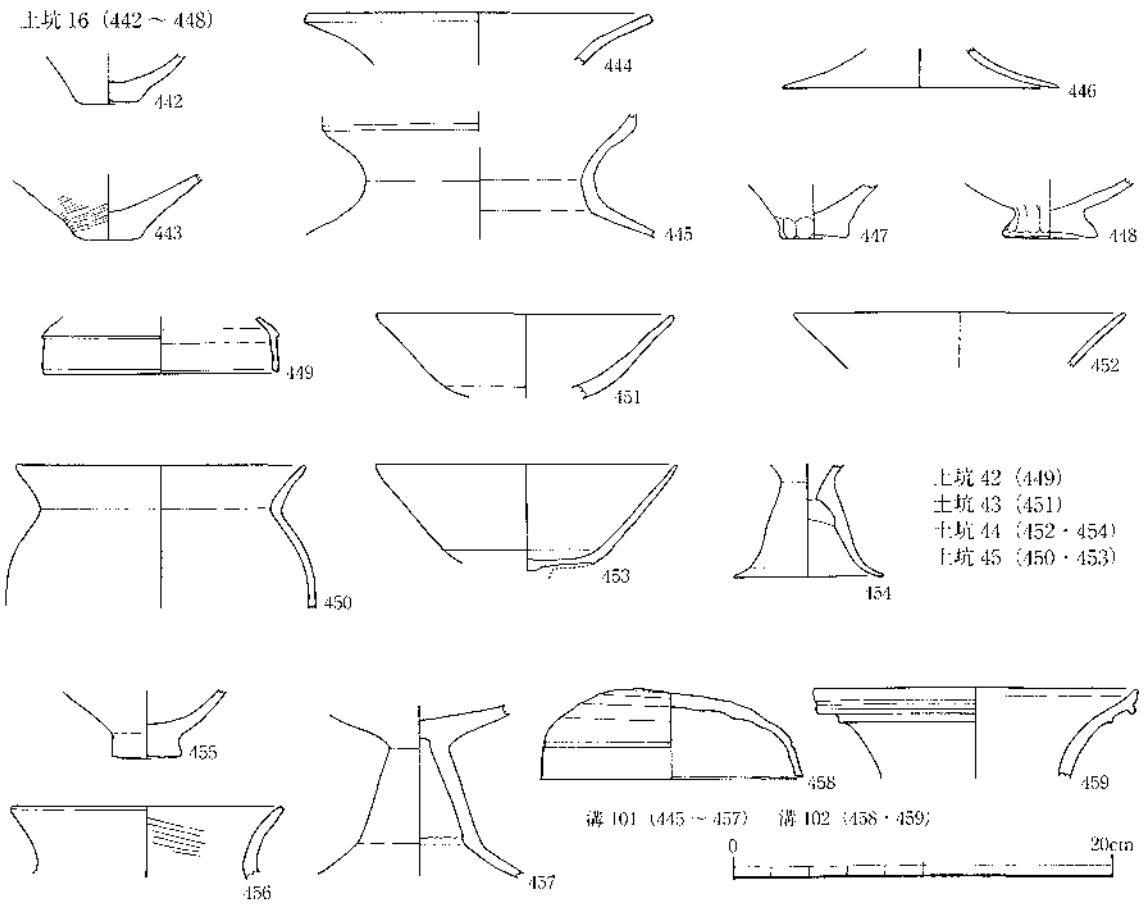


図58　9区土坑16・42～45溝101・102出土遺物

《土坑43～45出土遺物》　449は須恵器杯蓋で口径12.4cmを測る。稜は鋭く、口縁端部は段を成している。450の土師器の甕は口径15.4cmを測るもので、外面は明褐灰色を呈している。口縁部はくの字状に外反し、端部は丸く収める。451～454はいずれも土師器の高杯である。453の杯部についてみれば、前述した竪穴住居40の覆土から出土している高杯（436・437）と極めてよく似ており、水平に伸びた体部から口縁部が鋭角的に立ち上がっている。454は脚部および裾部が短く、やや小型の高杯になるものと思われる。これらの土器については５世紀後半段階のものと考えている。

《溝101・102出土遺物》　455は壷もしくは鉢の底部となるものであろう。底部付近にタテ方向の粗いミガキの痕跡がかすかに認められる。弥生土器の可能性があろう。456の土師器の壷は口径14.2cmを測るもので、内面にハケ目調整が施されている。437の高杯は中空で、内部にヘラ状工具による削りの痕跡が残る。458の杯蓋は口径13.8cmを測る。天上部は丸く、3/2が回転ヘラケズリとなっている。稜は持たず、その部分には浅い凹線が巡るものである。また、口縁端部の段は幅広く甘くなっている。459の須恵器壷は口径20.2cmを測るもので、口縁端部は上下に厚肥し、端面には浅い凹線が巡る。また、口縁部下にはやや丸みを帯びた突帯が巡らされている。

《土坑100・103出土遺物》　460は深鉢の体部で、ＲＬの縄文が施されている。船元Ⅰ・Ⅱ式である。461は深鉢の底部で、底部径は７cmを測る。器壁は薄いが色調は赤茶けており、胎土に細かな砂粒を多く含むことなどから東日本からの搬入品、勝坂式の可能性が高いものと考えている。462は底部として提示しているが、底部とすればあまりにも器壁が薄く、時期を含めて判然としない。外面はヨコ方向のナデ調整により比較的平滑に仕上げられている。

463・461はともに深鉢体部で、ＲＬの縄文が施されている。船元Ⅰないし Ⅱ式である。465は口縁部をわずかに厚肥させ外面端部近くにキザミ目、その下に爪形文を施している。また、内部には縄文が施されている。船元Ⅰないし Ⅱ式である。

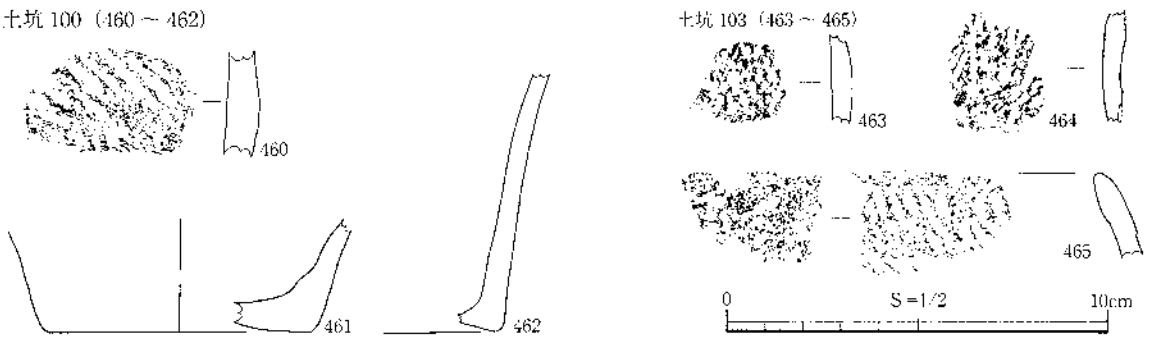


図59　９区土坑100・103出土遺物

第4章　まとめ

ここまで各調査区にわけて遺構・遺物について述べてきた。本章ではこれらの成果に拠りつつ以下の点についてまとめておきたい。まず第1点は、今回の調査の中で1～2区で集中して検出された古墳時代初めから前期にかけての遺構・遺物の位置づけ。次に8・9区における縄文時代の遺構・遺物の位置づけ、最後にこの両地区に挟まれた谷部の変遷について簡単に触れておく。

1．1・2区における遺構の位置づけ

調査区の西側に当たる1・2区は、発掘調査時点では古川遺跡として周知されていた遺跡であるが、その後近畿自動車道のみなべインターチェンジの建設に伴う調査成果などから現在は徳蔵地区遺跡の中に包括されている。再三述べてきたことではあるが、地形的には1・2区は南側の砂堆上の延長部に当たっている。この砂堆上には古墳時代初め～前期にかけて盛況を呈した大塚遺跡が存在している。1・2区で検出された3棟の竪穴住居・溝はまさにこの時期のものである。確かに徳蔵地区遺跡においても古墳時代初めの住居は数棟見つかっており、遺物も多い[aE2]。しかしながら徳蔵地区遺跡と1・2区の間は距離的にかなり離れており、またその間が谷により分断さ

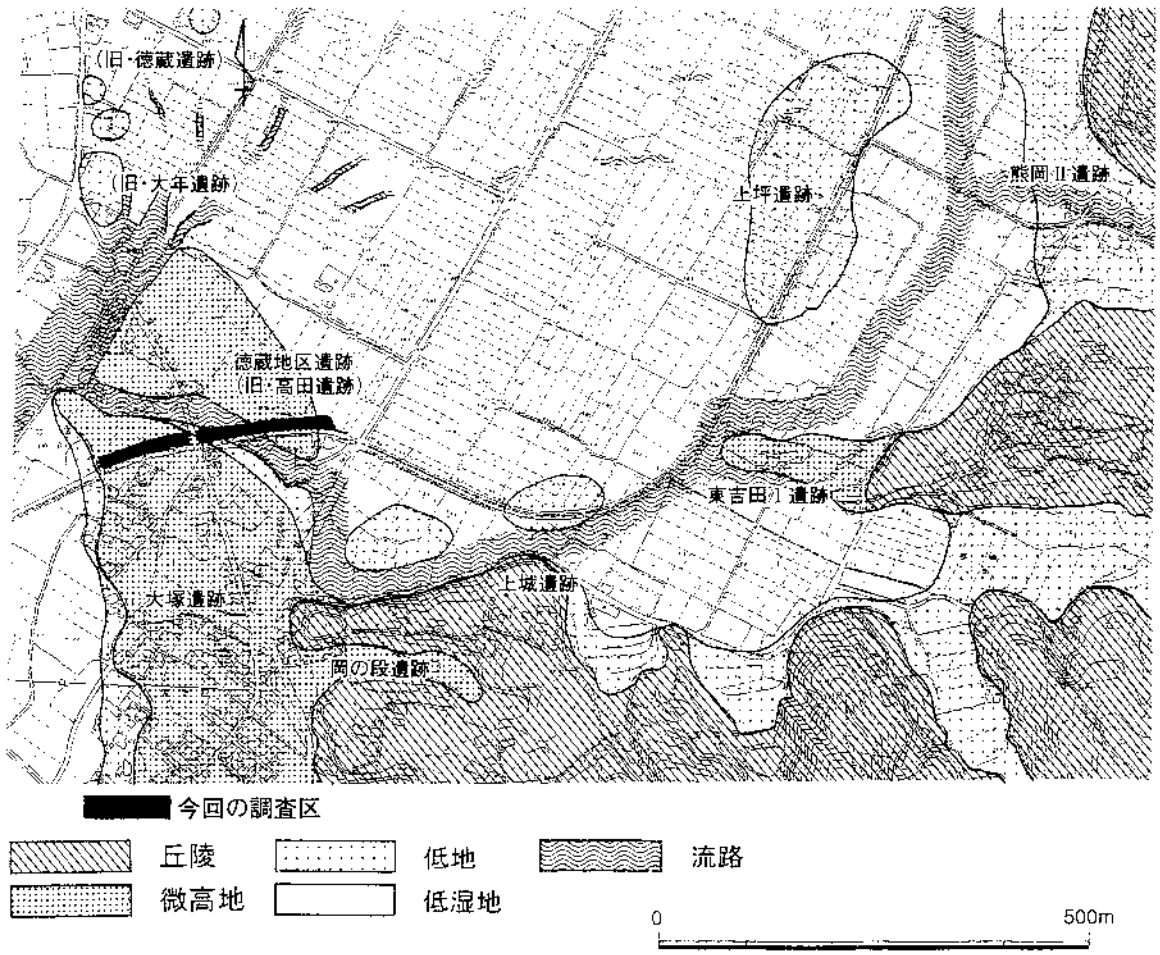


図60　調査地周辺旧地形復元図 (註1)

れていることからこの両者を結びつけるには無理があろう。このようなことから１・２区で検出された古墳時代初めの遺構については大塚遺跡のものとして考えることが自然と思われる[注3]。この場合、大塚遺跡の集落の範囲は現在周知されているよりさらに北側に広がるわけで、その範囲は優に直径200mを超える。この時期の集落としては大規模なものであることは間違いなく、当地付近のこの時期の歴史を解明していく上で看過できない遺跡と言えるであろう。

２．８・９区における遺構の位置づけ

８・９区は地形的には沖積地に形成された微高地の縁辺部に当たっている。インターチェンジの調査の際にこの地区の北側約80m付近のところで縄文時代中期の住居・埋甕などが検出され、縄文時代中期の大規模な集落であることが判明しているが[注4]、この８・９区で検出された遺構はまさにこの時期のものである。同一微高地、同一時期であることから、まず間違いなく８・９区はこの集落に含まれるものと言えよう。ただ、遺構密度、遺物量から見れば中心部ではあり得ず、居住生活圏ではあるもののその周縁部に相当するものと考えられよう。事実、９区の東端近くで、この微高地が東南方向に急激に落ち込んでいくのを確認している。この落ち、微高地の東端については、これまでの調査や現地形から推定されていた場所とほぼ同じ位置、同じ方向であるが、このことが発掘調査により確認されたことの意義は大きいと考えている。

３．谷部の変遷について

図60にも明示したように調査区周辺の旧地形は、縄文時代中期の集落及び中世の高田土居城が営まれた微高地、大塚遺跡が立地していた砂堆・丘陵縁辺部、そしてこの間の谷状地形の大きくは三つにまとめることができる。上記のような地形であることから、八丁田圃の東北側の山地から流れ出る水はこの谷間を通って海へと流れ出る以外になく、必然的にここに旧河道が走ることになる。その具体的なものが今回の調査で検出された旧河道203である。旧河道も含めて、この谷状地形はどのような変遷を経て埋まっていったのかをまとめておきたい。なお図61の模式図にも図示したように北側を徳蔵側、南側を大塚側としている。

Ⅰ期〔縄文時代中期以前〕

谷の堆積はそれほど進んでおらず、大塚側と徳蔵側が大きく隔絶された状況を呈する。谷幅は約70m、深さは未確認であるが今回の調査区で言う６区辺りが最深部と考えられ、少なくとも２m以上はあったものと考えられる。なお両サイド、徳蔵側の地山レベルはT.P.約4.0m、大塚側はT.P.4.8mである。

Ⅱ期〔縄文時代後期〕

縄文時代中期には徳蔵側に集落が営まれはじめ、微高地からこの時期の遺物を含んだ土が斜面から谷に向かって堆積する（８区北側の断ち割り調査により確認している）。また、大塚側でも堆積が進み、この時期には谷全体が浅くなっている。このような状況の中で徳蔵側に幅20m、深

さ1.5mほどの河道が形成される（この河道が調査で確認された旧河道203である）。

Ⅲ期〔古墳時代〕

河道203は縄文時代後期から位置を変えることなく安定している。この間、縄文時代晩期から弥生時代、さらに古墳時代を通じて河道203は徐々に堆積が進んでいき、深さはかなり浅い状況になっていたと考えられる。

Ⅳ期〔平安時代～鎌倉時代初め〕

谷全体の堆積がさらに進み、この段階ではほぼ埋まった状況であり、大塚側と徳蔵側を隔絶する存在ではない。大塚側ではこの時期に掘立柱建物が建てられ始められるなど、埋まった谷部を利用して何らかの人々の営みが成されていたと言える。こうした状況の中で、水田がつくられる。

この水田は本文中の第4層としている層であり主に平安時代後期から鎌倉時代前半の遺物が含まれる。これまでの周辺の調査成果[註5]ならびに中世の土地台帳の研究[註6]からも遅くとも鎌倉時代初めまでには、当該地を含む周辺は水田化されていたと考えられる。

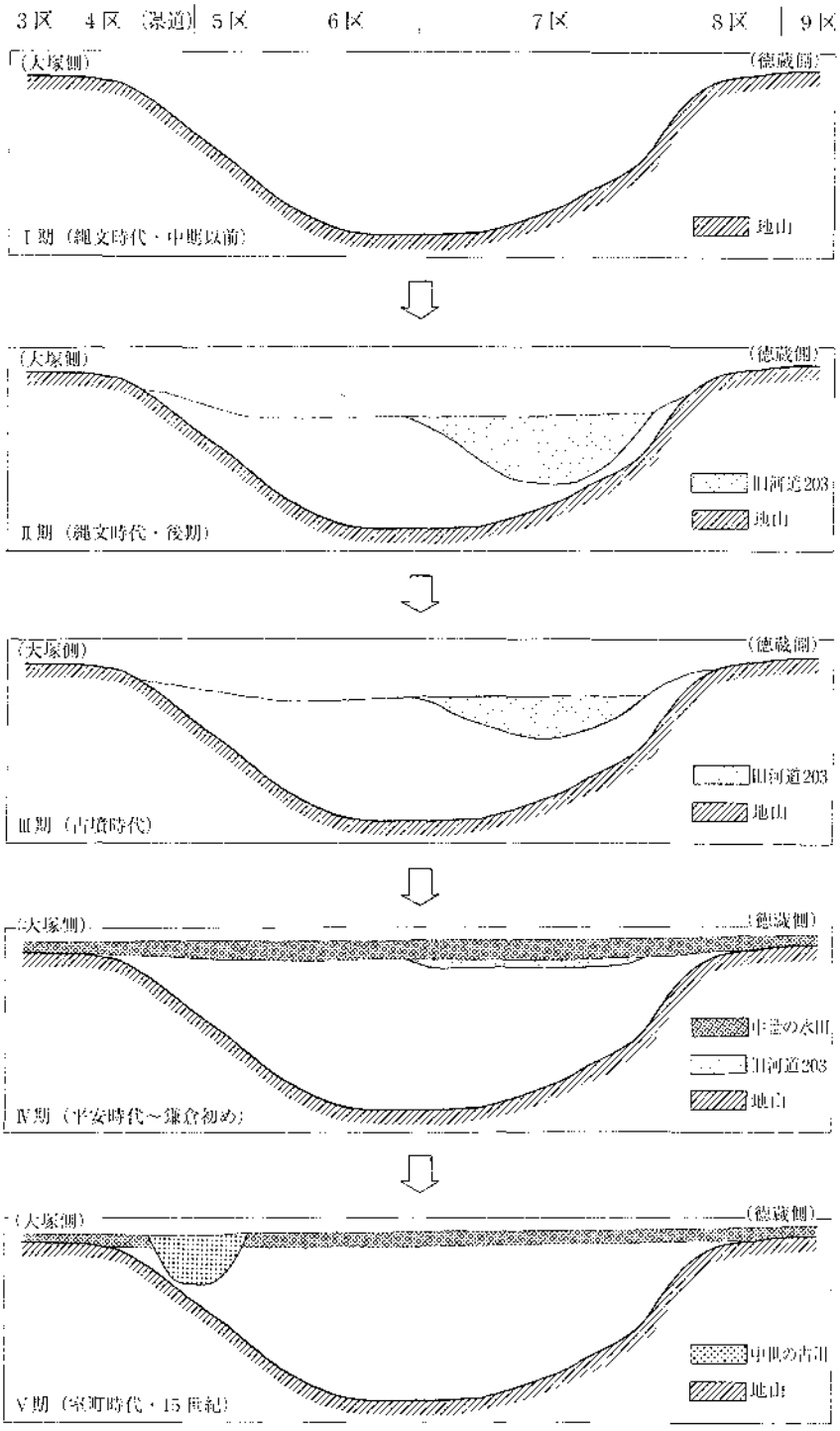


図61　谷状地形変遷模式図

Ⅴ期〔室町時代・15世紀〕

大塚側に新たな排水路が開削される。これが中世の古川である。

中世の古川については、左岸の一部を調査で確認したに過ぎずその開削時期については判然としないが、出土遺物・層位から室町時代以降のものと考えている。

なおⅤ期とした室町時代中頃は、周辺一帯に大きな改変が成された時期である。すなわち中世城館として知られる高田土居城の築城もこの時期であり、中世の条里型地割を残す八丁田圃の嵩上げもこの時期に行われている。逆に言えば、古川の開削もこれらの一連の大きな動きの中で行われた事象と言えるであろう。

註

註1　丹野　拓　2003　『南部平野区画整理工事に係る発掘調査報告書』の南部平野旧地形復原図に一部加筆して使用した。

註2　佐伯和也ほか　2005　『徳蔵地区遺跡―近畿自動車道松原那智勝浦線（御坊～南部）建設に伴う発掘調査報告書―』この中の12－④区とされる地区においてこの時期の竪穴住居、遺物が検出されている。

註3　丹野　拓　2003　『南部平野区画整理工事に係る発掘調査報告書』（財）和歌山県文化財センター　考察中の「旧地形の復元と遺跡の範囲」の中で、大塚遺跡は現在の指定範囲より広く、徳蔵地区遺跡は現在の指定範囲より狭く、2つの遺跡は流路によって分けられるとの見解が提示されている。

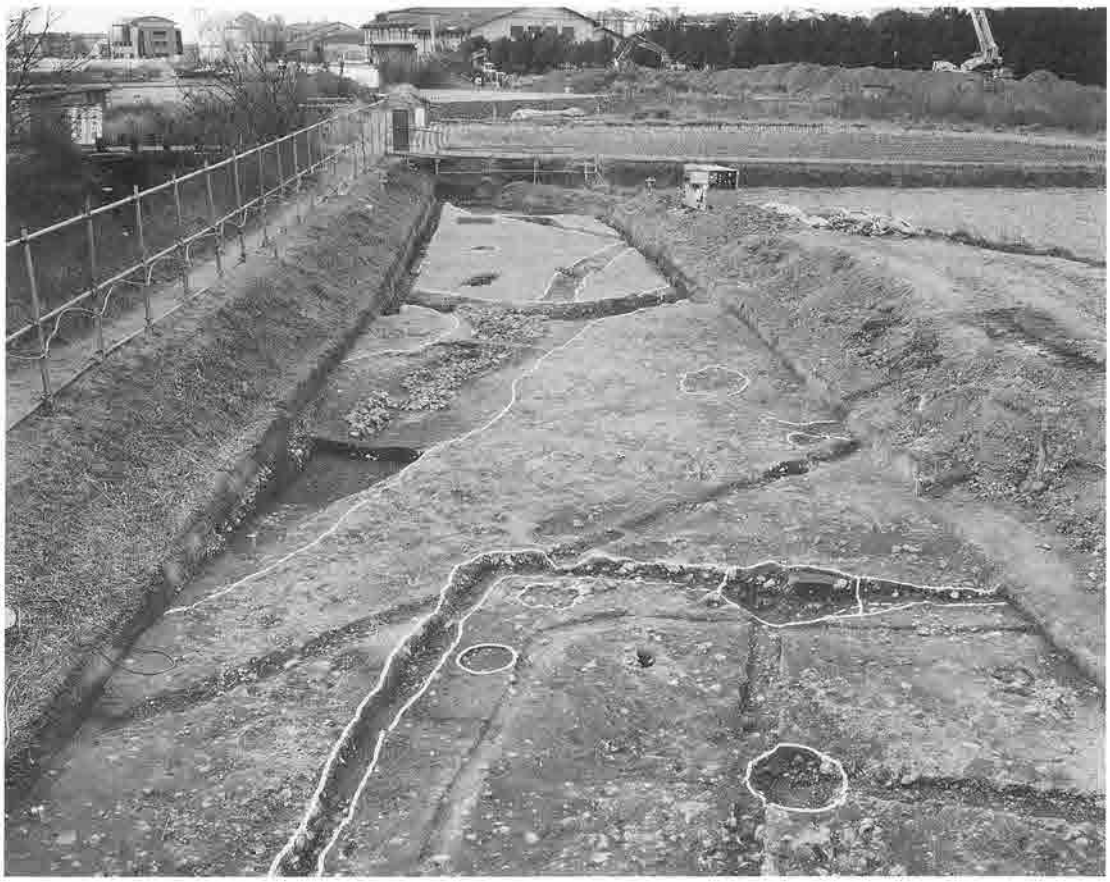
註4　前掲註1

註5　前掲註2。「条里型水田の成立と展開」の中で、耕地化はおよそ11世紀末～12世紀前半頃に行われたものと考えられるとの見解が提示されている。

註6　坂本亮太　2002　「鎌倉期南部荘の景観－土地台帳による基礎的景観復元－」　『中世再現　1240の荘園景観－南部荘に生きた人々－』　和歌山中世荘園調査会

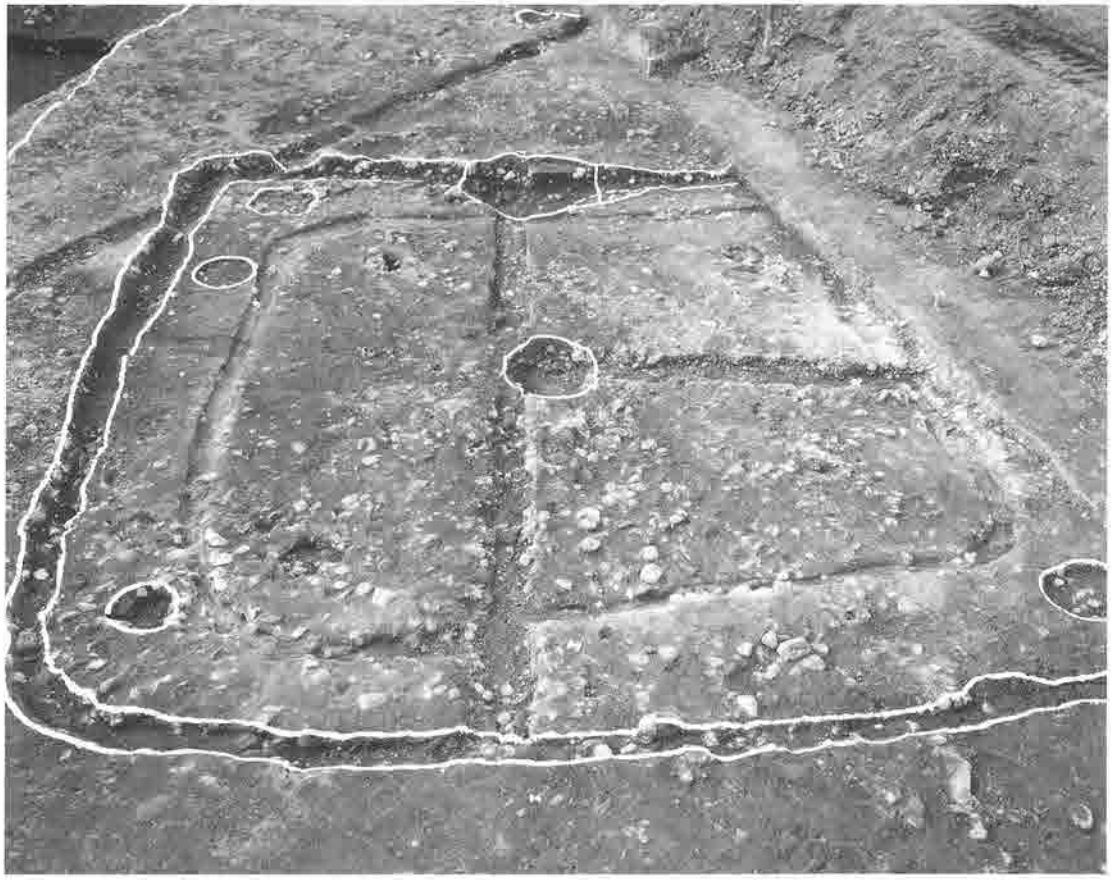
1・2区　調査前全景（東から）

1・2区　全景（東から）

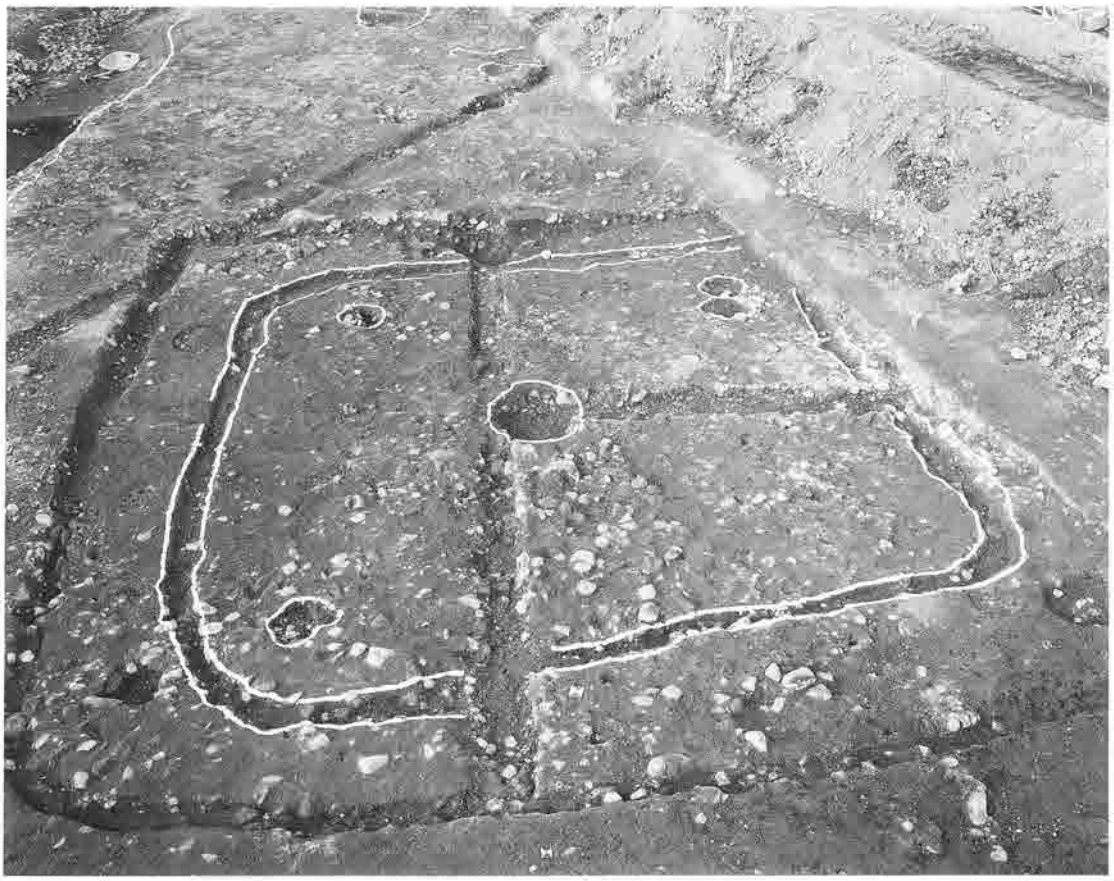


1・2区　西半部全景（東から）

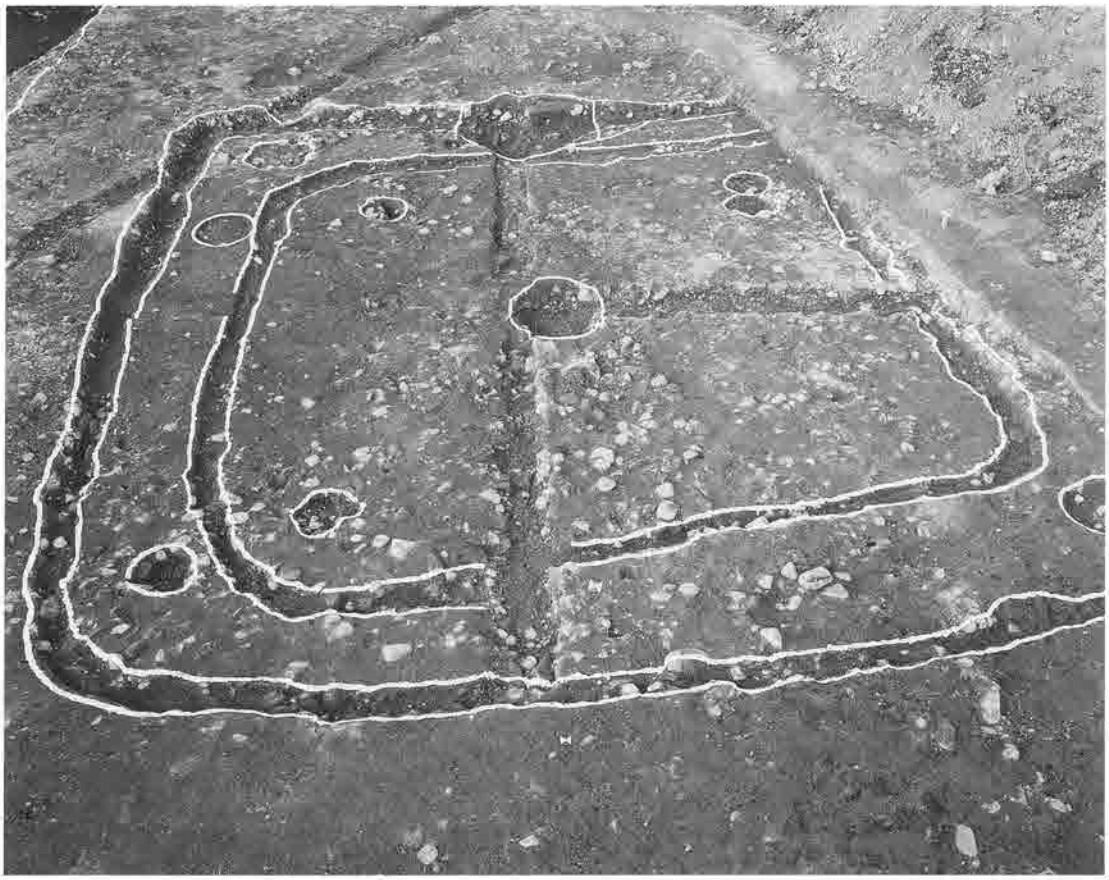
2区　東半部全景（西から）



2区　竪穴住居01全景（東から）



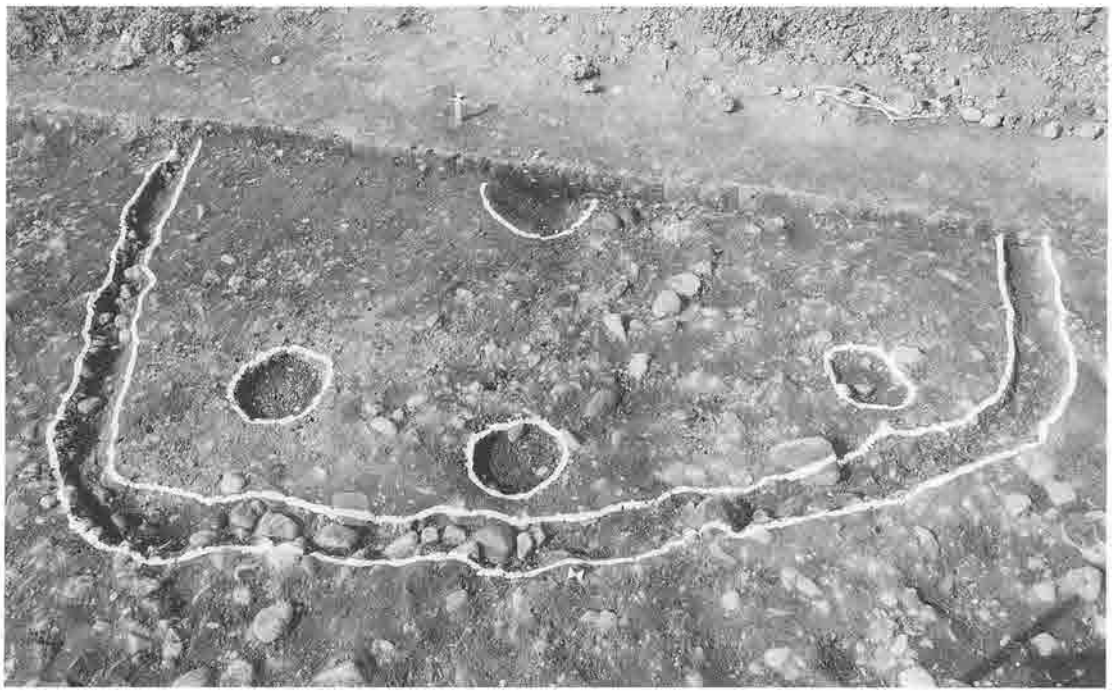
2区　竪穴住居15全景（東から）



2区　竪穴住居01・15全景（東から）

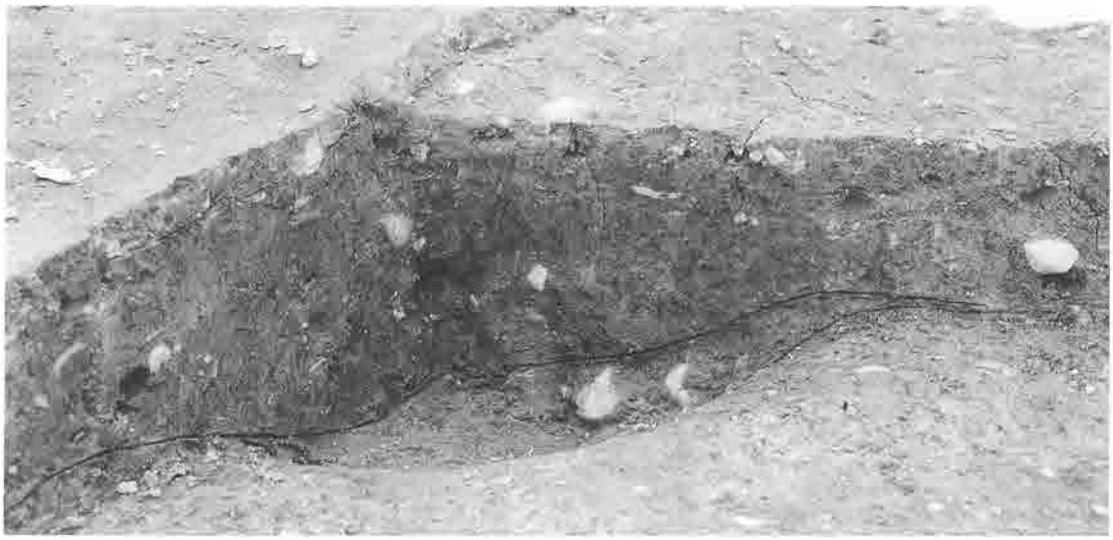
竪穴住居01・15南北セクション西壁土層（北半部）（南西から）

竪穴住居01・15南北セクション西壁土層（南半部）（西から）

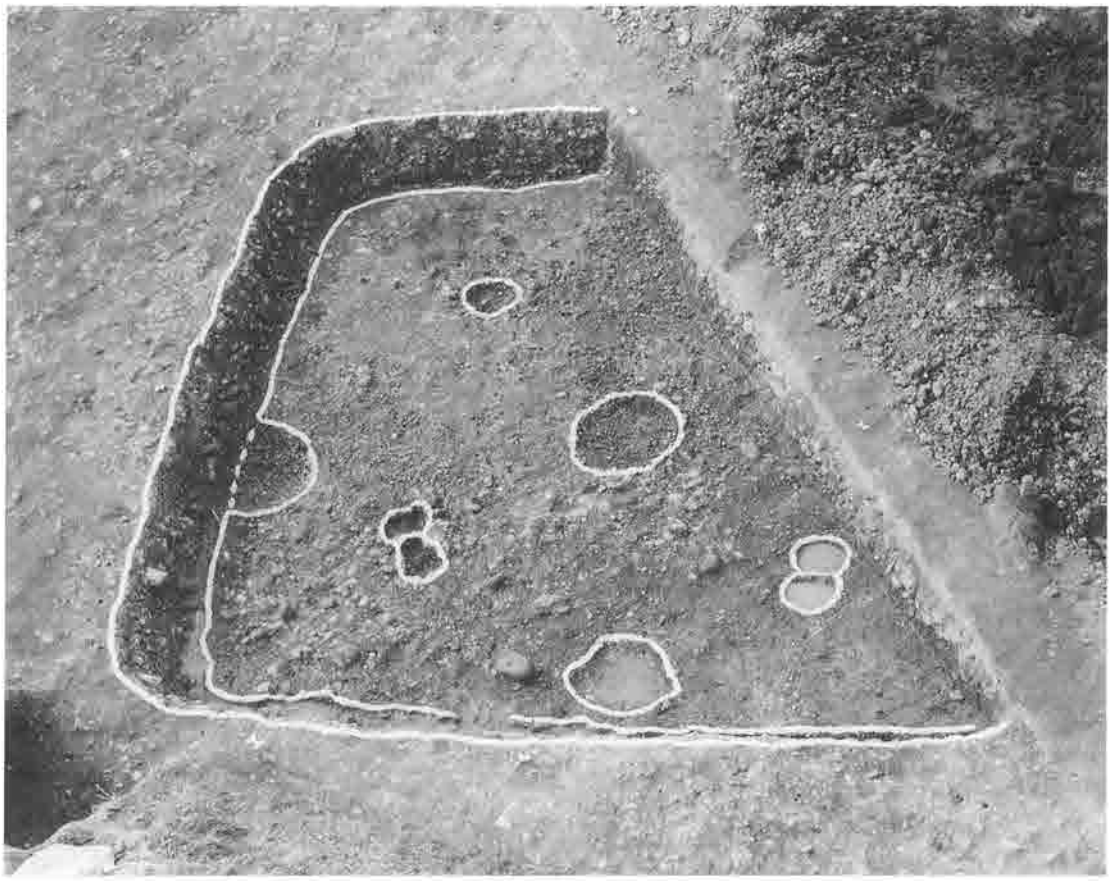


2区　竪穴住居03全景（南から）

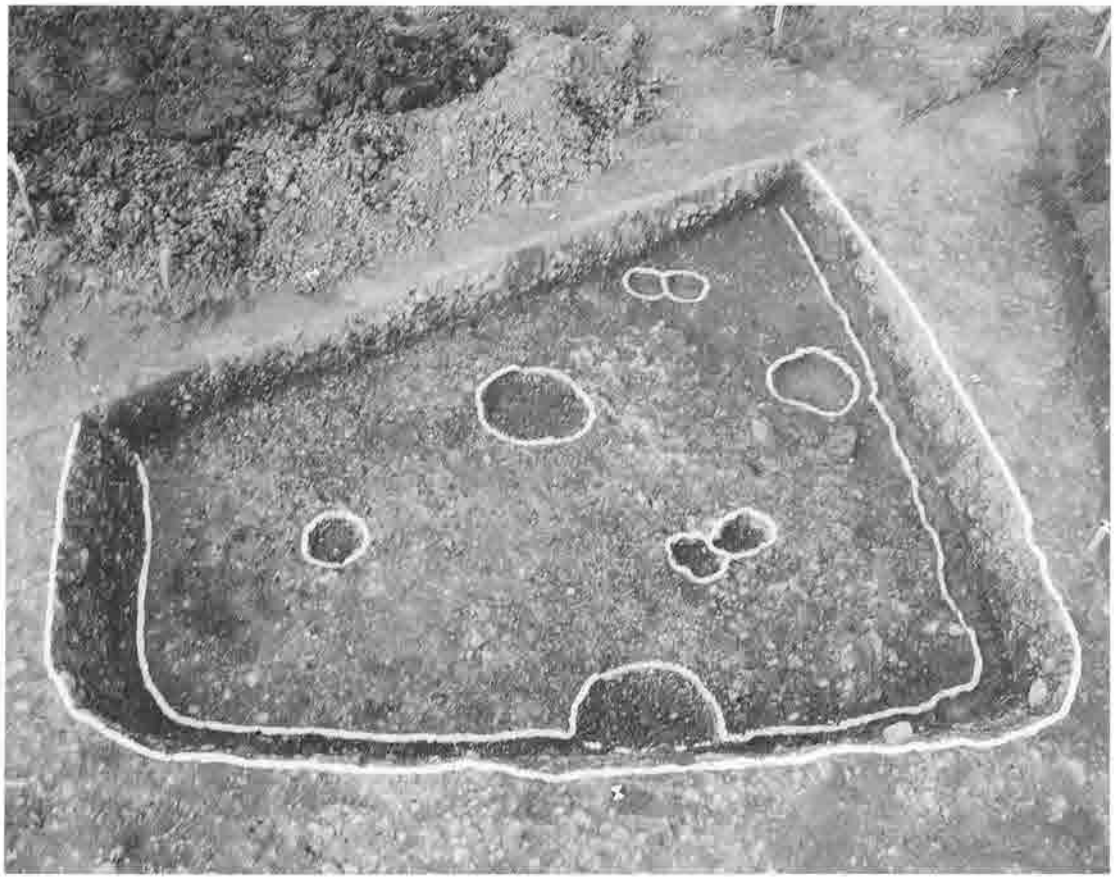
2区　竪穴住居03セクションベルト西壁（西から）



2区　竪穴住居03炉跡部分（南西から）



2区　竪穴住居26全景（東から）



2区　竪穴住居26全景（南から）

2区　竪穴住居26土器出土状況（南から）

2区　竪穴住居26セクションベルト（南東から）

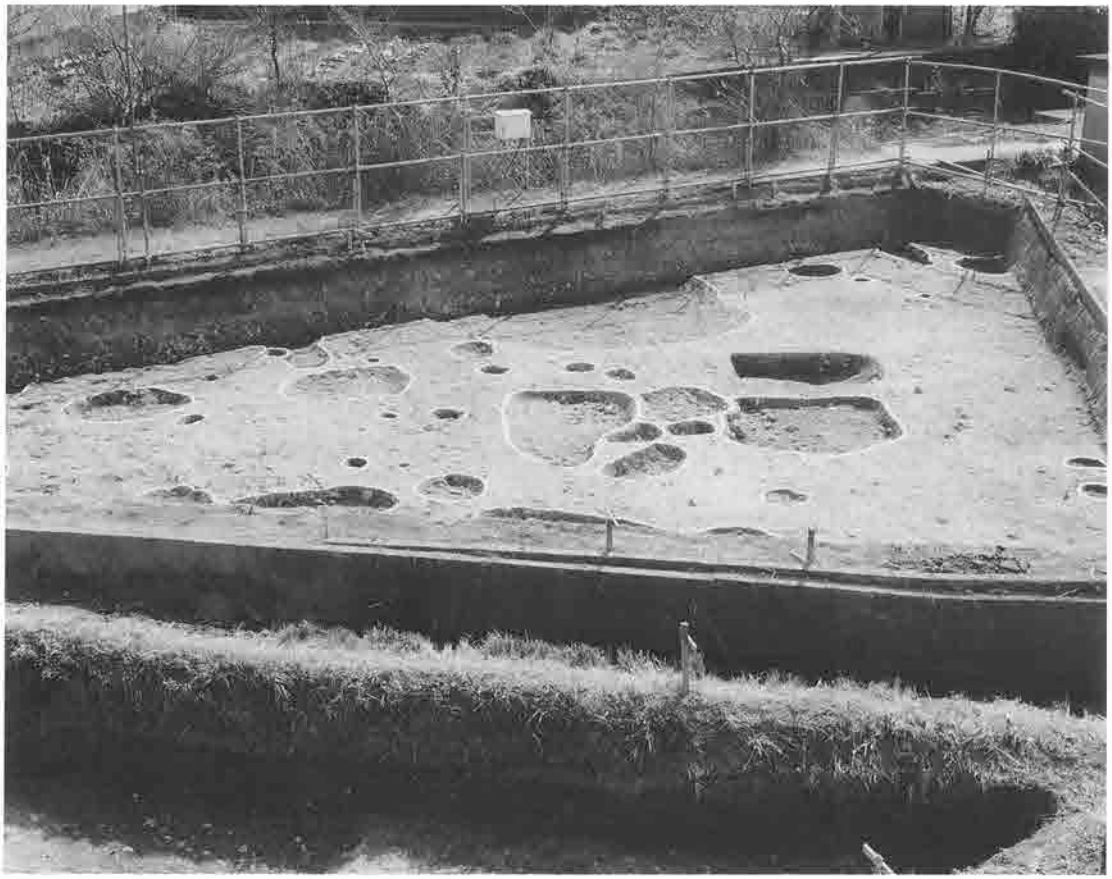
1区　溝04（北から）

1区　溝04完掘状況（北から）

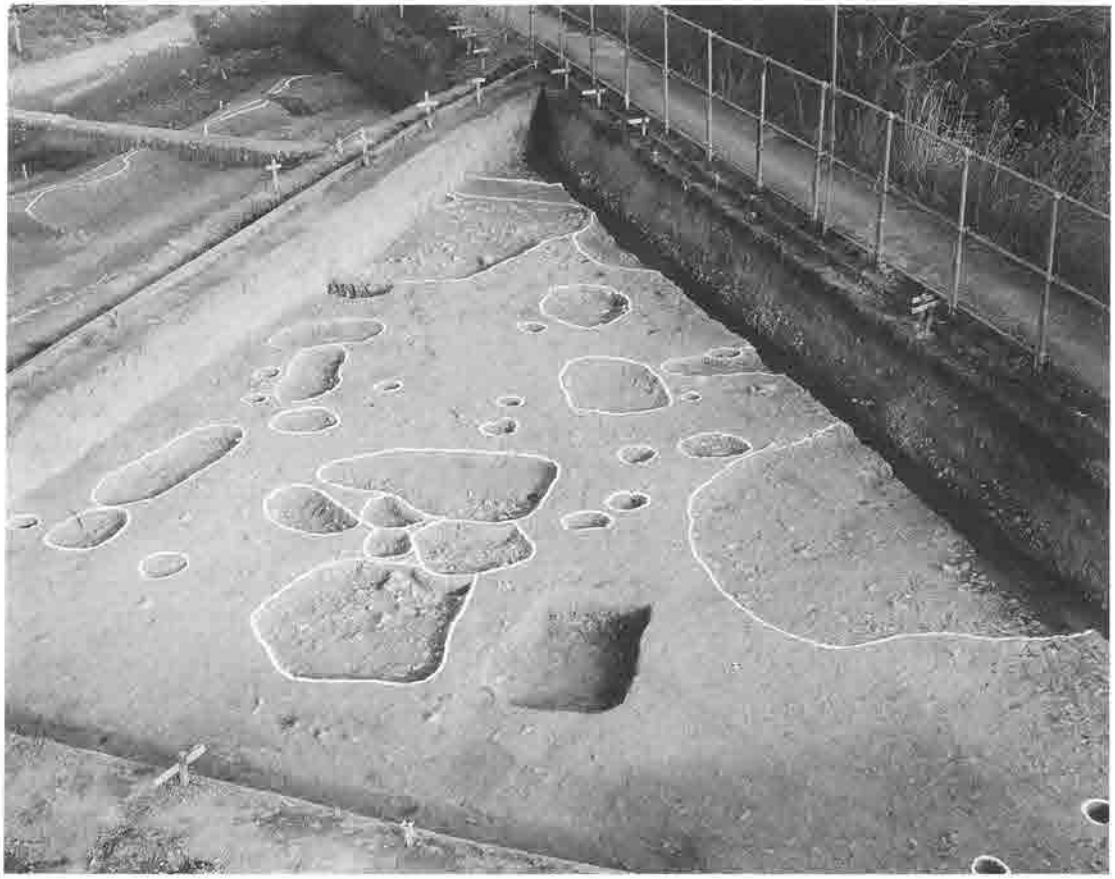
1区　溝04土器出土状況（西から）

1区　溝04セクション1（東から）

1区　溝04セクション3（南東から）



3区　全景（南から）

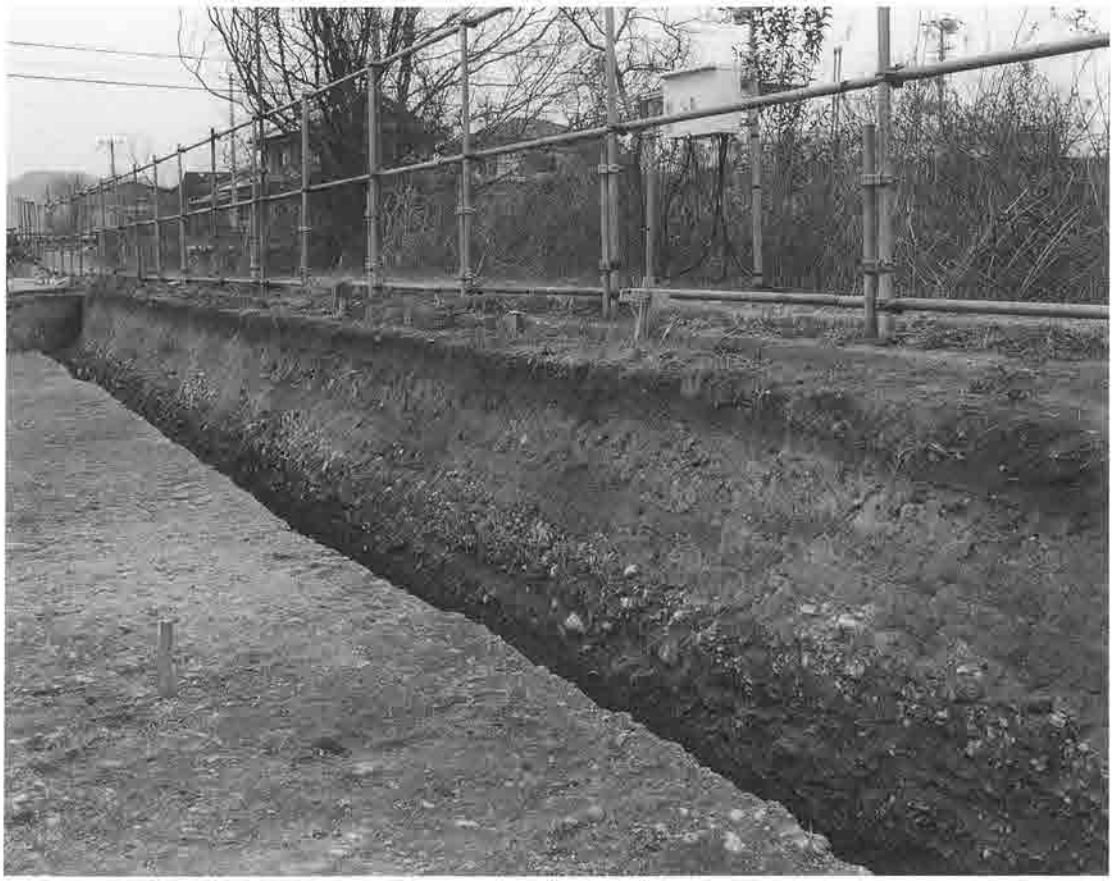


3区　全景（北東から）

3区　土坑68（西から）

3区　土坑72セクション（西から）

3区　土坑87セクション（西から）



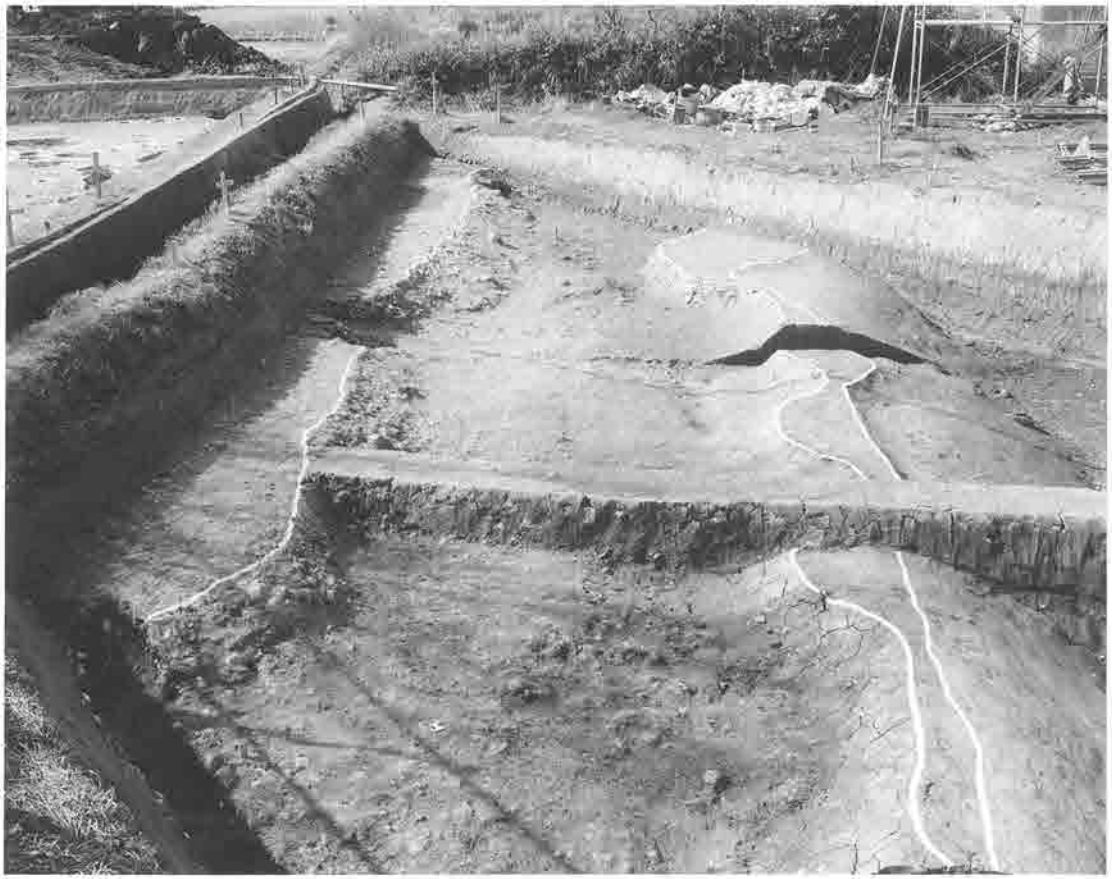
3区　南壁土層（北西から）

4区　第1遺構面全景（東から）

4区　中世古川護岸（北から）

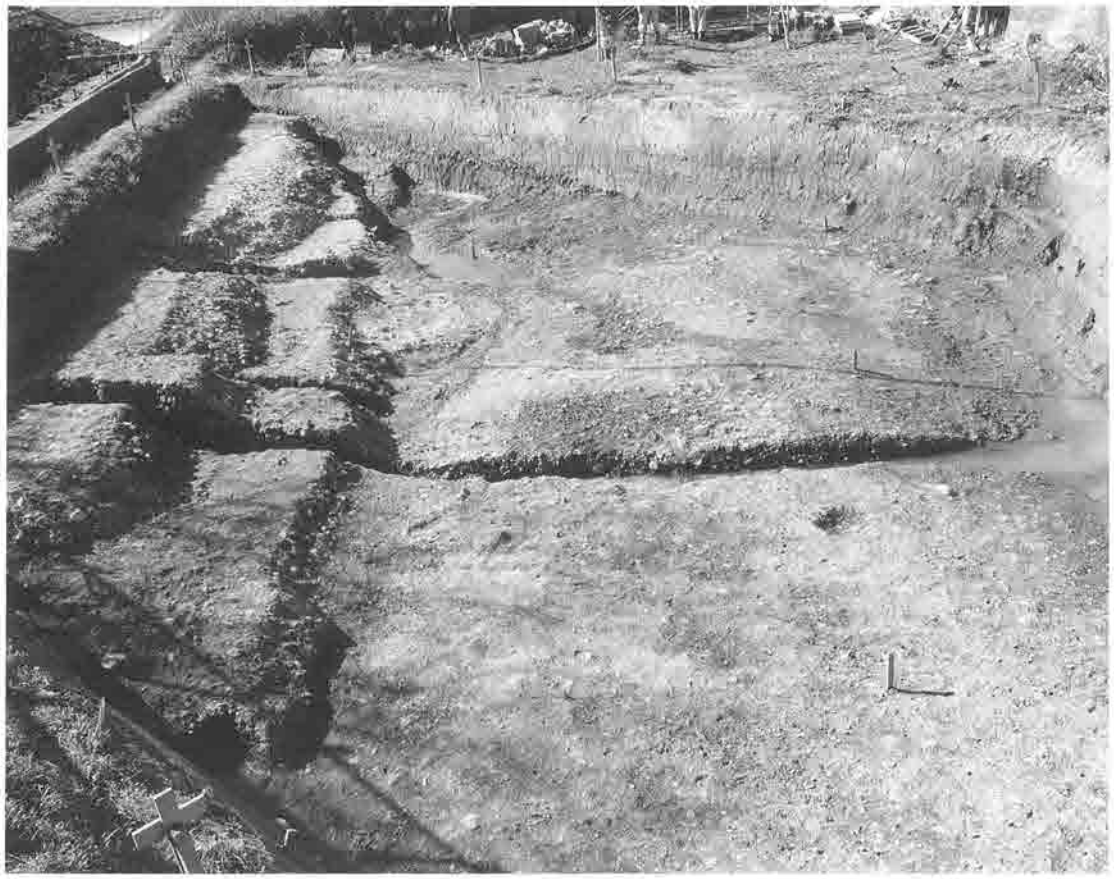
4区　第2遺構面全景（北から）

4区　第2遺構面全景（南東から）

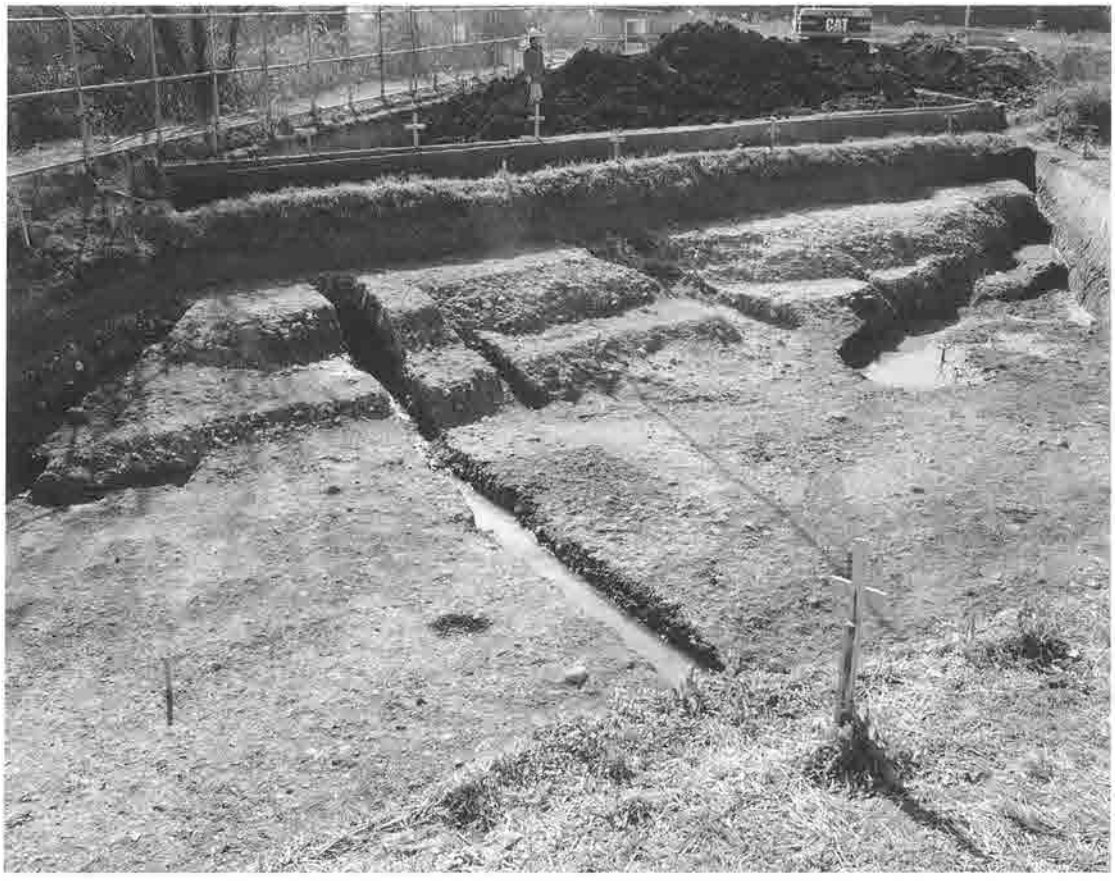


4区　溝102（南東から）

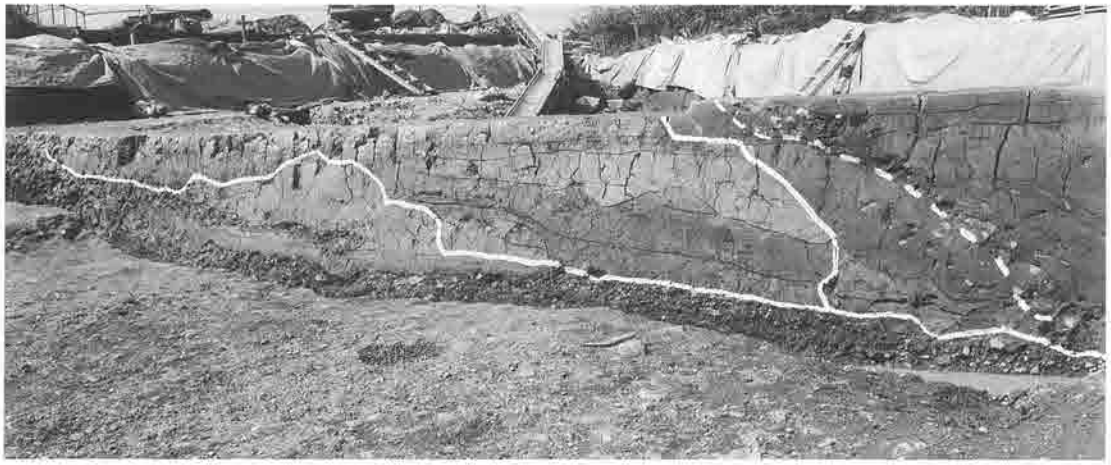
4区　溝103（北から）



4区　最終遺構面全景（南東から）

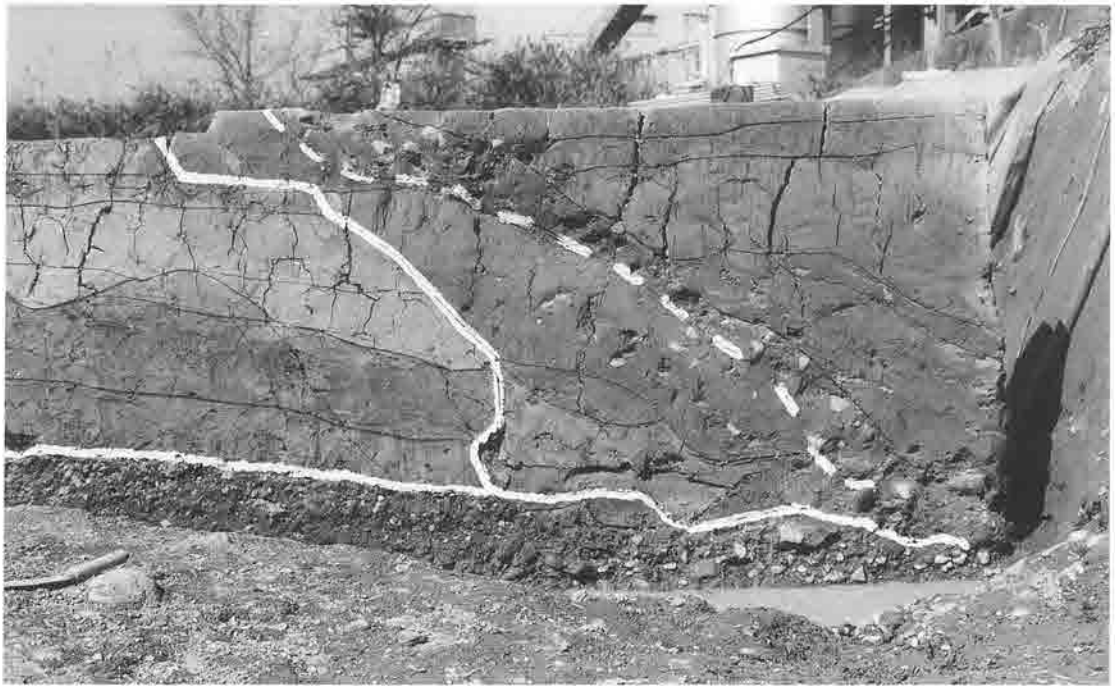


4区　最終遺構面全景（東から）



4区　南北セクション（南東から）

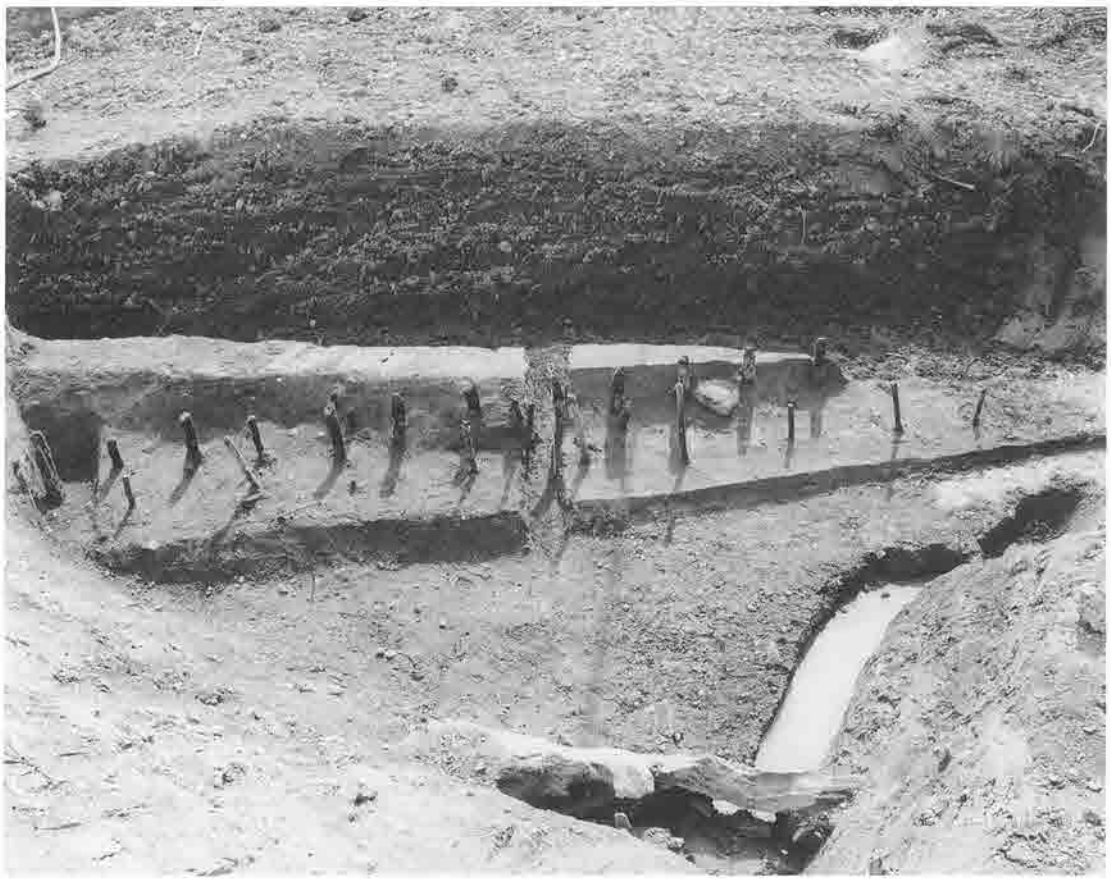
4区　南北セクション溝102部分（南東から）



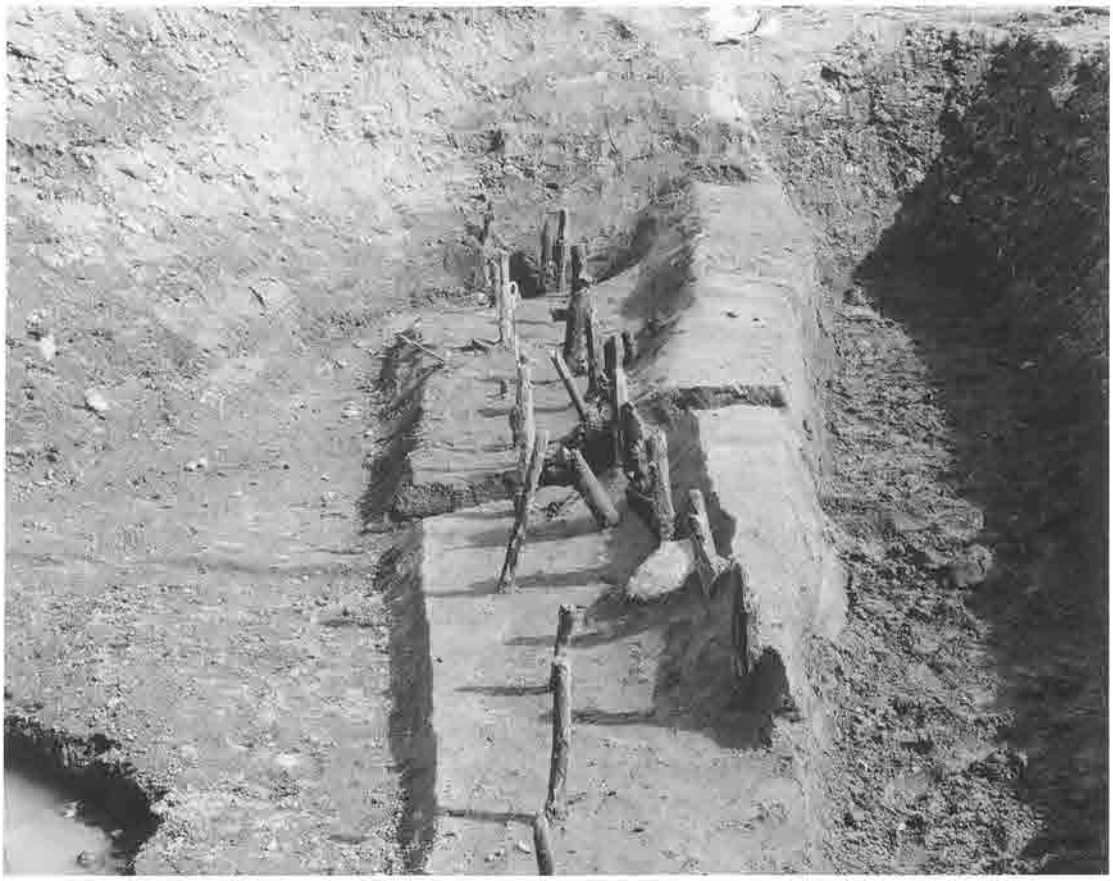
4区　南北セクション中世古川部分（南東から）

4区　南壁土層（北西から）

4区　青灰色Ⅱ層遺物出土状況（北東から）



4'区　近世古川護岸杭列（北東から）

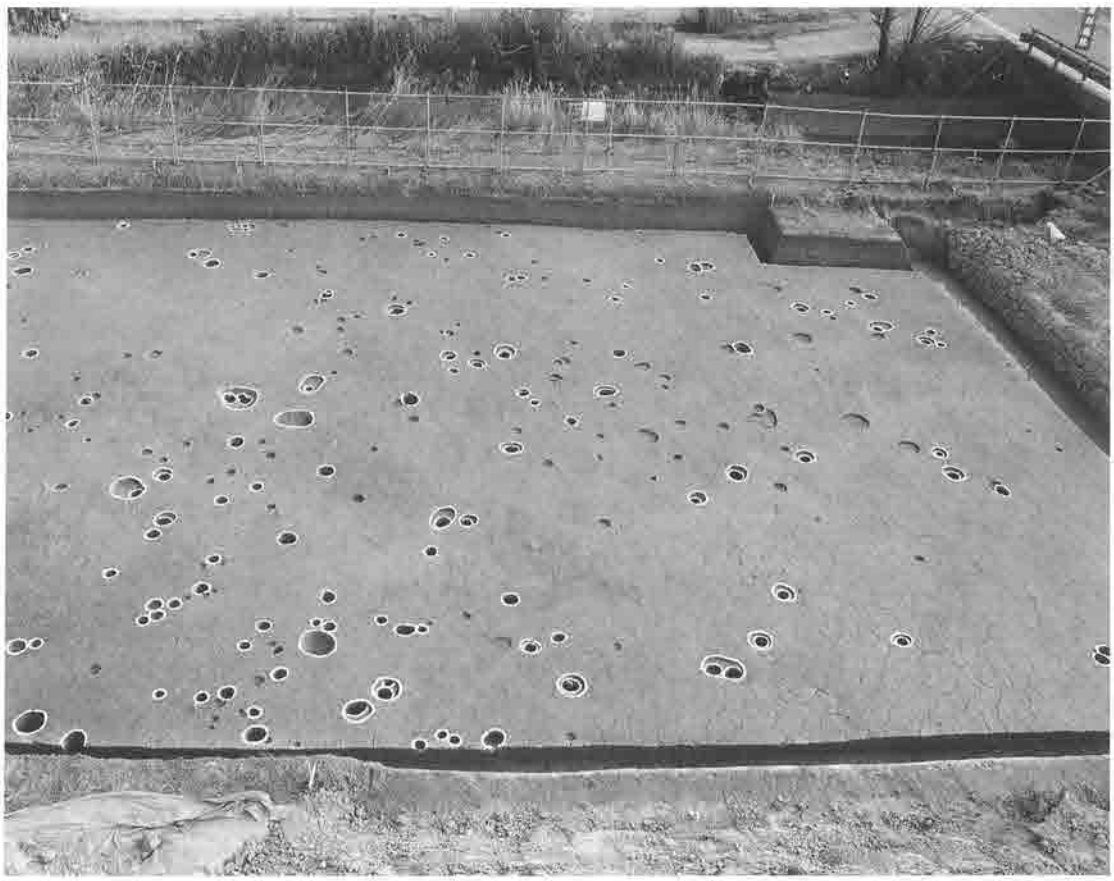


4'区　近世古川護岸杭列（西から）

4’区　東壁土層（近世古川肩ライン）（北西から）

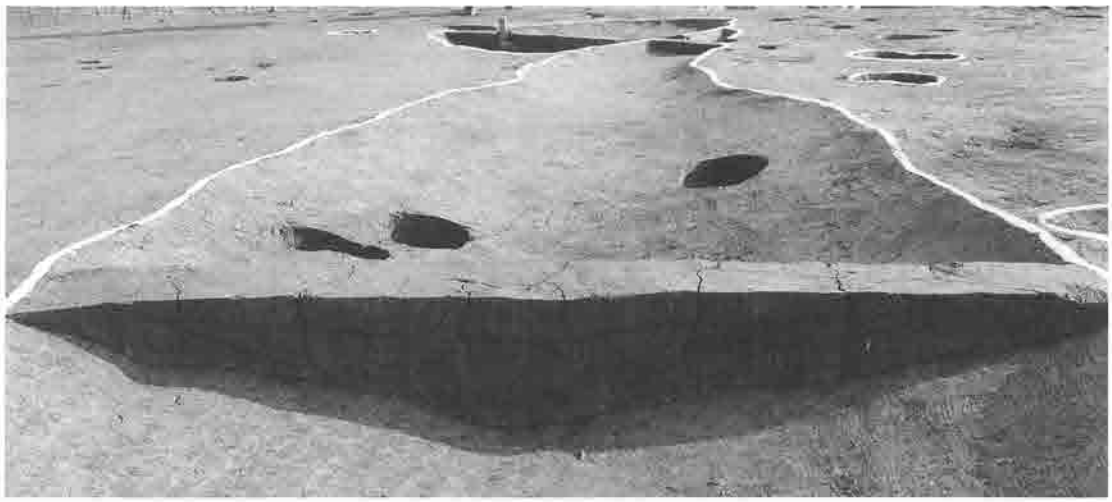
4’区　最終遺構面全景（西から）

5・6区　3層鋤溝群（東から）

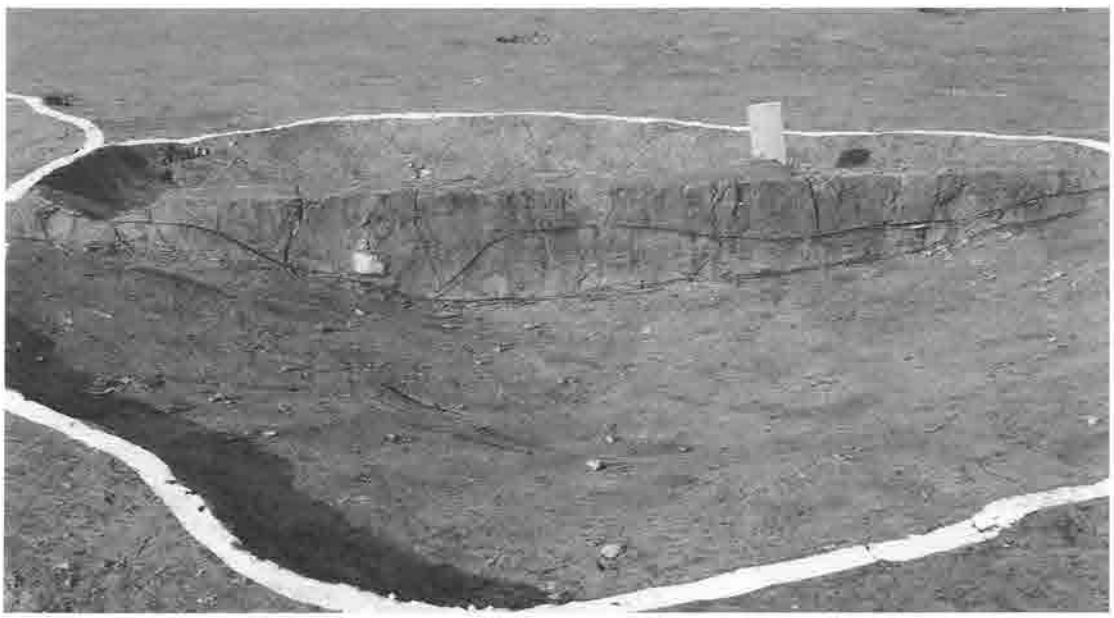


5・6区　4層上面柱穴群（北から）

5・6区　5層上面全景（西から）

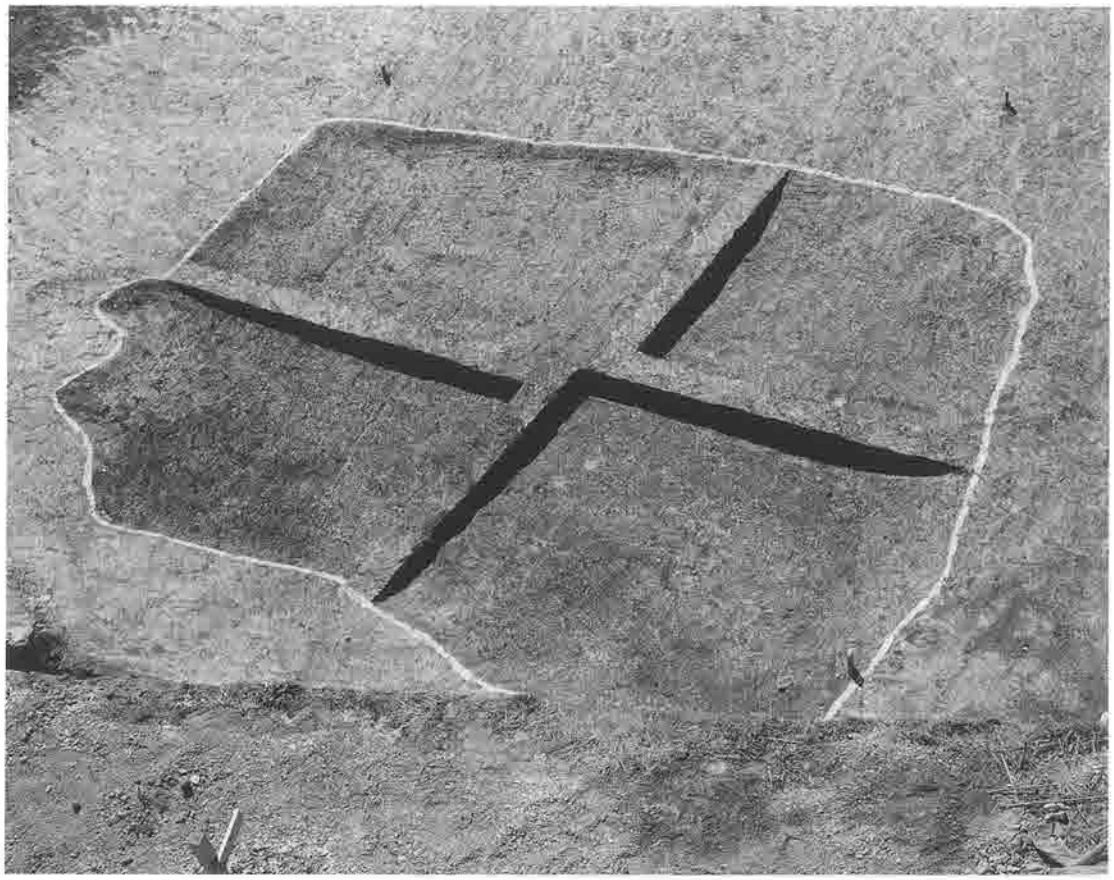


6区　土坑207東西セクション（南から）

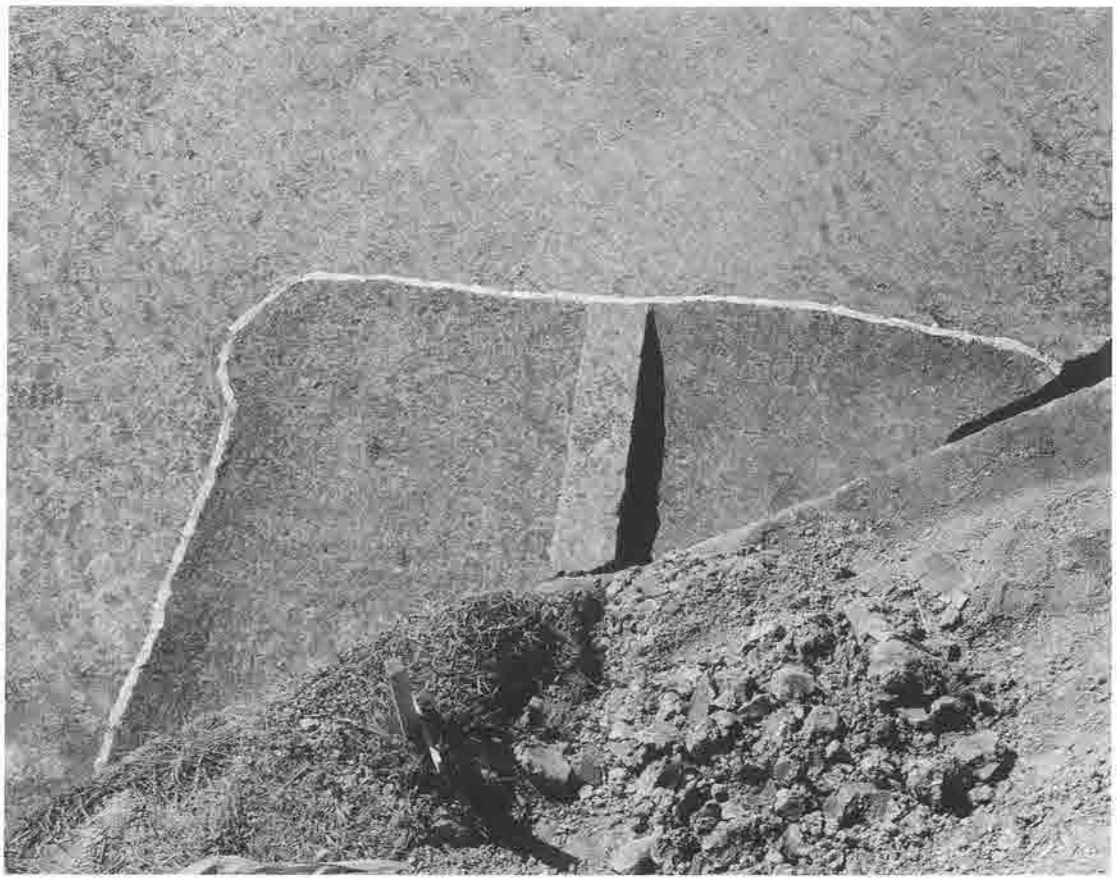


6区　土坑206南北セクション（東から）

5～8区　全景（西から）



6区　8層上面土坑220（北から）



6区　8層上面土坑221（北から）

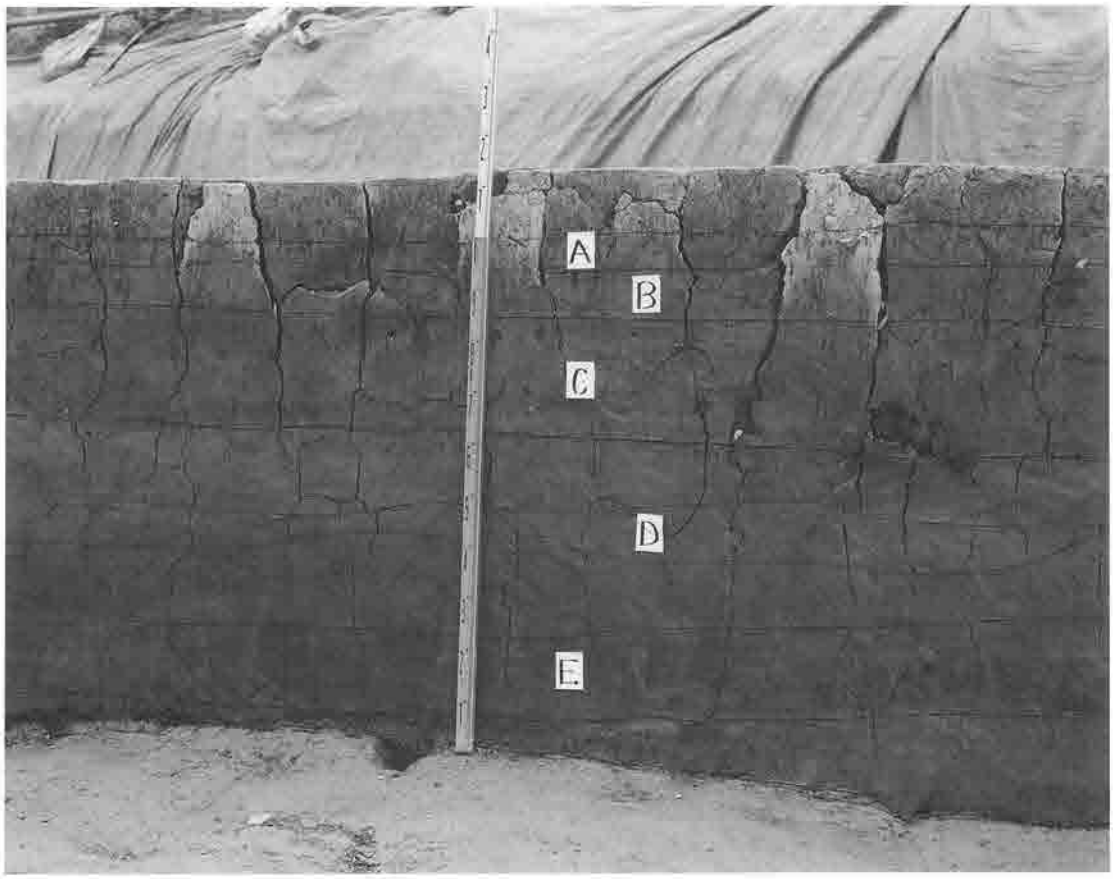
7・8区　旧河道203全景（西から）

7・8区　旧河道203全景（北西から）

7区　旧河道203内橋脚（？）杭列（西から）

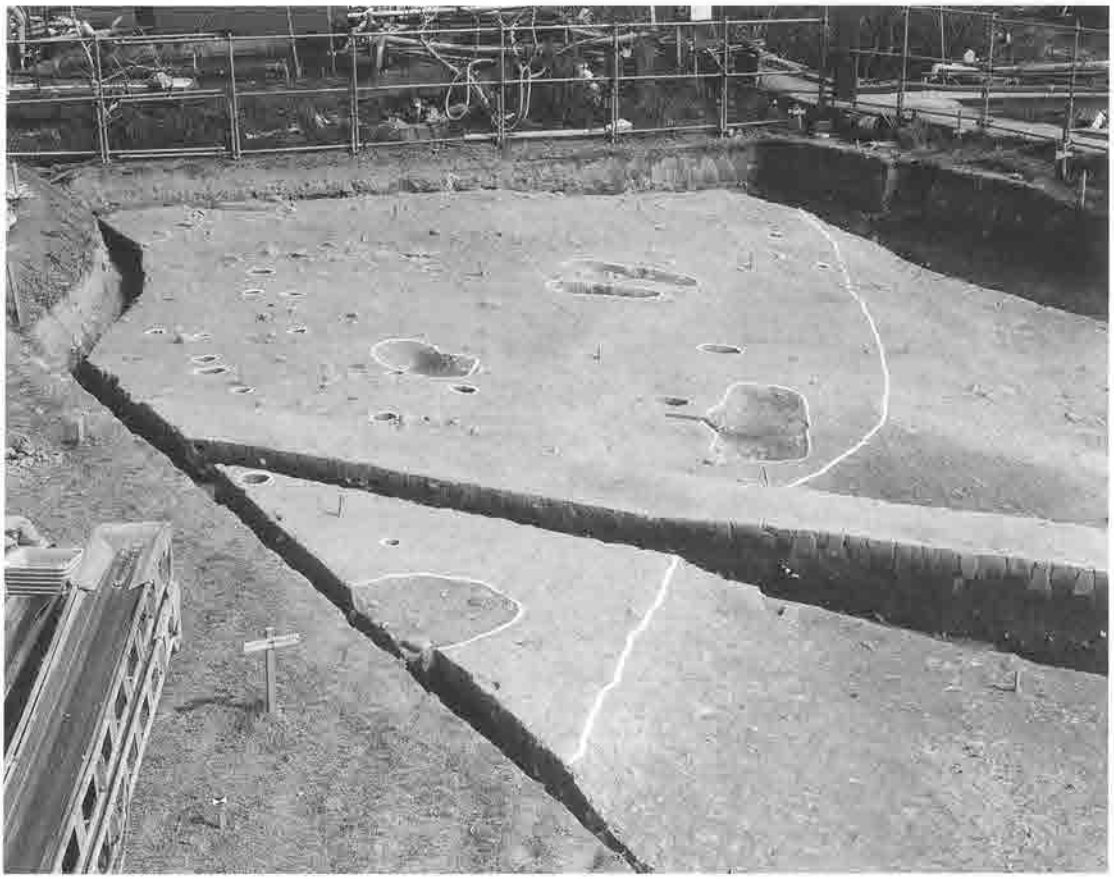
7区　旧河道203内橋脚（？）杭列（南から）

7・8区　セクション①（西から）



7区　旧河道203堆積土層（北西から）

8区　溝208全景（北東から）



8区　縄文遺構群（北西から）

8区　土坑211・212（北東から）

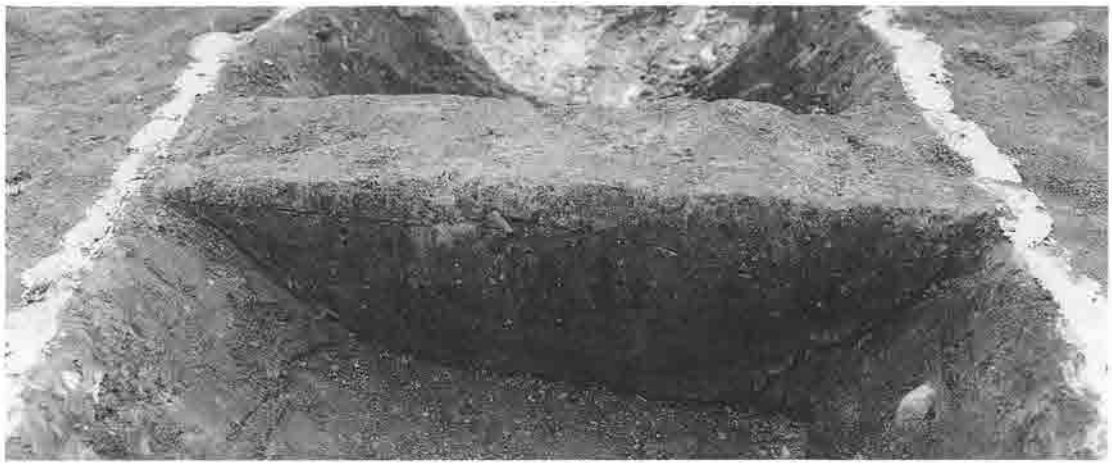
8区　土坑211セクション（北から）

8区　土坑212セクション（北から）

8区　土坑218・同セクション（東から）

8区　土坑216セクション（西から）

8区　縄文土器出土状況（南から）

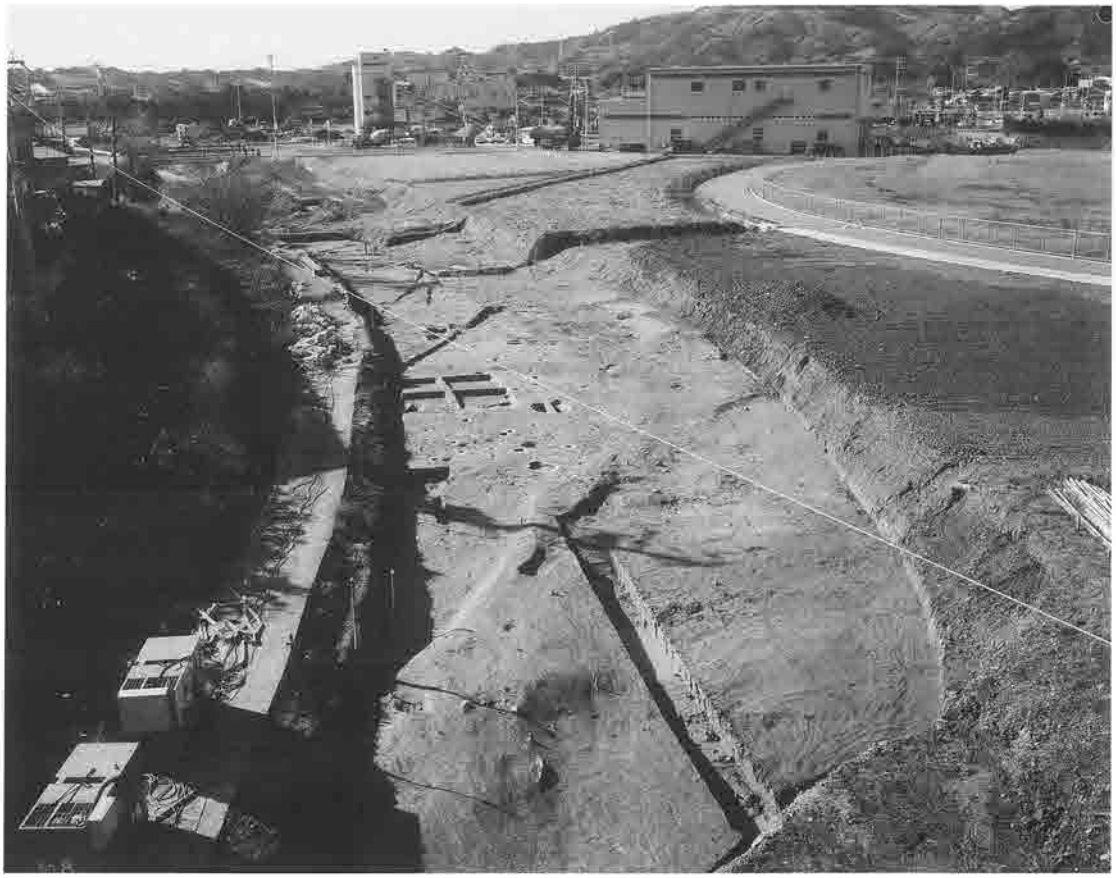


8区　土坑217セクション（北から）

8区　土坑210セクション（西から）

8区　土坑219（南から）

9区　調査前全景（東から）

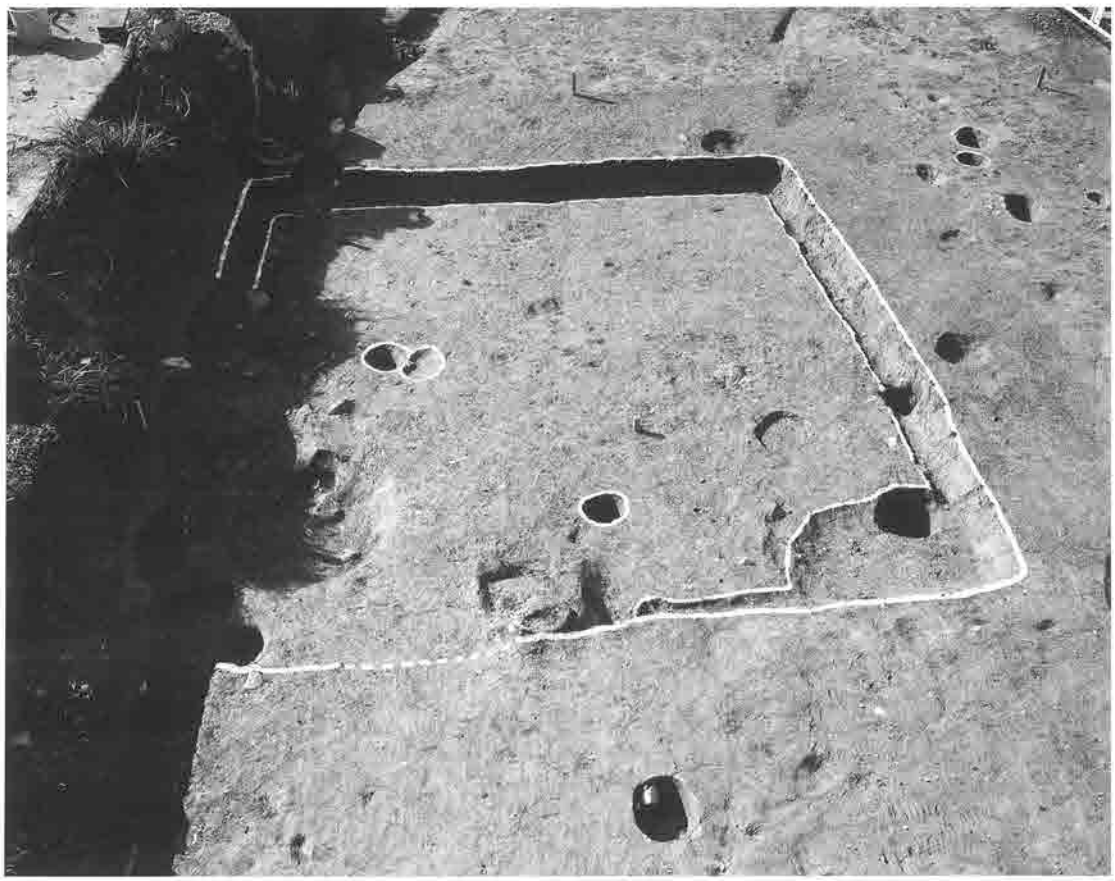


9区　全景（東から）

9区　西半部全景（西から）

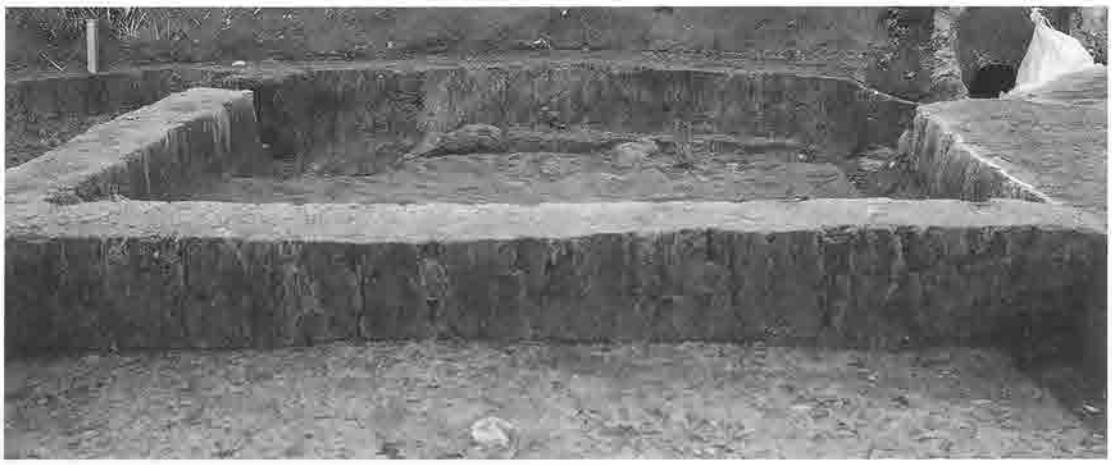
9区　中央部全景（西から）

9区　竪穴住居40検出状況（西から）



9区　竪穴住居40（東から）

9区　竪穴住居40カマド部分（西から）

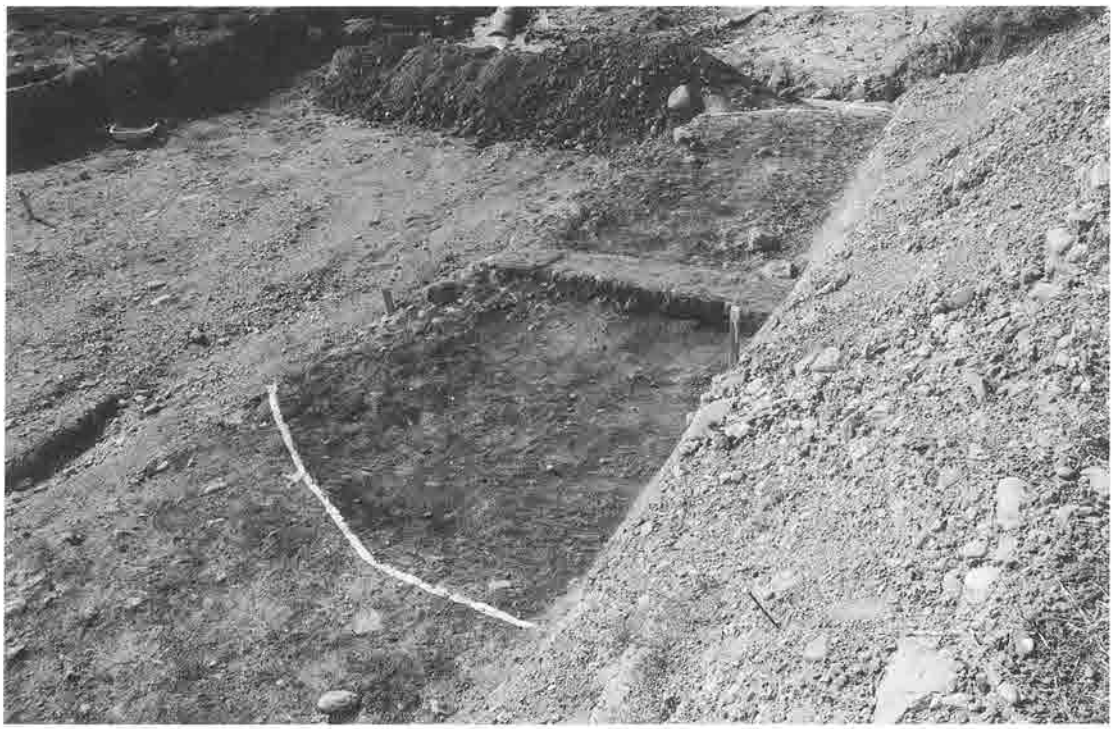


9区　竪穴住居40南北セクション南半部（西から）

9区　土坑104・105（西から）

9区　土坑16（北西から）

9区　土坑34（西から）



9区　土坑100（北東から）

9区　東端落ち込み部溝101（北から）

9区　東端落ち込み部溝102（北から）

2

4

10

11

12

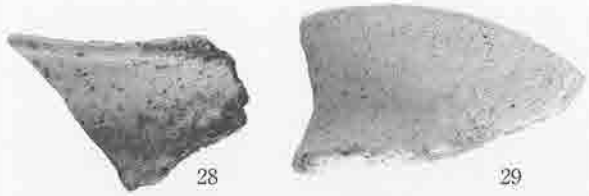
13

15

17

24

25



28

29

32

30

33

36

37

38

40

41

44

53

54

55

56

57

58

59

60

70

72

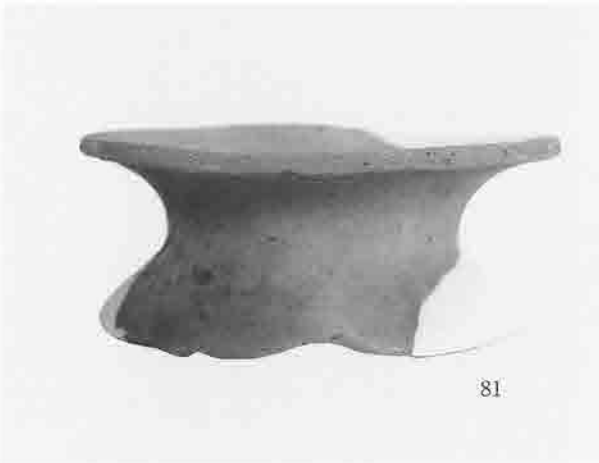
73

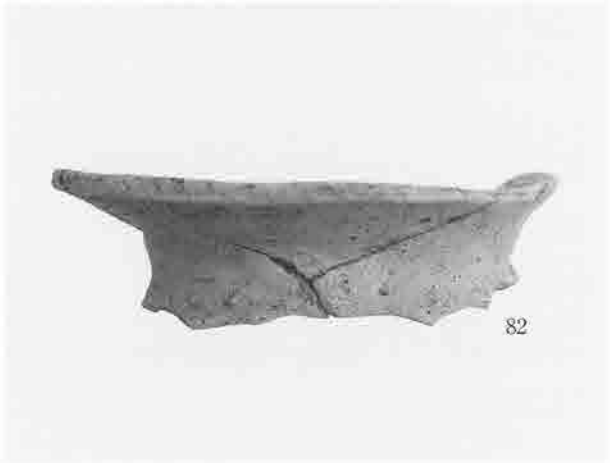
74

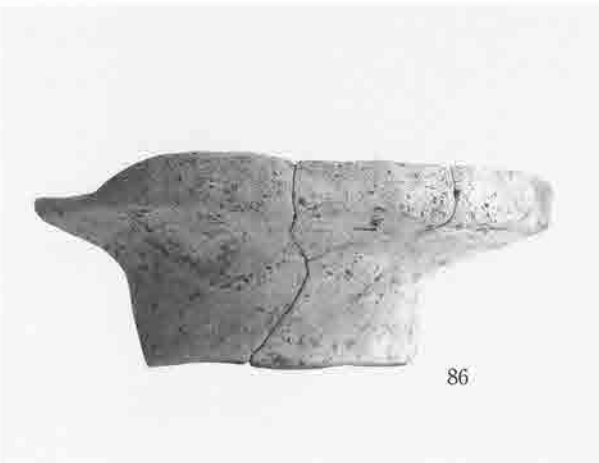
75

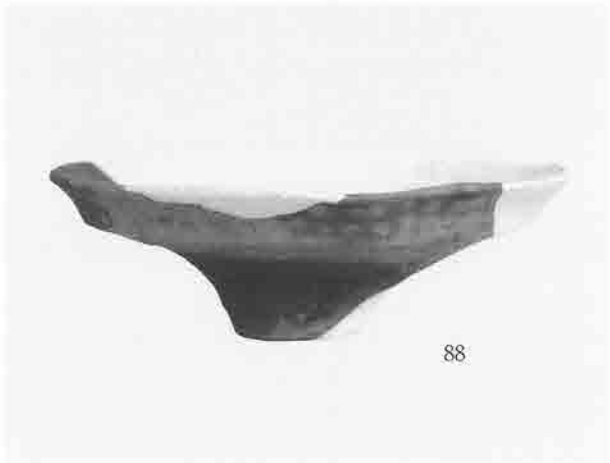
79

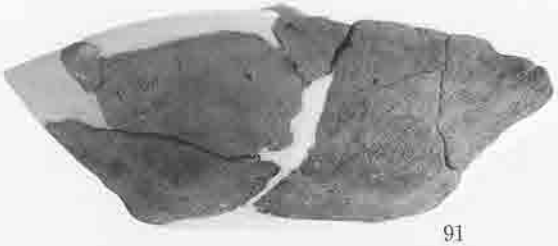
80


81


82


86


88


91

94

95

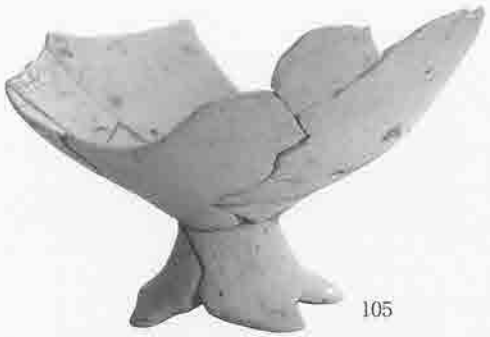
96

97

98

102

103


105

111

113

114

117

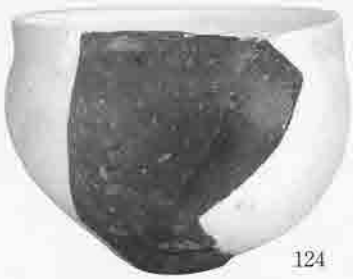
119

120

121

122

123

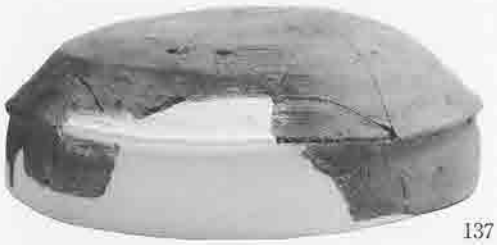

124

125

133

135

136


137

138

140

139

141

147

149

151

152

158

159

162

164

165

168

172

173

174

175

177

178

179

181

182

183

184

188

191

196

197

198

199

202

203

204

205

207

208

209

210

211

213

214

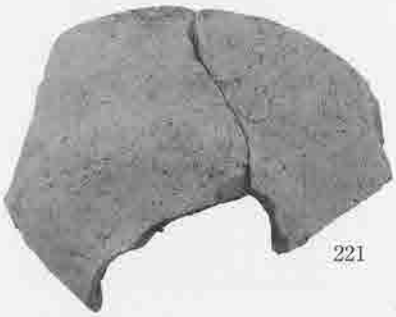
215

216

217

218

220


221

222

228

229

230

231

234

235

238

243

245

246

248

252

255

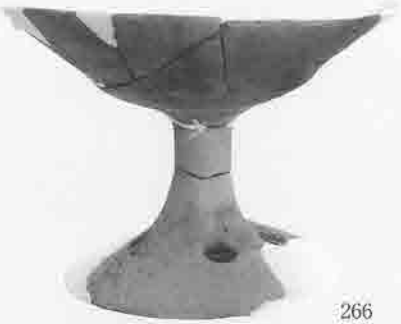
256

258

259

263

265


266

267

268

272

273

274

275

276

277

279

281

283

286

288

290

291

292

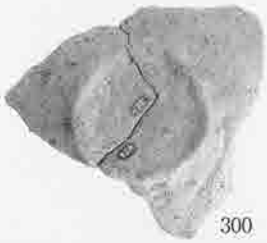
293

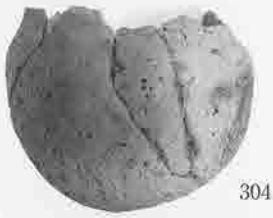
294

296

298

299


300


304

306

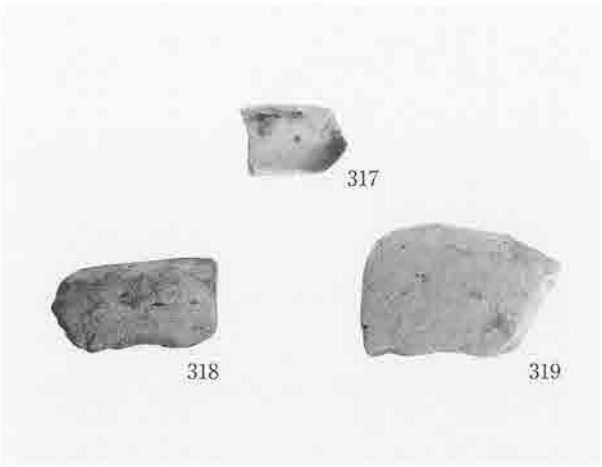
307

308

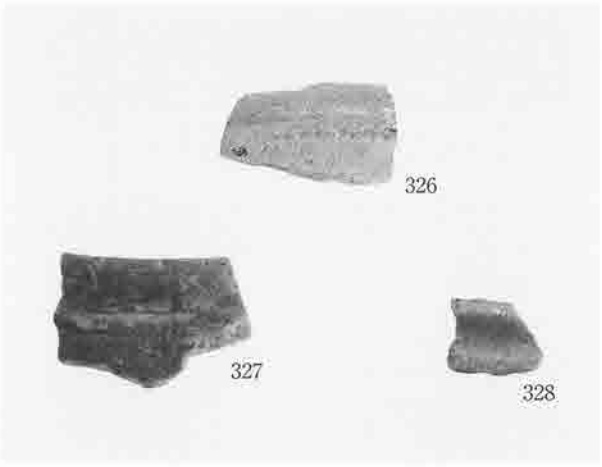
312

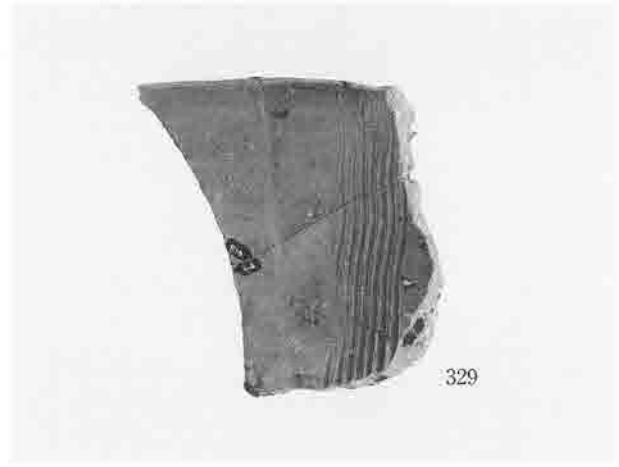
314

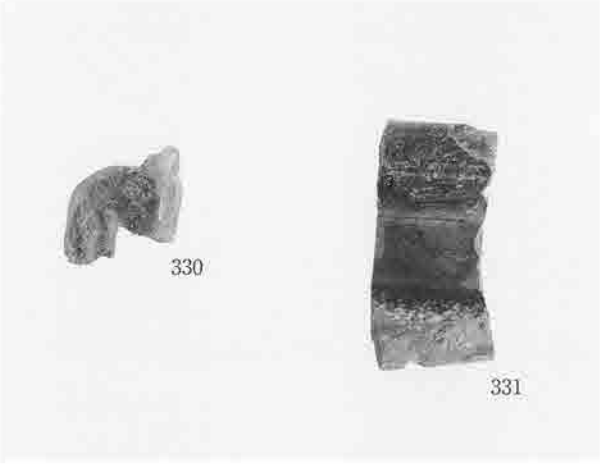
316

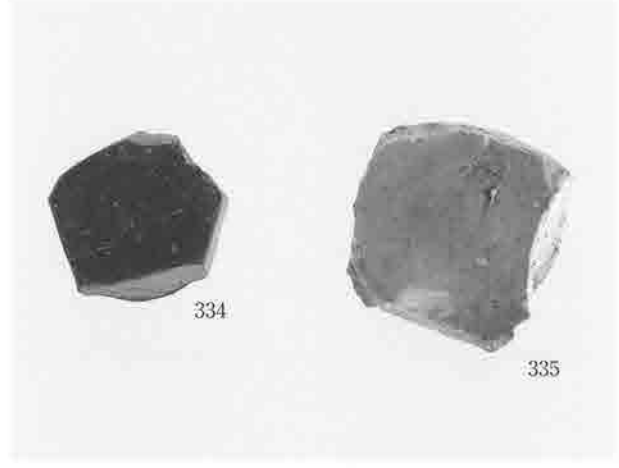

317
318
319

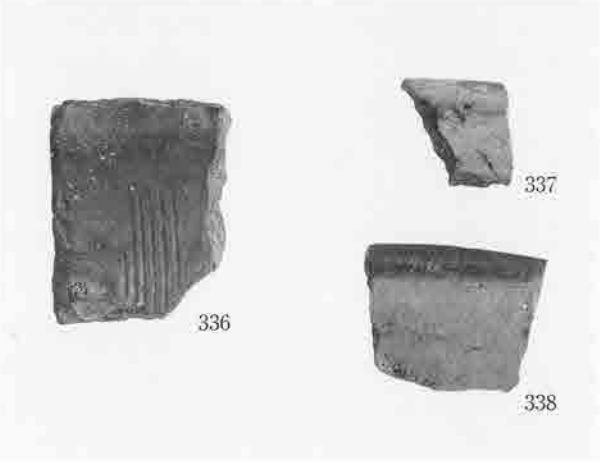
320
321
322

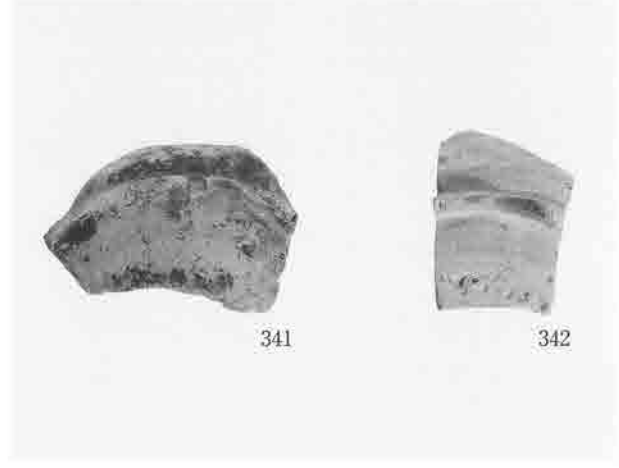

326
327
328


329


330
331


334
335


336
337
338


341
342

343

345

347

348

349

351

356

358

359

361

369

370

371

376

377

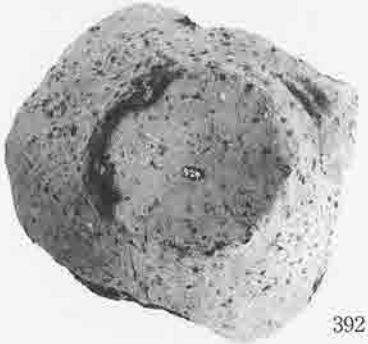
382

383

385

386

387


392

395

396

404

405

406

407

408

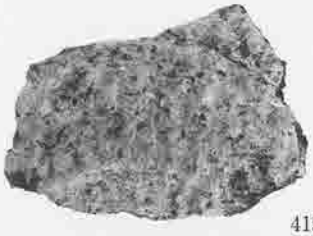
409

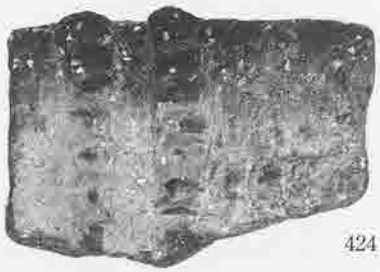
410

411

412

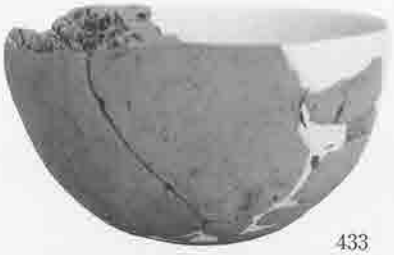
414


415


424

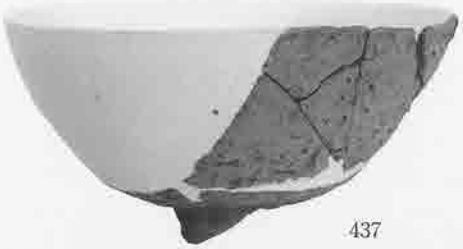
427

428


433

434

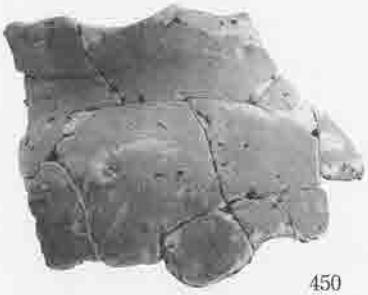
435


437

443

447

448


450

457

458

461

460

465

報告書抄録

ふりがな	とくぞうちくいせき
書名	徳蔵地区遺跡
副書名	古川高速道路関連河川改修に伴う発掘調査報告書
編著者名	村田　弘・佐伯　和也
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター
所在地	〒640－8404　和歌山県和歌山市湊571－1番地　　TEL　073－433－3843
発行年月日	西暦　2006年3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
徳蔵地区	和歌山県日高郡みなべ町東吉田	30391	58	33度 46分 22秒	135度 19分 44秒	第1次 20011210～ 20020331 第2次 20041001～ 20041225	3,500	古川高速道路関連河川改修に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳蔵地区遺跡	散布地	縄文時代 古墳時代 中世	土坑 竪穴住居・土坑・溝 河川	縄文土器 土師器・須恵器 土師器・陶器・磁器	古墳時代前期の竪穴住居3棟、古墳時代中期の竪穴住居2棟を検出。また、徳蔵地区遺跡の縄文時代中期の集落の東限を確認した。

徳 蔵 地 区 遺 跡

―古川高速道路関連河川改修に伴う発掘調査報告書―

２００６年３月３１日

編集・発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷・製本　西岡総合印刷株式会社